兵庫県伊丹市

有岡城跡

発掘調査報告書 VI

1988.3

伊丹市教育委員会

駒沢大学考古学研究室

兵庫県伊丹市

有岡城跡

発掘調査報告書 VI

1988.3

伊丹市教育委員会

駒沢大学考古学研究室

序

伊丹の地は，猪名野のただ中にあり，遠く原始時代から現代に至るまで，悠久の歴史を持つ地域として知られています。そして，猪名川の清流を望む平地や伊丹台地のところどころには，先人の足跡を偲ばせる文化財が存在しています。

21世紀を目前にした昨今，国を挙げて未来に向かって大きく飛躍する施策の必要性が叫ばれ，企画，実現されつつある中にあって，私たちの伊丹市においても，明日の住みよい環境づくりのために，さまざまな事業が計画され，建設の槌音が高らかに響きわたっています。

しかし，未来に向かって大きく前進するためには，過去から現在に立ち至った道程を究めることが大切です。そして，それが「歴史を今に生かす市民文化都市の建設」を標榜している市の基本方針を実現するための前提であり，文化財保護事業の原点でもあることは申すまでもありません。

とくに，伊丹市域の中核となっている市街地に所在する有岡城跡と伊丹郷町遺跡は，伊丹市発展の基盤となったかけがえのない文化遺産であり，地下に埋蔵されているこれらの遺跡を調査し，記録・保存していくことは私たちの使命でもあります。

こうした中で，昭和61年度には市内中央6丁目において，近畿郵政局による伊丹郵便局庁舎増築工事計画がなされ，敷地内の発掘調査を実施することになりました。

この調査の実施にあたっては，駒沢大学考古学研究室の協力を得て，同大学の倉田芳郎教授を団長として伊丹郷町遺跡調査団を編成していただき，昭和61年8月から約3カ月にわたる現地調査と62年1月から1カ年余りの整理作業を実施していただき，ここに，その調査成果を報告書として刊行されることになったことは，誠に慶賀に堪えません。

末尾になりましたが，今回の調査の実施にあたって全面的なご協力をいただいた近畿郵政局，ならびに遠路東京よりご来伊いただき，ご尽力くださった倉田芳郎教授・太田喜美子先生をはじめ，夏休みを返上して猛暑の中，早朝より夜遅くまでご苦労いただいた駒沢大学考古学研究室の皆様方に対し，深甚なる敬意と感謝の意を表し，発刊のことばといたします。

昭和63年3月

伊丹市教育委員会

教育長　佐　坂　茂　男

例　　言

（1）　本書は，兵庫県伊丹市中央6丁目510-1に所在する，伊丹郵便局庁舎増築工事に伴う，有岡城跡遺跡の第32次発掘調査報告書である。

（2）　発掘地域は，私鉄阪急電鉄伊丹駅の東側 300m，ＪＲ西日本鉄道伊丹駅より西側500mに位置し，伊丹市の中心街にあたる。往古は，「伊丹郷町」と呼称されていた範囲内のため，遺跡発掘調査期間中は，伊丹郷町遺跡としていた。本書の刊行にあたり，伊丹市社会教育課・大手前女子大学の調査の関連から，名称を有岡城跡第32次発掘調査とした。

（3）　発掘調査は，委託事業として，駒沢大学文学部教授倉田芳郎を団長として，伊丹郷町遺跡調査団を編成した。調査は，駒沢大学文学部教授倉田芳郎を担当者として実施した。

（4）　発掘調査は，1986年8月1日から同年10月24日まで実施した。伊丹市社会教育課の調査担当者には，小長谷正治氏があたられた。調査員には，太田喜美子・国見徹・鈴木裕子・村上伸之があたり，駒沢大学考古学研究室の学生有志を補助調査員として実施した。

（5）　整理調査は，1987年1月15日から1988年2月29日まで，約1か年実施した。整理調査員には，太田喜美子・国見徹があたり，秋田明美・小長谷薫・陳玉莉・駒沢大学考古学研究室の学生有志を補助調査員として実施した。

（6）　遺物の実測は，秋田明美・小長谷薫・陳玉莉が行ない，遺物トレースを秋田明美，遺構トレースを小長谷薫が担当した。

（7）　本文の執筆は，各文末に明記した。

（8）　遺構の写真撮影は，小西直樹・森原明廣が担当した。遺物の写真撮影は，稲葉昭智・鍋島直久・荒井一彦が分担した。

（9）　本遺跡の資料は，伊丹市教育委員会に保管されている。

（10）　本文中に使用した挿図のうち，Fig.3・4の古絵図は，『伊丹資料業書6』の「伊丹古絵図資料集成，本編・別録」（昭和57年）より転載した。

（11）　本書の編集作業は，倉田芳郎の責任のもとに，太田喜美子・小長谷正治が行なった。

（12）　本文執筆に関して，遺跡出土の陶磁器の鑑定を，九州陶磁文化館学芸員大橋康二氏，同じく愛知県陶磁資料館学芸員仲野泰裕氏にお願いした。記して感謝の意を表するものである。

（13）　本発掘調査・整理調査にかかわる調査団組織は次のとおりである。

団　長　倉田　芳郎（駒沢大学文学部教授）

委　員　寺社下　博（埼玉県熊谷市教育委員会）

調査員　太田喜美子（駒沢大学文学部講師）

国見　　徹（立正大学大学院生）

鈴木　裕子（駒沢大学卒業生）

村上　伸之（佐賀県有田町教育委員会）

補助員　秋田　明美・荒井　一彦・石井　幹夫・泉　直子・稲葉　昭智・大谷　喜好・小長谷薫・小西　直樹・酒入　信子・阪上　啓美・陳　玉莉・土田　智恵子・鍋島　直久・似内　和世・平野　利佳・星野　実・森原　明廣・八木　規子・李　　津

遺 構 凡 例

（1） 各遺構の名称は，原則として北東隅交点を用い命名した。
（2） 重複関係にある同一遺構は，北からａ・ｂ・ｃを付して区別した。
（3） 遺構の版組みは，原則として北を基準にして行なった。
（4） 遺構は原図1/20・1/10を使用し，縮尺1/3を基本としたが，大きさに応じて1/2・1/4を用いた。
（5） 遺構の平面図は，上端を実線・下端を一点鎖線で示した。重複については古い遺構を点線で，新しい遺構は実線で示した。
（6） 遺構断面図の標高は，すべてｍ単位で示した。
（7） 石組・礎石等の石は，すべて投影図である。

遺 物 凡 例

（1） 遺物は，原則として縮尺1/3で示した。しかし，鉄鏃玉等の１cm 弱の遺物は，３倍で実測し，1/1で示した。
（2） 土器・陶磁器の実測図は，４分割法を用い，右側1/2に外面，左側1/2に内面および断面を記録した。また，残存状況によっては，土器の中心を算出し，180°回転して作図したが，この場合は中心線を一点鎖線で示した。
（3） 器形・文様等で必要な場合は，三角投影法に準拠した図を示した。
（4） 陶磁器の絵付の濃淡は，墨入れの際，濃淡で示した。
（5） 遺物計測値の単位はすべて cm であり，推定の場合は（ ）をつけた。
（6） 遺構および遺物の色調は，農林省農林水産技術会議事務局監修　財団法人日本色彩研究所色票監修『新版　標準土色帖』1973年を用いて判別した。

目　次

第1章　調査の経緯と経過 …… 1

第2章　遺跡の概要 …… 3

第3章　調査の概要 …… 9

第4章　遺　構 ……23

濠……23

庭園遺構……23

L－4池跡……24

L－3溝（L－4瓦溜）……24

J－3石組……28

J－2石列……30

K－3石列……30

J－3瓦列……31

J－4瓦列……32

建物跡……33

J－4礎石……36

K－3礎石……36

K－4礎石……36

L－2礎石……36

L－3礎石……37

K－3礎石列……37

K－2瓦管……37

井　戸……39

H－2井戸……39

K－2井戸……39

埋　桶……39

J－3埋桶……39

K－2埋桶……39

L－2埋桶……40

溝……40

K－2溝……40

土　坑……40

F－2区土坑群……40

F－2A土坑……41

F－2B土坑……41

F－2C土坑……41

G－2土坑……41

G－3区土坑群……41

G－3A土坑……41

G－3B土坑……44

G－3D土坑……44

G－3E土坑……44

I－2区土坑群……44

I－2A土坑……44

I－2B土坑……44

I－2C土坑……44

I－2D土坑……45

I－2E土坑……46

I－2F土坑……46

I－2G土坑……47

I－2H土坑……47

I－2I土坑……47

I－2J土坑……47

I－2K土坑……47

I－2L土坑……47

I－2M土坑……48

I－2N土坑……48

I－2O土坑……49

I－2P土坑……49

I－2Q土坑……49

I－2R土坑……49

I－3区土坑群……49

I－3A土坑……49

I－3B土坑……50

I－3C土坑……51

I－3D土坑……51

I－3E土坑……51

I－3F土坑……52

Ⅰ－3 G土坑……52
Ⅰ－3 H土坑……52
J－2 区土坑群……52
J－2 A土坑……54
J－2 B土坑……54
J－2 C土坑……54
J－2 D土坑……54
J－2 E土坑……54
J－2 F土坑……54
J－2 G土坑……54
J－3 区土坑群……55
J－3 A土坑……55
J－3 B土坑……55
J－3 C土坑……55
J－3 D土坑……55
J－3 E土坑……55
J－3 F土坑……55
J－4 土坑……55
K－3 区土坑群……55
K－3 A土坑……56
K－3 B土坑……56
K－3 C土坑……56
L－2 区土坑群……56
L－2 A土坑……56
L－2 B土坑……56
L－2 C土坑……56
L－3 土坑……57
L－4 区土坑群……57
L－4 A土坑……57
L－4 B土坑……57
小穴列……57
L－2 A小穴列……57
L－2 B小穴列……57
J－3 方形竪穴状遺構……58

第5章　遺　物 ……59
Ⅰ期の出土遺物……59
Ⅱ期の出土遺物……61
Ⅲ期の出土遺物……75
遺構外出土の遺物……85
出土遺物表…… 89～110

第6章　伊丹郷町遺跡随想……111

挿　　図

Fig. 1　遺跡位置図 ……4
Fig. 2　有岡城惣構図 ……5
Fig. 3　寛文九年伊丹郷町絵図 ……7
Fig. 4　天保十五年伊丹郷町分間絵図 ……8
Fig. 5　調査区設定図 ……9
Fig. 6　遺構全体図 ……11～12
Fig. 7　土層図（1）……13
Fig. 8　土層図（2）……14
Fig. 9　第Ⅰ期の遺構 ……18
Fig. 10　第Ⅱ期の遺構 ……19
Fig. 11　第Ⅲ期の遺構 ……20
Fig. 12　第Ⅳ期の遺構 ……21
Fig. 13　溝等高線図 ……25～26
Fig. 14　庭園遺構実測図 ……27
Fig. 15　J－3 石組実測図（1）……28
Fig. 16　J－3 石組実測図（2）……29
Fig. 17　J－2 石列実測図 ……30
Fig. 18　K－3 石列実測図 ……30
Fig. 19　J－3 瓦列・K－3 A土坑実測図　31
Fig. 20　J－4 瓦列実測図 ……32
Fig. 21　L－4 瓦溜実測図 ……32
Fig. 22　K－2 瓦管実測図 ……33
Fig. 23　礎石建物実測図 ……34
Fig. 24　J－4 礎石実測図 ……35

Fig. 25　K－3 礎石実測図 ……35
Fig. 26　K－4 礎石実測図 ……35
Fig. 27　L－2 礎石実測図 ……35
Fig. 28　K－3 礎石列実測図 ……37
Fig. 29　H－2 井戸実測図 ……38
Fig. 30　K－2 井戸実測図 ……38
Fig. 31　J－3 埋桶実測図 ……39
Fig. 32　L－2 埋桶実測図 ……39
Fig. 33　K－2 埋桶実測図 ……40
Fig. 34　K－2 溝実測図 ……41
Fig. 35　G－2・F－2 区土坑実測図 ……42
Fig. 36　G－3 A 土坑実測図 ……43
Fig. 37　G－3 D 土坑実測図 ……43
Fig. 38　G－3 E 土坑実測図 ……43
Fig. 39　I－2 区土坑実測図 ……45
Fig. 40　I－3 区土坑実測図 ……46
Fig. 41　I－3 F 土坑実測図 ……48
Fig. 42　I－3 G 土坑実測図 ……49
Fig. 43　I－3 H 土坑実測図 ……50
Fig. 44　J－2 区土坑群実測図 ……51
Fig. 45　J－3 C 土坑実測図 ……52
Fig. 46　J－3 F 土坑実測図 ……52
Fig. 47　J－4 土坑実測図 ……53
Fig. 48　K－3 B 土坑実測図 ……53
Fig. 49　K－3 C 土坑実測図 ……53
Fig. 50　L－3 土坑実測図 ……53
Fig. 51　L－4 A 土坑実測図 ……56
Fig. 52　J－3 方形竪穴状遺構実測図 ……58
Fig. 53　第Ⅰ期の遺物（1）……60
Fig. 54　第Ⅰ期の遺物（2）……61
Fig. 55　第Ⅱ期の遺物（1）……62
Fig. 56　第Ⅱ期の遺物（2）……63
Fig. 57　第Ⅱ期の遺物（3）……64
Fig. 58　第Ⅱ期の遺物（4）……65
Fig. 59　第Ⅱ期の遺物（5）……66
Fig. 60　第Ⅲ期の遺物（1）……68
Fig. 61　第Ⅲ期の遺物（2）……69
Fig. 62　第Ⅲ期の遺物（3）……70
Fig. 63　第Ⅲ期の遺物（4）……71
Fig. 64　第Ⅲ期の遺物（5）……72
Fig. 65　第Ⅲ期の遺物（6）……73
Fig. 66　第Ⅲ期の遺物（7）……74
Fig. 67　遺構外出土の遺物（1）……76
Fig. 68　遺構外出土の遺物（2）……77
Fig. 69　遺構外出土の遺物（3）……78
Fig. 70　遺構外出土の遺物（4）……79
Fig. 71　遺構外出土の遺物（5）……80
Fig. 72　遺構外出土の遺物（6）……81
Fig. 73　遺構外出土の遺物（7）……82
Fig. 74　遺構外出土の遺物（8）……83
Fig. 75　遺構外出土の遺物（9）……84

写 真 図 版

PL. 1 a 調査区遠景
b 西側調査区全景
PL. 2 a J－3 石組全景
b J－3 石組部分拡大
PL. 3 a 遺跡西側調査区終了写真
b 濠土層断面
PL. 4 a 濠出土遺物――陶磁器
b 濠出土遺物――漆椀
PL. 5 出土遺物――陶磁器（1）
PL. 6 出土遺物――陶磁器（2）
PL. 7 出土遺物――陶磁器（3）
PL. 8 出土遺物――陶磁器（4）
PL. 9 a 調査区Ⅱ面全景
b 濠遺物出土状況
PL. 10 a 庭園遺構全景
b 庭園遺構遺物出土状況
PL. 11 a J－3 石組全景
b J－3 石組部分拡大
PL. 12 a L－2 石列
b K－3 石列
PL. 13 a J－3 瓦列
b J－4 瓦列
PL. 14 a K－2 瓦管
b J－4 礎石
PL. 15 a K－3 礎石列全景
b L－2 礎石
PL. 16 a H－2 井戸
b K－2 井戸瓦出土状況
PL. 17 a J－3 埋桶
b K－2 埋桶
PL. 18 a L－2 埋桶
b K－2 溝
PL. 19 a F－2・G－2 土坑群
b G－3 A 土坑
PL. 20 a I－2 土坑群
b I－2 I 土坑
PL. 21 a I－3 C 土坑
b I－3 F 土坑
PL. 22 a I－3 G 土坑
b I－3 H 土坑遺物出土状況
PL. 23 a J－2 土坑群
b J－3 A 土坑
PL. 24 a J－3 B 土坑遺物出土状況
b J－3 F 土坑
PL. 25 a K－3 C 土坑
b L－4 A 土坑遺物出土状況
PL. 26 a J－3 方形竪穴状遺構
b J－3 方形竪穴状遺構出土鏡
PL. 27 第Ⅰ期の遺物（1）
PL. 28 第Ⅰ期の遺物（2）
PL. 29 a 第Ⅰ期の遺物（3）
b 第Ⅱ期の遺物（1）
PL. 30 第Ⅱ期の遺物（2）
PL. 31 第Ⅱ期の遺物（3）
PL. 32 第Ⅱ期の遺物（4）
PL. 33 第Ⅱ期の遺物（5）
PL. 34 第Ⅲ期の遺物（1）
PL. 35 第Ⅲ期の遺物（2）
PL. 36 遺構外出土の遺物（1）
PL. 37 遺構外出土の遺物（2）
PL. 38 遺構外出土の遺物（3）
PL. 39 遺構外出土の遺物（4）
PL. 40 遺構外出土の遺物（5）
PL. 41 遺構外出土の遺物（6）
PL. 42 遺構外出土の遺物（7）
PL. 43 遺構外出土の遺物（8）
PL. 44 遺構外出土の遺物（9）
PL. 45 遺構外出土の遺物（10）
PL. 46 a 第Ⅲ期の遺物（3）
b 遺構外出土の遺物（11）
PL. 47 遺構外出土の遺物（12）
PL. 48 遺構外出土の遺物（13）

第1章　調査の経緯と経過

調査の経緯

本遺跡は，兵庫県伊丹市中央6丁目510-1の伊丹郵便局々舎増築工事予定地内に位置する。遺跡は有岡城跡・伊丹郷町遺跡として周知の遺跡である。今回の調査は，伊丹市教育委員会と大手前女子大学が実施している有岡城跡発掘調査の関連調査として行なわれ，第32次を数える。

1986年7月，駒沢大学文学部教授倉田芳郎は，同大学考古学専攻卒業生の小長谷正治氏（現在伊丹市社会教育課職員）より，伊丹市内での発掘調査予定について電話を受けた。伊丹郵便局々舎増築工事予定地の調査で，発掘対象面積は410m²，調査期間は8月から約2ケ月ということであった。駒沢大学では，毎年夏期休暇中，考古学専攻生による発掘調査を実施しており，時期的には，ちょうど良いということで，早速，組部について話し合いが行なわれたのである。

その結果，倉田芳郎を団長，小長谷正治を主任として，伊丹郷町遺跡調査団を編成し，駒沢大学考古学専攻生有志による調査を実施することになった。発掘調査は，1986年8月1日から同年10月24日まで実施され，貴重な資料を得ることができた。有岡城跡に関連すると思われる濠の検出，巨大な礎石を配した建物跡の検出，往古を偲ばせる庭園遺構の検出等，これまでは関東を中心に発掘を行なってきた，駒沢大学考古学専攻生には，近畿の地で悠久の歴史の一部分を解明できるという好機に恵まれ，またとない体験となった。何層にもわたるこみいった生活面の把握等に手間取り，発掘調査は大幅に延長となってしまった。各方面に多大なるご迷惑をおかけしながら，無事に調査を終了することができた。調査に参加した学生にとって，学生時代の貴重な体験は何物にも換え難い宝物である。感謝の意は言葉では尽しがたい。今後の我々の成長をみていていただきたいとお願いする次第である。

調査の経過

7月31日　先発隊学生5名測量機材を持ち，駒沢大学出発。

8月1日　調査区下見。正午に後発隊と合流。発掘前全景撮影。器材の買入。Grid の設定。

8月2日　2線に第1試掘溝，J線に第2試掘溝，G線に第3試掘溝設定。重機により表土を剔ぐ。K-3 石列確認。建築物の基礎コンクリートが調査区全体に存在。

8月4日　第3試掘溝の攪乱内より銅銭2点出土。排土処理を考慮して調査方法を協議した結果，I線より東側を埋め戻すこととする。

8月5日　I-4 区表土除去。

8月6日　I-2 区・K-2 区・K-4 区・L-2 区・L-4 区表土除去。

8月7日　B.M. を 19.140m に設定。K-2 区・K-3 区・L-2 区に焼土確認。

8月8日　K-3 礎石列検出。

8月10日　J-3 方形竪穴状遺構確認。

8月11日　K-2 埋桶確認。K-3 礎石列実測。

8月12日　K-2区より，K-3礎石列に続く礎石出土。L-2 埋桶検出。J-2 区・J-4 区に試掘溝設定。

8月13日　K-4 礎石検出。J-4 区より，伊丹礫層を掘込む遺構確認。

8月14日　K-2 埋桶検出。J-3 埋桶検出。

8月17日　L-2 礎石検出。

8月20日　調査の進行について協議

8月21日　K-3 石列検出。K-2 区Ⅲ面検出。

8月22日　K-3 礎石・K-4 礎石検出。L-3 溝検出。J-4 区より漆の存在を確認。羽釜片出土。

8月23日　L-4 ゴミ穴土坑・J-3 瓦列確認。

8月24日　J-3 方形竪穴状遺構終了全景写真撮影。

8月25日　I-3 区Ⅲ面検出。

8月26日　K-2 瓦管確認。

8月27日　J-4 溝・I-3 A 土坑検出。

8月28日　I-2 I 土坑検出。

8月30日　トラバース測量。I-2 区土坑群検出開始。K-4 区地表下 138cm において，伊丹礫層確認。

9月1日　M線土層断面より L-3 区において，K-3 礎石・K-4 礎石と対応する礎石確認。

9月4日　Ⅲ面終了写真撮影。

9月6日　K-3 溝より唐津焼皿出土。

9月7日　J-2 土坑群検出開始。

9月12日　L-2 区伊丹礎層確認。

9月13日　前日の雨のため排水作業。

9月14日　L-3 溝状遺構内より L-4 瓦溜確認。

9月16日　I-2 区土坑群終了写真撮影。

9月20日　K-3 溝検出。

9月21日　L-2 溝検出。

9月22日　K-3 土坑検出。I-4 区・J-4 区伊丹礫層検出。

9月23日　K-4 区において漆検出開始。J-4 礎石の根石が，さらに下に続くことを確認。

9月28日　漆覆土上に J-3 石組確認。

9月29日　J-3 石組検出確認。

10月5日　J-3 石組より石仏・五輪塔の転用が多く確認。

10月7日　漆覆土中より，漆器・灰釉皿・骨・木材片等多数出土。J-4 礎石の根石の下より丸枕を検出。漆の等高線図作製開始。

10月10日　調査区東・北・南壁土層断面実測開始。

10月11日　L-3 溝状遺構等高線図作製開始。

10月13日　西側調査区調査終了。埋め戻し。

10月14日　東側調査区，協議の末，伊丹礫層まで重機で掘り下げる。

10月15日　H-2 井戸等，土坑複数確認。2 線以北へ 2m 拡張。

10月19日　漆土層断面実測。漆検出終了。

10月20日　東側調査区終了写真撮影。

10月23日　東側調査区埋め戻し。

10月24日　撤収。

（太田喜美子）

第2章　遺跡の概要

遺跡の立地

伊丹市は西摂平野の北方の奥まったところにあり，東を千里丘陵，西を六甲山地，そして北を北摂山地によって三方を囲まれている。南は尼崎市に向けて開向し，大阪湾までは約10kmの距離である。市の中央部には，北摂山地に端を発する伊丹台地（洪積台地）が南へ長く延びている。伊丹台地は，東は猪名川，西は武庫川によって限られ，南は尼崎市に向かって次第に高さを減じている。

有岡城の位置するところは，この伊丹台地東縁である。伊丹台地の標高は5～40mあり，有岡城の範囲は標高15～20mの間にある。いっけん平坦にみえる伊丹台地も，有岡城の立地する台地東縁は，東側に広がる猪名川低地帯とは比高差10～5mの急崖を呈し，西側・南側についても数mの段差を成している。この段差は伊丹台地の形成と深く結びついている。

伊丹台地は4面から成っている(注1)。北から順に山本面・安倉面・中野面と台地東縁に南北に帯状に延びる上加茂面に分類され，この内，有岡城の立地する上加茂面は，中でも最も高く発達し，他の面との境に段差を生じている。すなわち，有岡城は平城であっても，このような地形を最大限有効に利用して築城されたといえるのである。

有岡城の規模は，東西800m・南北1.5kmで南北に長い不整形を呈しているが，このような平面形をもつ要因も，上記の地形との係り合いの結果とみるべきであろう。

有岡城と周辺の遺跡（Fig. 1）

伊丹市の遺跡は，先に述べた伊丹台地上と猪名川流域に広がる沖積地に各々分布する。伊丹台地の遺跡は，緑ケ丘・桜ケ丘のように台地縁辺部に縄文時代後期頃の遺跡が推定されている。また，それより南やはり台地縁辺部において，最近縄文時代中期の遺跡(注2)が確認された。しかし，いずれも遺跡の断辺であって集落等は発見されていない。他にも台地中央東野地区でも少量の遺物を採集できるので，今後注目していかなければならない地域である。緑ケ丘地区には，古墳群が川西市に向けて分布していたが，自衛隊施設の造成などによって，現在はみることができない。この一帯は緑ケ丘遺跡と呼んでいるが，その時代はむしろ奈良時代，伊丹廃寺建立以降に中心がある。伊丹廃寺(注3)（8）は，長年の発掘調査により，西に塔・東に金堂の並ぶ法隆寺式の伽藍配置の古代寺院であることが判った。現在は国指定の史跡として保存整備されている。近年の調査は主に伽藍周辺に及んでいて，奈良時代の掘立柱建物や中世城郭（9）の一部を検出している。

台地西縁には，僧行基が建てた昆陽施院の法灯を継ぐとされる昆陽寺（7）がある。台地南縁には，古墳時代中期の帆立貝式古墳である御願塚古墳が残されている。以前はこの周辺に尼崎市域にかけて多数の古墳が分布していたが，現在は柏木古墳などが残る程度で，消滅した古墳が多い。

猪名川流域の沖積地には，縄文晩期～弥生時代にわたる口酒井遺跡がある。口酒井遺跡は尼崎市田能遺跡の北方500mに位置し，田能遺跡も含めて猪名川流域の弥生文化を示す重要な遺跡である。口酒井遺跡の北側には，古墳時代～中世にかけての遺物が広く分布し，現在は岩屋遺跡・森本遺跡と名付け調査を進めている。森本遺跡の中には，有岡城跡と関係の強い森本居館跡（6）がある。今のところその遺構を確認していないが，称名寺付近をその遺址として推定している。

弥生時代以降の主要遺跡

1．調査地点　2．有岡城主郭　3．岸墓跡　4．鴨塚墓跡　5．女郎塚墓跡　6．森本居館跡　7．見陽寺　8．伊丹廃寺跡　9．猪ケ山城跡
10．尼崎城跡　11．猪名寺廃寺跡　12．塚口城跡　13．富松城跡

Fig.1　遺跡位置図

有岡城に関係する遺跡には，荒木村重の嫡子，村次の居城尼崎城（10）が南約7kmの距離にある。塚口城（12）は，「塚口寺内」とも言われ，かつては寺内町として発展したとされるが，後に城郭化し，村重の出城としても使用された。『信長公記』によると，有岡城攻めの折に逆に信長の将，惟任五郎左衛などが陣を張っている。富松城（13）も同様に有岡城攻めの陣として使用されたと伝わる。

伊丹城と有岡城の歴史（Fig. 2）

天正2年（1574年）荒木村重により滅ぼされた伊丹氏は，中世を通して伊丹に本拠を置いた武士集団の主として君臨している。伊丹氏については，森本氏系図「北河原文書」にその手がかりを求めることができる。これによると初代は加藤右馬允親俊で，その孫右馬入道親元から伊丹氏を名のっていて，その時期は鎌倉中期頃と推定されている。伊丹氏はその後，摂津守護の下にあって次第に勢力を伸ばしていったと考えられる。この頃の伊丹氏の居館がどこであったかは資料が無いのでうかがいしることはできない。

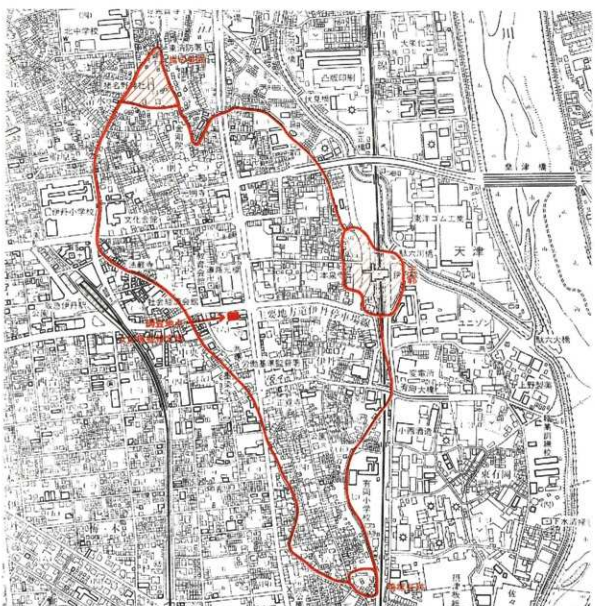


Fig. 2　有岡城惣構図

伊丹城の名は文和2年（1353年）の「森本基長軍忠状」に初見される。これによると，この時伊丹城は，南朝方に直接攻撃を受けたが，守りぬいたという内容である。この記事から推定すると，当時伊丹城は居館というだけでなく，堀や土塁柵などの防禦施設を構えた敵の攻撃に耐えられる程度の施設は設けていたのであろう。

応仁の乱後，伊丹城は度々，敵の攻撃を受けている。永正17年（1520年）と享禄2年（1529年）には落城の憂目を見ており，そして3度目の落城が荒木村重によるものである。伊丹氏は永禄11年（1568年）信長が義昭を奉じて上洛すると，信長方につき，茶川城の和田惟政・池田城の池田勝正とともに摂津の支配を命じられた。しかし信長は将軍義昭を追放すると，茨木城にいた荒木村重に命じて，池田氏・伊丹氏を攻撃させたのである。

天正2年（1574年），伊丹城に入城した村重は，信長の命で「有岡城」と改め，城造りに着手する。この時，村重が旧来の伊丹城をどのように改造したのか，最も注目されるところである。有岡城が総構の城であったという説は，鈴木充氏が論文「伊丹城」（地域研究いたみ第4号）の中で明らかにされているが，その後の調査でもこれは裏付けられている。ここで問題にされるのは，総構が荒木村重によって初めて構築されたものか，それともそれ以前，伊丹氏の頃よりあったものかということである。これについては，鈴木氏は前掲書の中で，摂津都市堺や今井町，富田林などの寺内町の例をあげ，中世末の郷町は濠や土塁を巡らすことが通例とする観点にたち，既に伊丹城の頃には総構の形が存在し，村重はこれをより強固なものにしたと説明されている。天正4年（1576年）に有岡城を訪れた宣教師ルイス＝フロイスは有岡城のことを次のように書き残している。「我等は宿の口に伊丹と称し甚だ壮大にして見事なる城に着きたり…（中略）…かれはまた新造せるかれの壮麗なる城を日中に観せんと欲し…」。この中で「新造せる壮麗なる城」は村重の有岡城をさす言葉であり，村重が，旧来の城にかなり手を加えたとみるべきであろう。

村重の在城期間は，天正7年（1579年）で終わる。村重は信長にそむいたため，逆に信長によって攻められたのである。この信長による有岡城攻めは，1年あまりの長期に渡り続けられた。籠城10ヶ月を経たところで村重は嫡子村次のいる尼崎城に脱出した。村重の去った有岡城では，城内に内通者がでて，ついに落ちたのである。この間の経緯を「信長公記」によると，上臈（女郎）塚を守る中西新八郎の内応によって，上臈塚が落ち，ここを破られた有岡城はもろく，きしの取出（岸の砦）の渡辺勘大夫・ひよどり塚（鵯塚）の野村丹後なども次々に打たれたという。

有岡城が総構えをもつ城であることは，先にも述べたが，この総構の要所を守ったのが，岸の砦・女郎塚砦・鵯塚砦である。「信長公記」にあるように長期に渡る籠城戦も，総構え線上でくりひろげられていたのである。現在，岸の砦は猪名野神社境内地として土塁・堀を残め，鵯塚砦は小高い塚となって残っている。女郎塚砦ではその跡を残していないが，蟲桀寺にある女郎塚の碑から推察して，この付近に比定されている。丁度，今調査地点は女郎塚砦の比定地に東接するところで，検出した濠もその遺構ではないかと考えている。

有岡城は，村重退城後，池田信輝が嫡子之助が給わり，そして天正11年（1583年）に池田信輝父子が美濃に転封されるにおよび廃城となった。有岡城の跡は，その後の伊丹郷町の繁栄のもとに次々にその姿を消していった。現在はその一部を残すのみであるが，江戸時代に描かれた，伊丹郷町の絵図（Fig.3・4）や発掘調査によって当時をわずかに偲ぶことができる。（小長谷正治）

註1　前田和夫・藤田保夫『伊丹の地質形成』『伊丹市史第一巻』昭和46年　伊丹市教育委員会
註2　藤井直正「有岡城跡・伊丹郷町Ⅰ」昭和62年　大手前女子学園有岡城跡調査委員会
註3　高井様三郎「摂津伊丹廃寺」昭和41年　伊丹市教育委員会

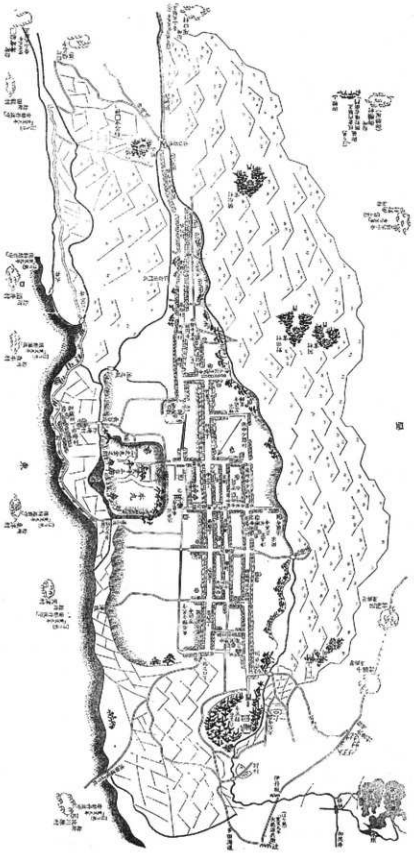


Fig. 3　寛文九年（1669年）伊丹郷町絵図

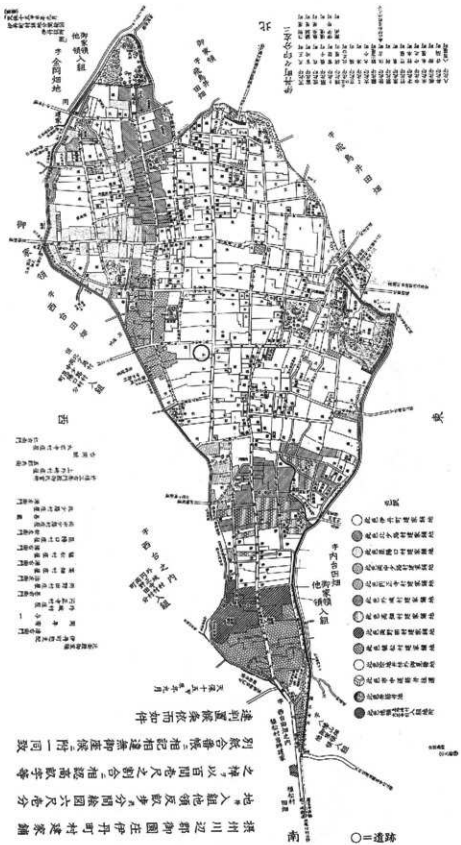


Fig.4　天保十五年（1844年）伊丹郷町分間絵図

第3章　調査の概要

調査方法 (Fig.5)

郵便局増築工事予定地は，有岡城跡・伊丹郷町遺跡として周知の遺跡であるが，本地点には以前消防署があったことなどから，かなり破壊されていることも予想され，また遺跡の状況を確実に知る上でも本調査前に試掘調査を実施する必要があった。試掘調査の期間は8月1日～20日までとし，一部表土は重機を使用して調査することにした。

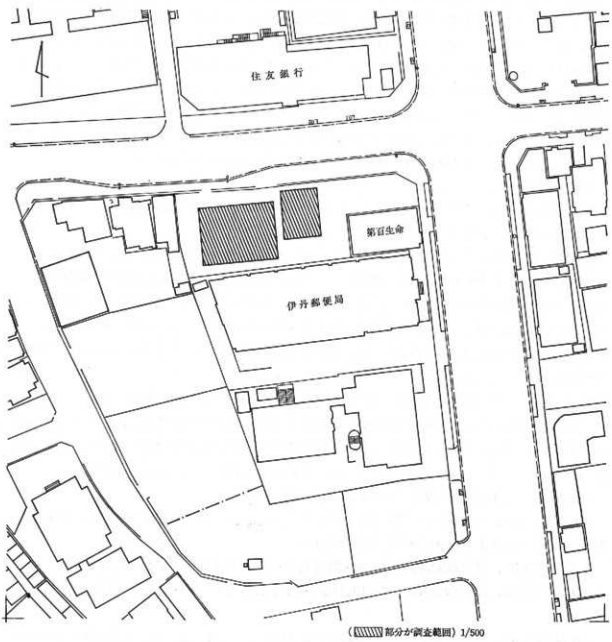


Fig.5　調査区設定図

試掘調査の結果，やはり消防署建設時のコンクリート基礎が深く入り，上部は著しく撹乱を受けていたが，その下には江戸時代後期の土層が整然と遺存していることが確認された。さらにこの下層には，それ以前の土層が厚く堆積していることも予想されたため，8月21日以降本調査を開始することにした。

本調査を開始するにあたり，排土の置場を設けなければならず，一度に全面を調査することができなかった。そこで最初に西側 300m² を調査し，後に東側 110m² を調査する方針をたてた。実はこの排土置場設定のために半分掘っては埋める方法では，同面積を調査する場合でも土砂の反転や調査上の手間を考えると，時間がかかるし，経費もかかる。大学の夏期休暇のうちに調査完了を考えていたので，なおさらのこと問題は大きかった。しかし，他に排土置場も無いため，次善の策として実施したのである。

西側地区は，東西がⅠ線からM線，南北2線から5線までの範囲とした。近・現代の堆積物は重機によって除去し，それ以後は人力により掘削する方法をとった。重機による掘削で検出した最初の面では，礎石列や井戸・土坑などを調査したが，いずれも時代は新しく，古くても江戸末期で，新しくは昭和の遺構も出土した。そのため至急下層の状況を知ることが必要になり，北壁に沿ってJ線，LとK線の間に，試掘溝を入れることにした。この試掘溝により，最終面（地山層）までには数層が存在することが判ったため，各面ごとに調査し，記録をとることにした。結局，調査区に4つの面が存在し，最終の面では，有岡城に関係する濠を調査した。西側調査区の調査では予定以上に時間を費やしたため，東側調査区の 110m² は，残念ながら最終面のみの調査となった。

土層 (Fig. 7・8)

本遺跡の層序については，土層図 (Fig. 7・8) とその後に土層註記表を載せているが，土層の数が多く繁雑なため，ここで若干の補足説明をしておきたい。

本遺跡の土層の堆積には，2つの特徴がある。一つは，地山層（伊丹礫層の直上にある黄褐色粘質土）の上に堆積した1mを超える厚さの土層は，そのほとんどが安土桃山時代以降の堆積を示しており，しかも，家屋の建て替えの度に盛られた整地層であること。二つは，通称地山と呼称している黄褐色粘質土は，無遺物層で，これ以下にも遺物は認められないこと。このうち初めの整地層については，江戸時代に因ると認められる部分が大半を占め，濠などが認められた安土桃山時代以前に相当する整地層はわずかである。

江戸時代には，その初期から連綿と建物が建てられていたことが，今回の調査で明らかとなった。建て替えも数度にわたって繰り返されている。その度に新たに土を入れて整地をしたり，廃瓦を敷地内に埋めたり，瓦廃棄土坑から掘り出された土を周囲にまき散らしたりしている。そのために，整地層は同一面であっても一様ではないのであって，上記の土層の繁雑さが生じたのである。

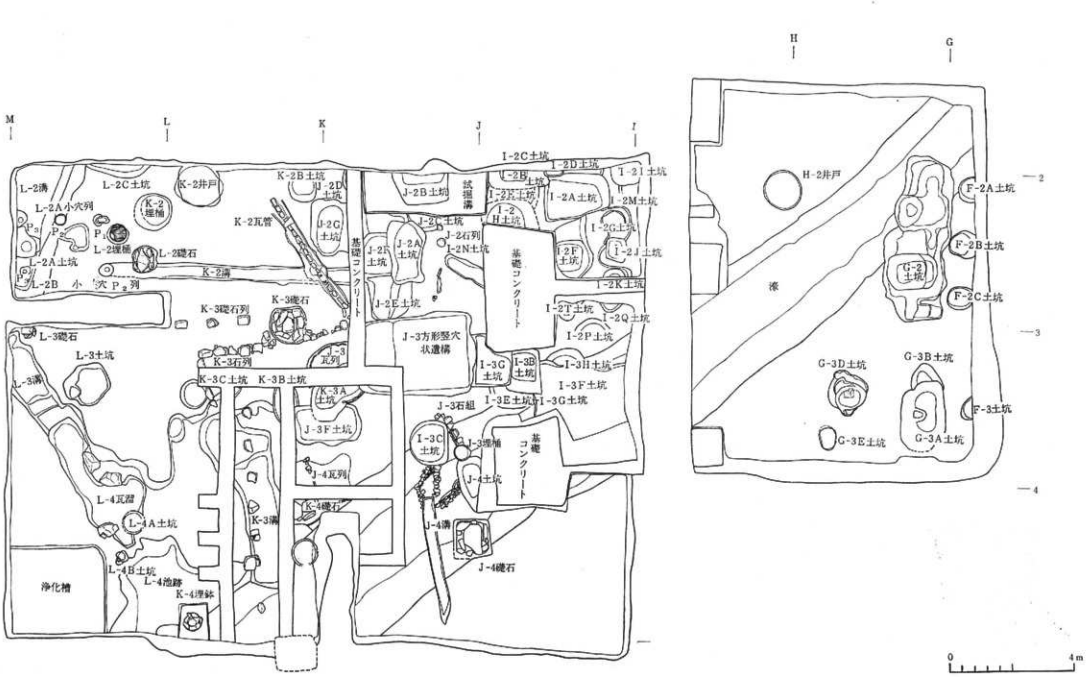
調査の結果，第Ⅰ期から第Ⅳ期までの生活面を検出している。

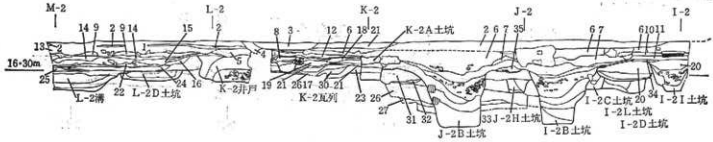
第Ⅰ期生活面は，地山上面で検出した遺構面である。検出遺構には濠が挙げられるが，東側調査区東壁では，地山より1つ上の層から掘込まれている。

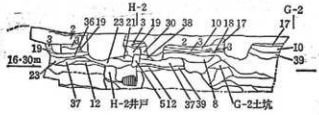
第Ⅱ期生活面は，東壁 (Fig. 8) では，30・31層上面・西壁 (Fig. 8) では，20層上面である。

第Ⅲ期生活面は，北壁 (Fig. 7) では，19層上面・西壁では，7層上面・南壁 (Fig. 8) では，74層上面である。

第Ⅳ期生活面は，表土を除去した最初の面の呼称である。この面では，幕末以降近代に至る間の遺構が検出されているが，大きく撹乱を受けている。およそ示標とした層は，北壁付近に広がる挠土層


M
L
K
J
I
H
G
L-2溝
L-2C土坑
K-2井戸
K-2B土坑
J-2D土坑
J-2B土坑
試掘溝
I-2C土坑
I-2D土坑
I-2I土坑
I-2A土坑
I-2M土坑
L-2A小穴列
K-2埋桶
K-2瓦管
J-2C土坑
J-2G土坑
J-2A土坑
J-2I土坑
J-2石列
I-2N土坑
基礎コンクリート
I-2F土坑
I-2J土坑
L-2A土坑
L-2埋桶
L-2礎石
K-2溝
L-2B小穴P₃列
I-2K土坑
K-3礎石列
K-3礎石
J-2E土坑
I-2T土坑
I-2Q土坑
L-3礎石
L-3土坑
J-3方形竪穴状遺構
I-2P土坑
K-3石列
J-3瓦列
I-3G土坑
I-3B土坑
I-3H土坑
L-3溝
K-3C土坑
K-3B土坑
K-3A土坑
I-3F土坑
J-3石組
I-3E土坑
I-3G土坑
J-3F土坑
I-3C土坑
J-3埋桶
J-4瓦列
J-4土坑
L-4瓦溜
L-4A土坑
K-3溝
K-4礎石
J-4溝
J-4礎石
L-4B土坑
L-4池跡
浄化槽
K-4埋鉢
H-2井戸
F-2A土坑
F-2B土坑
G-2土坑
F-2C土坑
溝
G-3D土坑
G-3B土坑
F-3土坑
G-3E土坑
G-3A土坑
0
4m





北壁土層図

0 4m

Fig.7 土層図(1)

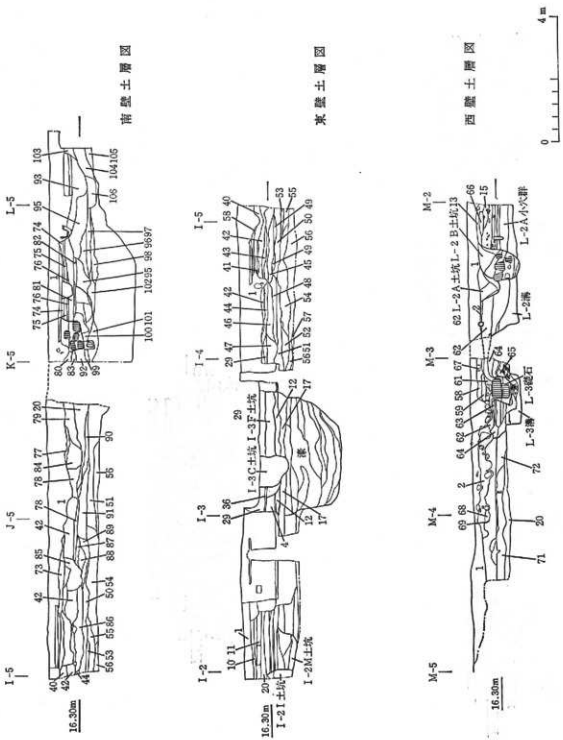

南壁土層図
東壁土層図
西壁土層図
I-5
J-5
K-5
L-5
I-2
I-3
I-4
I-5
M-2
M-3
M-4
M-5
16.30m
I-2I土坑
I-2M土坑
I-3C土坑
I-3F土坑
L-2土坑
L-2A小穴群
L-2焼
L-3焼
L-3焼石
0
4m

Fig.8 土層図（2）

土層註記表

新 No.	旧 No.	色　調	註　記	図 面 No.
1	I	Hve 2.5 Y 5/3 黄褐色土	礫及び砂を多量に含有	図 No. 166 北壁 Section
2	II	Hve 2.5 Y 4/6 オリーブ褐色土	礫及び砂を多量に含有	〃
3	1	Hve 10 YR 4/3 オリーブ褐色土	1～4 cm 大の礫を多量に含有	〃
4	2	Hve 2.5 YR 4/3 オリーブ褐色土	砂質を帯びる	〃
5	18	Hve 2.5 YR 3/3 暗オリーブ褐色土	5～20 cm 大の礫を含有	〃
6	XII	Hve 2.5 Y 4/2 暗灰黄色土	2～5 cm 大の礫及び 0.2～2 cm 大の炭化物粒を多量に含有	〃
7	XIII	Hve 10 YR 4/4 褐色土		〃
8	3	Hve 10 YR 3/4 暗褐色土		〃
9	1	Hve 10 YR 4/3 オリーブ褐色土	砂質を帯びる	図 No. 196
10	1	Hve 10 YR 3/1 黒褐色土	2～3 mm 大の炭化物粒を多量に含有	図 No. 166
11	2	Hve 10 YR 5/4 にぶい黄褐色土	17層に類似。白色粒子を多量に含有	〃
12	7	Hve 10 YR 4/3 にぶい黄褐色土	白色粒子を含有	〃
13	2	Hve 10 YR 3/2 黒褐色土	1～8 mm 大の炭化物粒を含有	図 No. 196
14	3	Hve 10 YR 3/4 暗褐色土		〃
15	4			〃
16	6			〃
17	9	Hve 10 YR 4/4 褐色土	砂質を帯びる粘質土	図 No. 166
18	10	Hve 10 YR 5/4 にぶい黄褐色土	17層に比べ白色粒子を多量に含み，礫を一部含有	〃
19	11	Hve 10 YR 4/6 褐色土	白色粒子を多量に含有し，1～2 cm 大の礫を含有	〃
20	VI	Hve 2.5 Y 4/3 オリーブ褐色土	2～10 mm 大の焼土粒子を含有	〃
21	12	Hve 10 YR 4/4 褐色土	極かに砂質を帯びる粘質土	〃
22	5			図 No. 196
23	13	Hve 7.5 YR 5/6 明褐色土	粘性強く径 3～4 cm 大の礫を部分的に含有	図 No. 166
24	7			図 No. 196
25	8			〃
26	14	Hve 10 YR 3/4 暗褐色土	21 層に似る 0.5 mm 大の礫を含有	図 No. 166
27	15	Hve 10 YR 4/4 褐色土	しみ状の炭化物粒をわずかに含有	〃
28	16	Hve 10 YR 4/4 褐色土	26層に類似。しみ状の炭化物粒を含有	〃
29	17	Hve 10 YR 3/4 暗褐色土	26～28層より多量のしみ状炭化物粒を含有	〃
30	21	色調なし	粘質土である	〃
31	C′	Hve 10 YR 5/4 にぶい黄褐色土	砂質強く，2～10 mm 大の礫を多量に含有	図 No. 74
32	e′	Hve 10 YR 5/3 にぶい黄褐色土	砂質強く，2～5 mm 大の礫を含有	〃
33	VII	Hve 10 YR 5/8 黄褐色土		図 No. 166 註記ナシ
34	3	Hve 7.5 YR 7/8 黄橙色土	粘質土である	〃
35		Hve 2.5 Y 6/3 にぶい黄褐色土	砂質を帯び 2～5 cm 大の礫を含有	図 No. 74
36	5			図 No. 196
37	6			〃
38	22			〃
39	4			〃
40	3	Hve 2.5 Y 4.5/6 オリーブ褐色土	2 mm 大の赤褐色粒及び 1～2 cm 大の暗灰色のしみを含有	図 No. 188
41	4	Hve 5 YR 4.5/8 赤褐色土	砂質を帯びる	〃
42	5	Hve 10 YR 8/8 黄橙色土	径 0.5～1 cm 大の礫を多量に含有する礫層	〃
43	6	Hve 10 YR 4/4 褐色土		〃
44	7 a	Hve 10 YR 5/4 にぶい黄褐色土	径 1～2 mm 大の赤褐色粒子を含有	〃
45	7 b	Hve 10 YR 4.5/4 褐色土	44層に類似	〃
46	8	Hve 10 YR 8/8 黄橙色土	砂粒を局部的に含有	〃
47	9	Hve 10 YR 4/5 にぶい黄褐色土	3～5 mm 大の粘質の灰白色ブロックを含有	〃
48	12	Hve 10 YR 4.5/6 褐色土	砂質を帯び 2～3 mm 大の炭化物粒を含有	〃
49	10	Hve 2.5 Y 浅黄色土	砂質を帯びる	〃
50	11	Hve 10 YR 4.5/6 褐色土		〃
51	13	Hve 10 YR 4/6 褐色土	白色粒子を含有	〃

新 No.	旧 No.	色　　調	註　　記	図 面 No.
52	15	Hve 10 YR 4/6 褐色土	2～5mm 大の粘質の高い黄橙色粒を含有	図 No. 188
53	14 b	Hve 2. 5 YR 4. 5/6 オリーブ褐色土	砂質を帯び白色粒子を含有	〃
54	14 a	Hve 2. 5 YR 4. 5/6 オリーブ褐色土	1～5cm 大の礫を含む礫層である。砂質を帯びる	〃
55	16	Hve 10 YR 5/7 黄褐色土	微細なしみ状赤褐色粒子を含有	〃
56	17	Hve 2. 5 YR 4. 5/6 オリーブ褐色土		〃
57	18	Hve 10 YR 5/7 黄褐色土	微細なしみ状赤褐色粒子を含有	〃
58		Hve 2. 5 Y 5/1 黄灰色土	1～5cm 大の礫を含有	図 No. 166
59	2	Hve 10 YR 4/4 褐色土	1～10mm 大の炭化物粒を層内上部に含有	図 No. 132, 147
60	3	Hve 2. 5 YR 4/8 赤褐色土		〃
61	4	Hve 7. 5 YR 4/3 褐色土		〃
62	5	Hve 10 YR 4/4 褐色土	白色粒・焼土粒子を含有	〃
63	6	Hve 10 YR 5/6 黄褐色土		〃
64	7	Hve 10 YR 4/4 褐色土	1～3cm 大の礫を含有	〃
65	8	Hve 10 YR 4/4 褐色土	層内下部に焼土が集中する	〃
66	9	Hve 2. 5 Y 4/6 オリーブ褐色土		〃
67	a-1	Hve 10 YR 5/6 黄褐色土	層内下部に白色粒子が集中する	〃
68	b-2	Hve 7. 5 YR 2/3 暗褐色土		〃
69	a-2	Hve 7. 5 YR 4/3 褐色土		〃
70	a-3	Hve 10 YR 4/4 褐色土		〃
71	b-3	Hve 7. 5 YR 4/6 褐色土	2～5cm 大の礫を含有する	〃
72	a-4	Hve 10 YR 4/4 褐色土		〃
73	2	Hve 2. 5 YR 4. 5/6 オリーブ褐色土	5mm 大の軟質の礫を層内下部に集中して含有	図 No. 202
74	18	Hve 10 YR 3/3 暗褐色土		〃
75	19	Hve 10 YR 4/5 褐色土	砂質を帯びる	〃
76	20	Hve 10 YR 4. 5/5 褐色土		〃
77	2 b	Hve 25 Y 4/6 オリーブ褐色土		〃
78	5	Hve 10 YR 4/5 黄褐色土	20層に類似。1～5cm 大の礫が点在する	〃
79	15 a	Hve 2. 5 Y 4/5 オリーブ褐色土		図 No. 201
80	15 b	Hve 10 YR 4/4 褐色土		図 No. 224
81	15 c	Hve 10 YR 4/5 褐色土		〃
82	21	Hve 10 YR 5/8 黄褐色土		〃
83	26	Hve 10 YR 5/5 にぶい黄褐色土		〃
84	14	Hve 10 YR 4. 5/4 褐色土	0. 1mm 大の白色粒子を含有	図 No. 202
85	4 b	Hve 10 YR 5. 6/6 黄橙色土	42 層に類似。0. 5cm 大の礫を含有	〃
86	7 c	Hve 2. 5 Y 4. 5/3 オリーブ褐色土	44 層に類似。0. 5cm の緑灰色ブロックを含有	〃
87	6	Hve 10 YR 5/6 黄褐色土	42 層に類似。3～5cm 大の礫を含有	〃
88	7 d	Hve 2. 5 Y 4/6 オリーブ褐色土	径 5mm 大の粘質の強い暗褐色粒を含有	〃
89	7 e	Hve 10 YR 5/4 にぶい黄褐色土		〃
90	17	Hve 10 YR 5/5 にぶい黄褐色土	粘質の強い 0. 5～1cm 大の橙色粒を含有	図 No. 201
91	8(V)	Hve 10 YR 5/5 黄褐色土	42 層に類似	図 No. 202
92	16 b	Hve 10 YR 4/4 褐色土		〃
93	23	Hve 10 YR 4/4 褐色土	砂質を帯びしみ状の赤褐色粒子を含有	〃
94	24 a	Hve 10 YR 4/4 褐色土		〃
95	22	Hve 10 YR 4/5 褐色土		〃
96	24 b	Hve 10 YR 4/4 褐色土	95 層に類似	〃
97	30	Hve 10 YR 4/5 褐色土		〃
98	8 b	Hve 10 YR 5/6 黄褐色土	砂質を帯びる	図 No. 224
99	28 a	Hve 10 YR 5/8 黄褐色土		〃
100	28 b	Hve 10 YR 5/8 黄褐色土		〃
101	8 b	Hve 10 YR 5/6 黄褐色土	砂質を帯びる	図 No. 201
102	31	Hve 10 YR 4/4 褐色土	微細な赤褐色粒子を含有	〃
103	24 b	Hve 10 YR 4/4 褐色土		図 No. 225
104	25	Hve 10 YR 5/7 黄褐色土		〃
105	29	Hve 7. 5 YR 4/4 褐色土	径 0. 5mm 大の橙色粒子を含有	〃
106	7 a	Hve 10 YR 4/4 褐色土	微細なしみ状赤褐色粒を含有	〃

である。この焼土層は，北壁において層と層の間に薄く堆積が認められる。焼土層は，東側には広がらず区を中心に狭い範囲に認められる。

検出遺構と変遷 (Fig. 6)

有岡城跡の発掘調査は，これまで31次を数えるが，その多くは有岡城の主郭と，その周辺であり，当時，総構の中にあって城下町と推定される本調査地点付近は，調査件数の少ない地域である。その意味でも今回の調査に期するところがあった。しかし，本地点では当時の町屋の遺構は検出されず，有岡城当時は濠が巡らされた砦の様相を呈している。予定外であったが総構の構造を知る上で貴重な資料が得られたのである。

予定外といえばもう1つ，土層の堆積が，厚く各時期に分けられたことである。有岡城総構内の面積は広く，各地区によって土層の堆積が異っている。特に主郭周辺では，表土層を除くと地山層が現われ，中世から近世までの遺構は同一面で検出できたのである。ところが，本調査地点では，有岡城頃から江戸末期までの間に，4面もの生活面が確認でき，有岡城廃城後に酒造で栄えた伊丹郷町時代の資料も得られたのは幸いであった。

本調査区の遺構を時期別に分けて図示したのが時期別遺構図 (Fig. 9～12) である。主に遺構の検出面で分けたが，検出面が不明瞭の遺構は一部出土遺物を参考に所属を決定している。以下，各時期の遺構の変遷をたどってみたい。

第Ⅰ期 (Fig. 9)

この段階の遺構は，有岡城時代に該当する。有岡城は荒木村重が有岡城の前身である伊丹城を攻略し，伊丹氏に代って城主になった天正2年 (1574年) 以後を指す。村重はその後，信長に叛いたため天正7年 (1579年) には滅びているが，その間に，村重は旧来の伊丹城を大改造し，堅固な城として総構も取り入れられたと考えられている。今回検出された濠は，総構内に築かれた砦の一つ，女郎塚砦の一部ではないかと推定している。

濠出土の遺物には明の染付磁器の他，備前焼，瀬戸・美濃焼などの国産陶器がある。中でも注目されるのは，鉛製の鉄砲玉である。この玉は半分に割れていて，実戦に共されたことが判る。おそらく信長による有岡城攻めの遺品であろう。

第Ⅱ期 (Fig. 10)

天正7年，荒木氏が滅んだ後，有岡城は再び伊丹城の名に戻され，天正8年に池田信輝の子，之助が入城する。之助もその後，本能寺の変を経て，天正11年 (1598年) に美濃国岐阜城に移って廃城の運命を迎えるのである。

第Ⅱ期は，濠が埋められて後，伊丹村を中心に，在郷町として発展する初期の段階である。濠出土遺物には唐津焼の製品が含まれないことや，濠埋戻し後，その上に構築されたJ-3石組に江戸初期の遺物を認めることができるので濠は廃城後すみやかに埋戻されたと考えられる。

検出した遺構は，L-4池を中心にした庭園遺構である。L-4池は，二段に掘込まれ，南壁際は最も深い。池の施設としては，一部池の東縁に拳大の礫を貼り付けた所があった。池の周囲には庭石の一部と，円形に瓦を並べた瓦列2基 (J-3瓦列・J-4瓦列) や石仏を転用した石列 (J-2石列・K-4石列) がある。瓦列は植栽を囲ったものではないかと推定され，石列については築山の土留め用の根石の可能性がある。J-3石組については第4章でも述べているが，用途は明らかではない。ただ内部に長期に渡って水の溜った痕が認められるので，池の施設の可能性を指摘している。庭園の範囲は，東西はJ線以西で，M線より西にも多少広がると考えられる。南北は5線より南にも広がっているが，

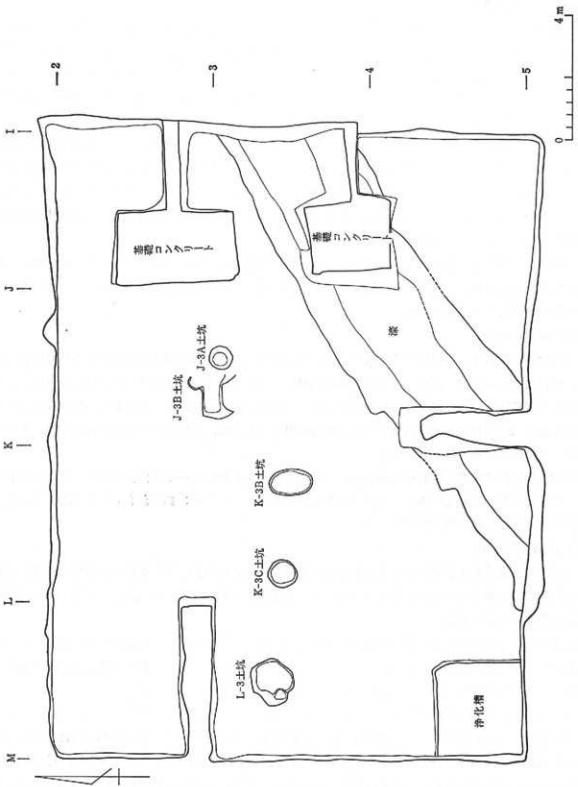


Fig. 9　第Ⅰ期の遺構

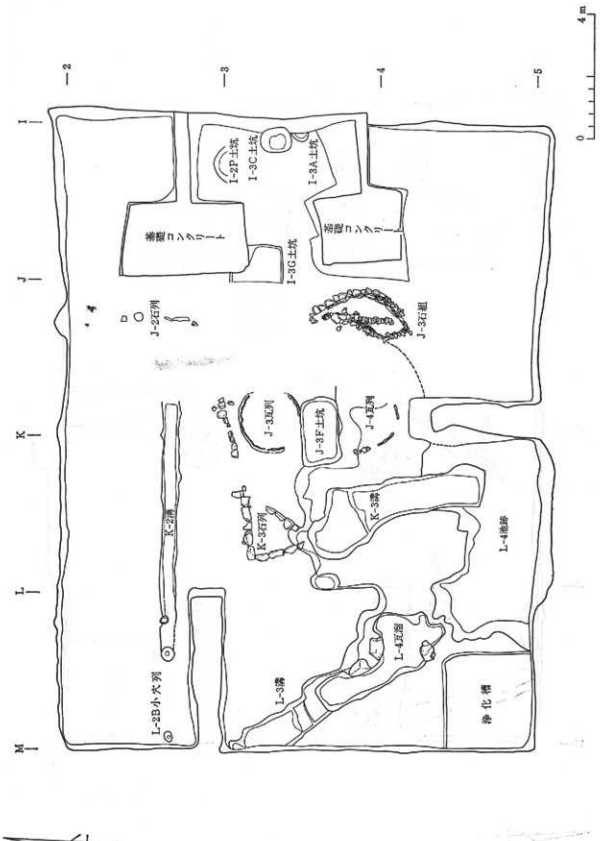


Fig. 10　第Ⅱ期の遺構

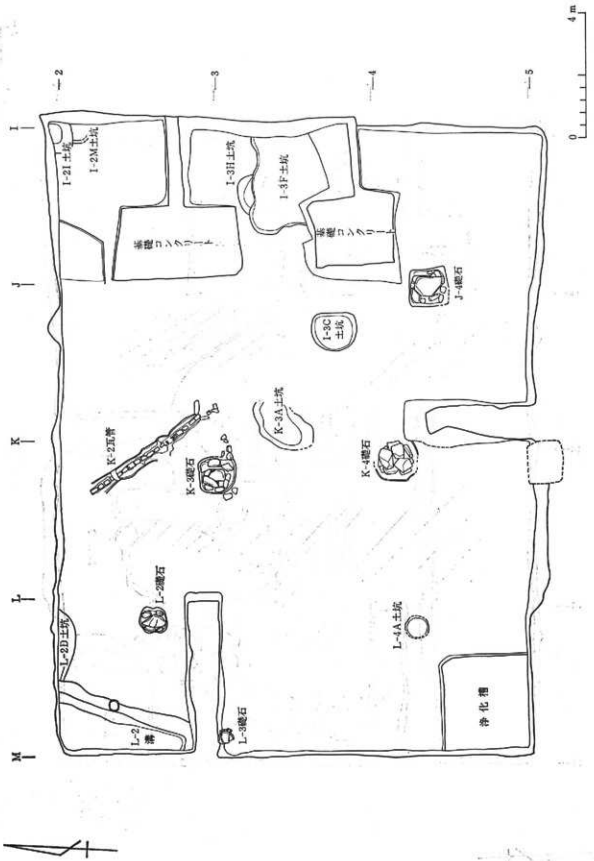


Fig. 11 第Ⅲ期の遺構

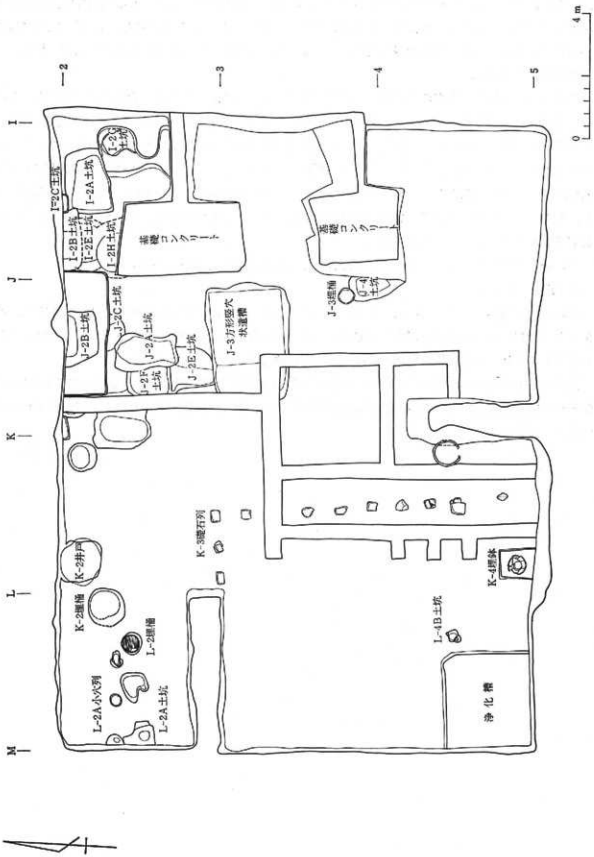


Fig. 12　第N期の遺構

北はK-2溝を境として，それよりも南側までであろう。寛文九年伊丹郷町絵図（Fig. 3）では，調査区北側の道路に沿って家屋が描かれているので，K-2溝は未調査の家屋と，その南側の庭園を仕切る塀の可能性がある。庭園の存続期間は不明瞭だが，出土遺物よりみて，江戸初期には既に築造されていたと考えられ，第Ⅲ期に酒蔵等の大規模な建物が建てられるにおよび埋められたと推定できる。

第Ⅲ期（Fig. 11）

この時期の遺構は，大型の礎石をもつ建物が建てられている。この礎石は約1m四方の掘方に大型の石を何段にも積み重ねた重厚なもので，礎石間の距離は約5mある。同様の礎石は，今調査以後，伊丹郷町の調査で各所に検出されており，酒造関係の大型の施設（酒蔵）と考えている。これを裏付けるように，天保十五年伊丹郷町分間絵図（Fig. 4）には，調査区北側の道路に「字剣菱小路」の記入がある。伊丹の銘酒として名高い「剣菱」は酒蔵家稲寺屋の醸造によるもので，稲寺屋の没落により，その後，津国屋が「剣菱」の銘柄を引き継いでいる。こうしてみると，検出された酒蔵は「剣菱」を醸造した酒蔵であった可能性が強い。

この時期の他の遺構には丸瓦を転用した導水管（K-2 瓦管）や土坑がある。

第Ⅳ期（Fig. 12）

酒蔵は，遺物からみて幕末期に入ると消滅すると考えられる。「天保度以来永代記」によると，弘化年間（1844～47年）には「剣菱」の醸造元，津国屋善蔵他，伊丹の有力酒蔵家が没落していることが書きしるされている。検出された酒蔵もその頃に破却されたのではなかろうか。

酒蔵のあとには，西側調査区の東側に多数の土坑と，西側に埋桶や埋鉢・井戸などが造られている。おそらく広大な敷地を占めていた酒蔵施設が取りのぞかれた後は，代って小規模な町屋が建てられていたのであろう。

（国見　徹）

第4章　遺　　構

狭い調査範囲に多数の遺構が重複して検出された。それは平面的な広がりだけでなく，整地層を挟んで，上下にも広がるのである。この重層する遺構面は，建物→廃棄→整地→建物→廃棄を繰り返して形成されたことが，土層からも確認できている。このように，重複する多数の遺構は，各々所属する時期があり，それが第何期の遺構面であるのかは，おおかた調査中に理解できているが，判別できない遺構も多数存在することも事実である。この項では，遺構を各時期毎に振り分けると所属時期の不確かな遺構の処置に煩雑さを生じるため，遺構の種類別に説明することにした。

検出された遺構は多様で，遺構の性格がよく判明する例とそうでない例がある。前者の場合は，建物跡・井戸などの使途を示す名称を使用するが，後者の多くは単に土坑と呼称する場合が多い。ここで，検出された遺構を列挙してみると，濠・庭園・礎石建物・礎石列（塀）・井戸・埋桶・溝・土坑（瓦溜を含む）・方形竪穴状遺構に分けられ，時期別にみれば，濠は伊丹城・有岡城時代に属し，他はすべて江戸以降である。濠は，箱垣で調査区を南西から北東に斜めに延びている。出土遺物の時期や濠の形状からみて，有岡城主郭周辺に巡らされた多数の濠と同じであることから，城塞化された総構内を示す遺構といえよう。建物跡や庭園・井戸などは，廃城後，伊丹郷町時代に営まれた町屋の遺構で，建物とそれに付属する施設である。土坑には，内部に瓦を集積した瓦溜や陶磁器を多く出土する廃棄坑（ゴミ穴）といえるものもある。ただ何も遺物を出土しない土坑も多く，それらが集中して掘られていることがある。その場合は，便宜的に土坑群という名称を与えて説明した。

濠

本遺構は，調査区を北東から南西へ斜めに走り，両端共に調査区外へ延びている。調査区内では約30mにわたって検出された。規模は上端幅4.0～2.7m・深さ1.64～1.3mである。南西側が幅広く，深く，壁の立ちあがりが緩やかであるのに対し，北東へ向かうほど幅が狭く，浅く，壁の立ちあがりが垂直に近くなる。

本遺構の確認面は地山層である。ただし土層で確認すると，もう一層上の層からの掘込みが認められる。覆土は10層から成る。しかし，遺構の規模が長大なため，各々により様々な違いがみられる。

遺物は多量に出土した。特に覆土下層部泥炭層出土の漆器・動植物遺体は重要であろう。

庭　園　遺　構

第3面（第Ⅱ期）の生活面では，上層までの遺構と異なる様相を呈している。この時期，調査区内には建物を思わせる遺構は無く，J-3 石組や K-3 石列・J-3 瓦列・J-4 瓦列のような，変わった遺構が目立つのである。調査中にはそれほど意識していた訳ではないが，L-3・4 区・K-3・4 区周辺が緩やかに落込み，その底に砂混りの泥土が堆積するのをみて，これが池を中心とした庭園の遺構ではないかと考えるようになった。つまり，L-3 溝の底に堆積する瓦は，L-4 瓦溜として命名はしたが，それが単なる瓦捨て場ではなく，平面的に整然と「S」字状に広がることをみれば，溝の底に瓦を敷いた曲水遺構の可能性があり，その周囲の石は庭石と考えられる。また，調査中，掘下げてしま

ったが，L-4 瓦溜の西側の土層中には築山とおぼしき盛土が認められるのである。これを庭園遺構とした場合，その広がりと関連遺構の問題が残るが，ここでは，円形の瓦列を植栽の周囲に巡らした施設，石仏を利用した J-2 石列や J-3 石組なども，用途不明ではあるが，庭園遺構の施設として考えておきたい。石組は，半円形の土坑の内面に石垣を設けた遺構である。その西壁には石仏が正面を内側に向けて組みこまれている。これをみて，信仰に関する遺構かとも思えるのだが，この遺構はその後，内部に新たに一列の石垣を組み，石仏が組みこまれた西壁を埋めかえしているのである。この状況から，石仏は信仰を意識したものでなく，単なる石垣の石として使用されたと考えたい。とすれば用途を考えなければならないのだが，石組の内側底面には，L-4 池遺構と同様に砂混じりの泥土の堆積があり，しかも石組上端が池に向かって下がることを考慮すれば，池の施設（たとえば，深まりのようなもの）である可能性もでてくるのである。

L-4 池跡 (Fig. 6・10・14, Pl. 1-a・10-a)

本遺構は，調査区南西側，K・L-4 区にまたがって位置し，東側に K-3 溝・北側に L-3 溝がそれぞれ位置する。

確認面は，地山層であり，約 30cm 掘込こんで構築されている。

規模は，南西側において幅約 2～2.3m・深さは約 30cm を測る。平坦な底部から緩やかに立ちあがる。形状は南西から北東側へ向かい，また南東へ鋭く曲がる。

覆土は 4 層に分かれる。総じて粘性が弱く，褐色を呈し多量の砂を含有する。

本遺構西端に，拳大の石が集中する。石は池の上端に接するように配置されている。また L-3 溝の覆土との対応からみて，L-3 溝・L-4 瓦溜と関連のある遺構と考えられる。

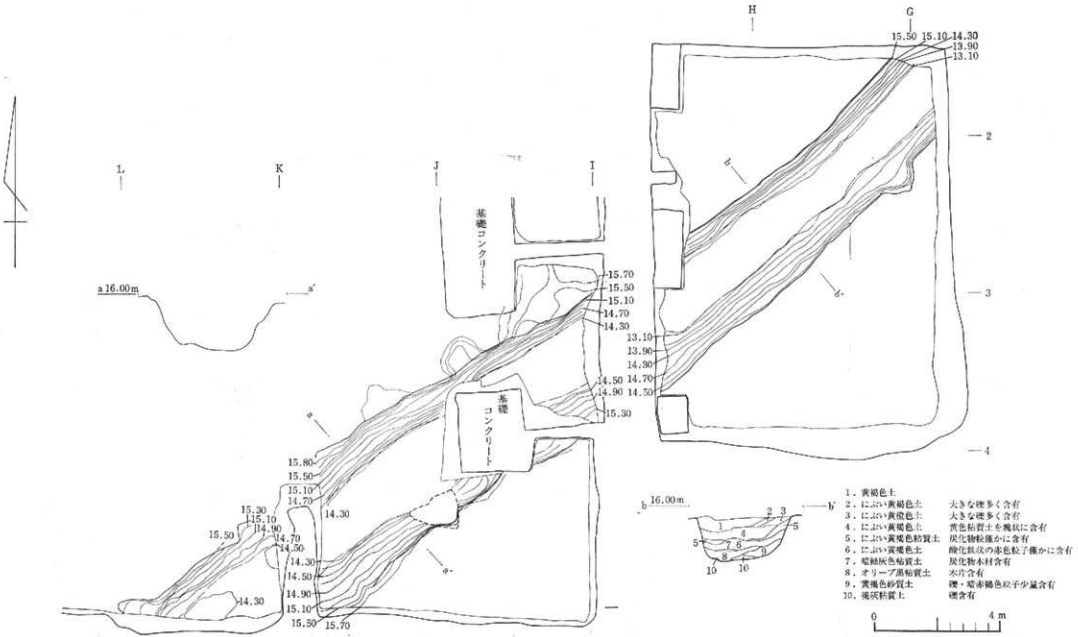
L-3 溝（L-4 瓦溜） (Fig. 6・10・14・21, Pl. 1-b)

本遺構は，調査区西側，L-3・4 区にまたがって位置する。

規模は，東西約 1.5～2.3m・南北約 4.5m を測る。形状は，北西から南東に大きく蛇行し，北西側の幅が狭く，南東側が広い屈曲した平面形を呈する。

覆土は，L-3 溝と同様に，褐色を呈し粘性は弱く，砂・礫を混入する。下部は粘性の強い褐色土で多量の瓦片を包含し，L-3 溝のほぼ全域に広がる。瓦溜と思われる。

L-3 溝が北西側から南東側にくびれる遺構のほぼ中央部に，大型の石が 2 基配され，また，遺構の南東側にも大型の石が連続して 3 基配されている。遺構の性格は不明確であるが，大型石の配置を考慮するに，庭園かそれらしき施設に伴なう池状施設であると思われる。また，同遺構の直下に検出された L-4 瓦溜も，これに伴なう遺構であると考えられる。


H
G
L
K
J
I
15.50 15.10 14.30
13.90
13.10
2
3
4
基礎コンクリート
a 16.00m
a'
15.70
15.50
15.10
14.70
14.30
13.10
13.90
14.30
14.50 14.70
14.90 14.50
15.30
15.80
15.50
15.10
14.70
15.30
15.10
14.90
15.50
14.70
14.50
14.30
14.50
14.90
15.10
15.50 15.70
14.30
b 16.00m
b'
1. 黄褐色土
2. にぶい黄褐色土　大きな礫多く含有
3. にぶい黄橙色土　大きな礫多く含有
4. にぶい黄褐色土　黄色粘質土を斑状に含有
5. にぶい黄橙色粘質土　炭化物粒微かに含有
6. にぶい黄橙色土　酸化鉄状の赤色粒子微かに含有
7. 暗褐灰色粘質土　炭化物・木材含有
8. オリーブ黒粘質土　木片含有
9. 黄褐色砂質土　礫・暗赤褐色粒子少量含有
10. 褐灰粘質土　礫含有
0
4 m

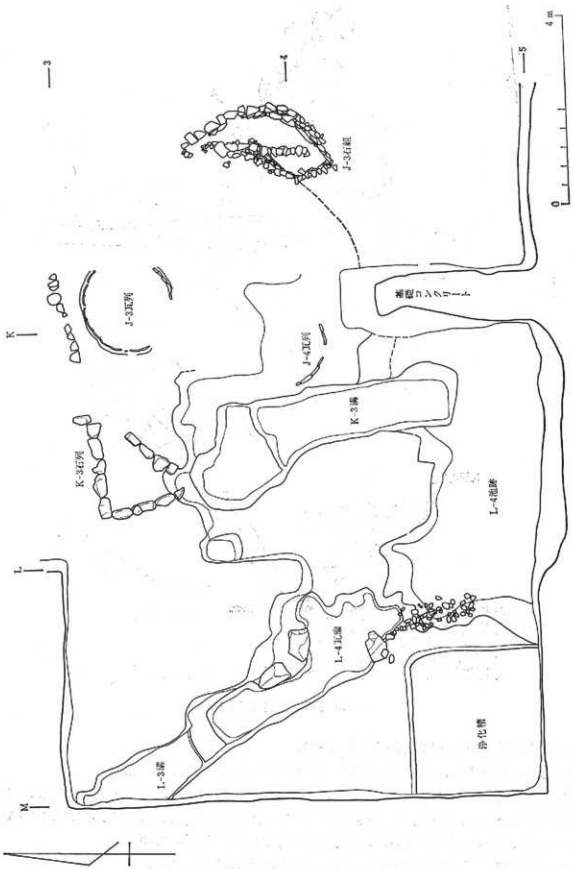


Fig. 14　庭園遺構実測図

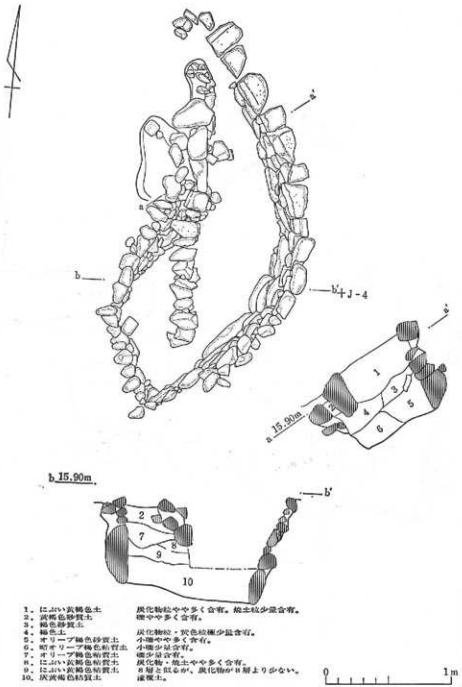


Fig.15 J-3 石組実測図（1）

J-3 石組 (Fig.6・10・14・15・16, Pl.2・11)

本遺構は，J-3・4 区に位置する。I-3C 土坑・J-3 埋桶と切り合っている。

本遺構は，彎曲する土坑の壁内面に沿って石垣を積んでいる。石垣は，東壁・西壁構築後に，中央壁を構築している。中央壁は，東壁・西壁と異なり，南北に直線的に組んでいる。中央石垣の構築により，遺構の床面積は縮小している。土坑の北壁は，濠のかたに沿っている。

平面形の規模は上端 3.25m×1.50m，改築後は 3.25m×1.10m である。

石組は各石垣上面が北から南へ低くなる。各石垣には裏込め石を用い，石の透き間には，黄褐色土

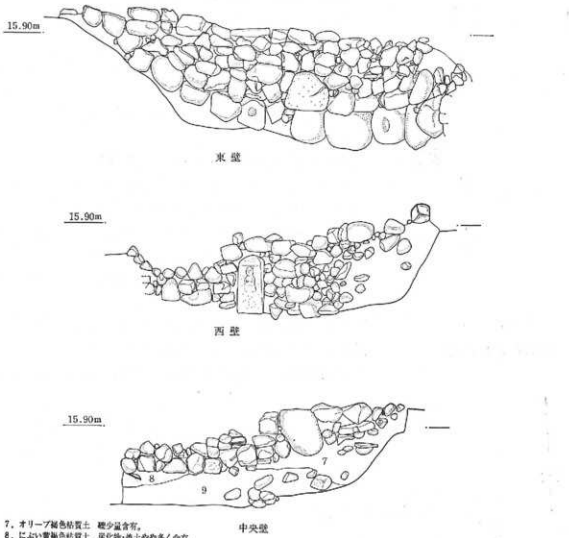


Fig. 16　J-3 石組実測図（2）

を詰めている。

東壁石垣は最下段に 30～40cm 大の大きな石を並べ，次の 2～3 段は 15～20cm 大の石を積む。石の中には五輪塔が 5 点用いられている。石はいずれも長辺を南北方向に向け，内面を揃えている。石垣の高さは，最も高い所で 90cm を測る。

西壁石垣は 10～20cm 大の石を乱雑に積みあげており，内面はやや不揃いである。石垣の一部には石仏を内面に向けて組んでいる。西壁石垣の北側一部は改築により崩れている。石垣の高さは最も高い所で 60cm を測る。

中央石垣は 10～20cm 大の石を，長辺を東西方向に向けて 2 段に積みあげている。石垣の東側面はやや不揃いである。石垣の高さは最も高い所で 40cm を測る。遺構の深さは，中央壁構築後浅くなっている。

出土遺物は，土師質皿片16点・陶磁器片13点・瓦片50点であり，土師質皿片は，中央石垣構築以前の覆土中より出土している。

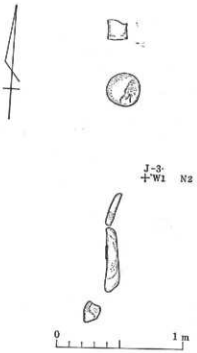


Fig. 17　J-2 石列実測図

J-2 石列 (Fig. 6・10・17, Pl. 12-a)

本遺構は，J-2 区に位置し，北側を J-2C 土坑に切られている。確認面は不明で，地山面より数cm浮いている状態で検出した。

平面形態は，南北にやや彎曲して石を並べており，残存部の規模は南北 4.70m である。

使用されている石の種類は，五輪塔が 3 点・石仏が 1 点・自然石が 1 点である。

K-3 石列 (Fig. 6・10・14・18, Pl. 12-b)

本遺構は，池の北側に位置し，平面「L」字形に配された石列（b）と，石 4 個を一列に配した（a）に分けられる。

（a）は（b）よりも新しいと考えられる。遺構は南北 1.4m にわたって遺存しており，4 個の石によって構成されている。うち 1 個は五輪塔よりの転用である。石列は東面が揃って一列に並べられている。石列の上面は無加工である。

（b）は J-3 区北西から K-3 区にかけて長く続く。遺構北東を，K-3 礎石により切られ，南は試掘溝により分断されている。遺構は南北 3.2m・東西 6.4m を測り，計 22 個の石により構成されて

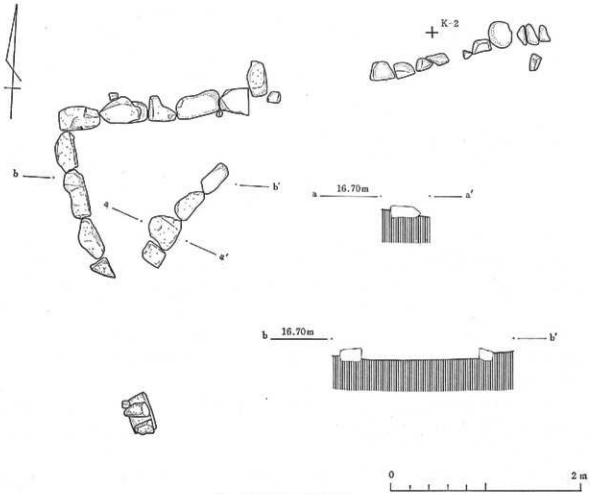


Fig. 18　K-3 石列実測図

いる。石は一列に並べられているのみで，一部を除き積みあげられていない。石列を構成する石材は自然石が主であり，一部に五輪塔・石仏からの転用が認められる。石列は南北列は東面が，東西列は南面が揃えられている。上面の高さはほぼ一定している。最南端の石は3個より構成されている。下に石仏を，正面を上にして据え，その上に石2個を並列して配してある。所定の高さに満たぬため，複数の石を積みあげて高さを調整したと考えられる。石列の東端にゆくにつれて，石の大きさは小さくなり，高さも様々で列も乱れがちとなる。

(a)・(b)共に用途は不明である。しかし意識して合わされた一面を有し，幾可学的に配列された石列であること等から考えて，境界掲示を示す地割石ではないと考えられる。

J-3 瓦列 (Fig. 6・10・14・19, Pl. 13-a)

本遺構はJ・K-3区にまたがって存在する。遺構東をJ-3方形竪穴状遺構およびK-3A土坑に切られている。規模は，直径1.8m・底部径1.25mを測り底面は平坦である。壁は75～80°で立ちあがり，掘込み面からの深さは85cmを測る。遺構の周囲には瓦が円形に巡る。瓦は平均して厚さ2cm・縦16cm・横25cmを測り，緩やかな弧を有している。これらの瓦は上面を揃えて並べてあるが，その高さは南高北低を示している。瓦は土坑構築時にはめこんだと考えられ，10cmほど地表面に露出して

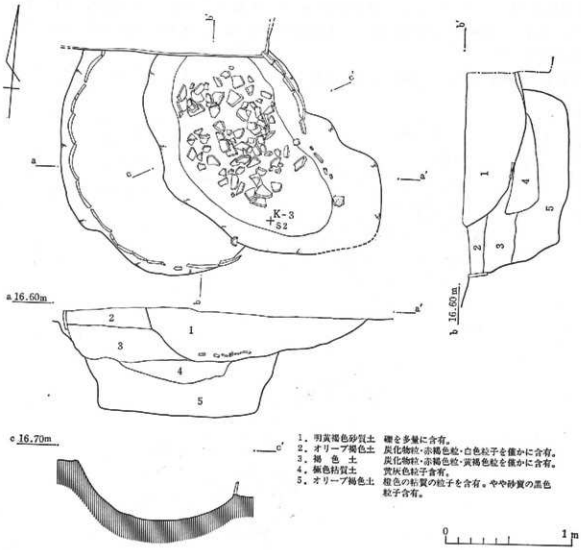


Fig. 19　J-3瓦列・K-3A土坑実測図

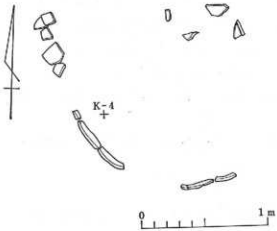


Fig. 20　J-4瓦列実測図

いたとみられる。

覆土は4層に分層でき，5層は砂質を帯びる。4層は橙色を呈する粘質土であり，直径90cm・厚さ20cmにわたって円形に張りかためられている。この橙色土の上面は遺構の深さの1/2に相当する。1つの見方として橙色土より上層が本遺構の性格に関係するのではないだろうか。本遺構と似た形態をもつ例に花壇がある。本遺構に照らしあわせてみると，覆土中に植物遺体等の有機物が認められないことや，覆土は小礫・砂質を帯びており園芸に適するか疑わしい等の疑問が残るが瓦については，配置状況から明らかに何かを囲うのが目的であったと思われる。出土遺物は，無い。

J-4瓦列 (Fig. 6・10・14・20, Pl. 13-b)

本遺構はJ-3瓦列の南に位置する。大半を整地その他によって損なわれているため，遺構周囲を巡る瓦が1/4ほど残っているにすぎない。J-3瓦列と同一層より掘りこまれており，同時期の遺構と推定される。瓦は厚さ1.5cm・幅25cmを測る。J-3瓦列と異なり，瓦の下半分は全て欠損しており，上面も欠損している。

推定直径は1.9mを測る。本遺構は，瓦を円形に巡らしたのみで，J-3瓦列のような土坑や張り土

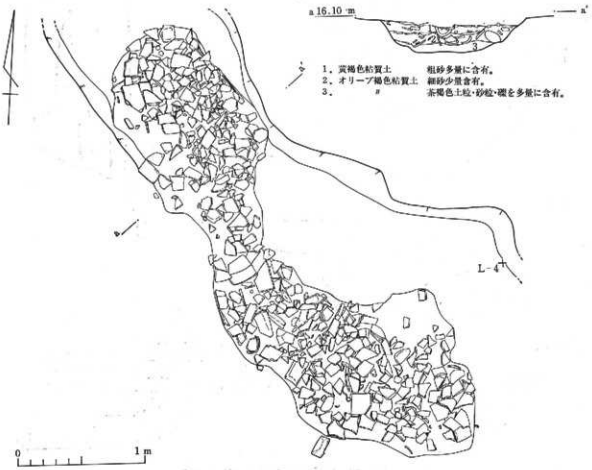


Fig. 21　L-4瓦溜実測図

等の構造をもたない簡易な遺構である。出土遺物は，無い。（森原明廣）

建　物　跡

礎石建物

調査区中央部に方形の掘方の礎石が並ぶ。南北列に3個（内，1個は壁面で確認）が等間隔（1間は5.6m）にあり，その列の東側にさらに1個（J-4礎石）がある。この礎石建物は，掘方のあり方から推定すると調査区の北側と東側に広がると考えられる。しかし，東地区では検出されていないので，東西は2間（11.2m），そして南北は3間以上と推定されるのである。

各礎石は，すでに礎石を失い，その下の根石部分しか残っていない。この根石は各礎石によって使

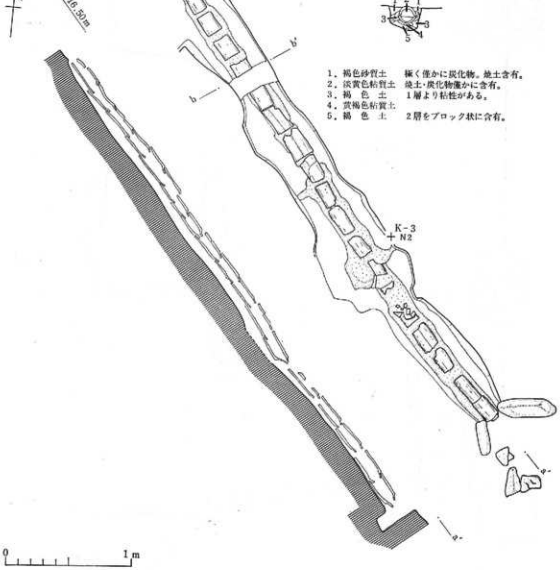


Fig. 22　K-2瓦管実測図

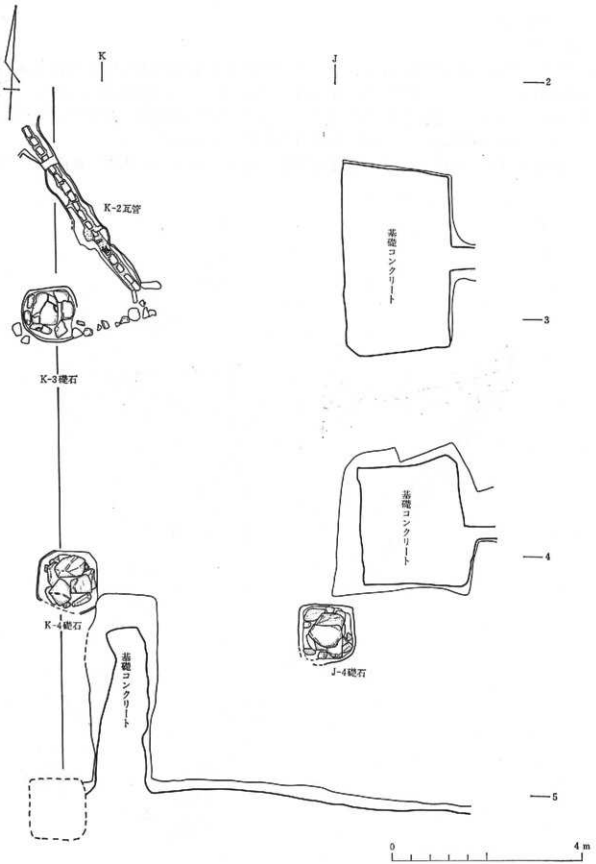


Fig. 23　礎石建物実測図

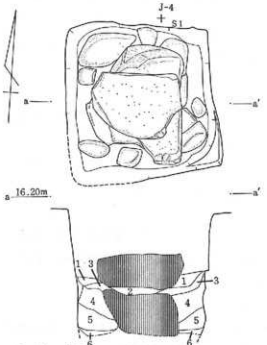


Fig. 24　J-4 礫石実測図

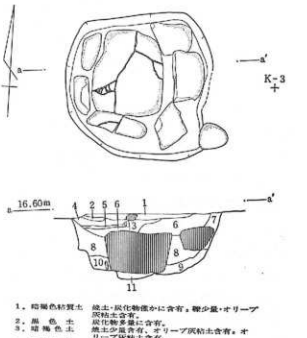


Fig. 25　K-3 礫石実測図

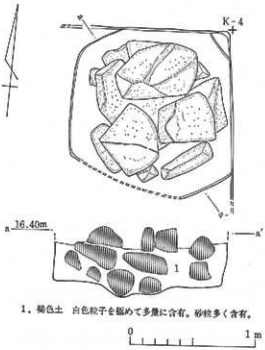


Fig. 26　K-4 礫石実測図

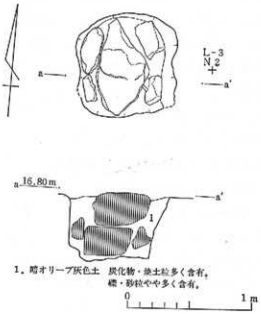


Fig. 27　L-2 礫石実測図

用されている石の大きさやその配置は各々異なっているが，一辺1m程度の掘方に数段の石を積んでいることは共通している。深さについては，J-4礎石のみ，かなり深くなっている。これは，J-4礎石が濠の真上にあたるため，濠の軟弱な覆土の上では十分に建物を支えられないとみて，深く堀り，さらにその下に直径20～25cmの丸太を濠の底面まで打ちこみ，その上に大型の根石を据えているのである。

この礎石建物は町屋の建物より，はるかに礎石が重厚で，しかも規模が大きい。これまでの伊丹郷町内の発掘調査でも，この大型の礎石建物が検出されていて，酒蔵等の大型建物と推定している。おそらく今回のこの建物も同様に酒蔵関係の施設ではなかろうか。

以下，各礎石の説明を加えておく。

J-4 礎石 (Fig. 6・11・23・24, Pl. 14-b)

本遺構は，ちょうど濠のかたにあたり，礎石の北側半分は濠の覆土にあたる。地山層（第4面）まで約50cm掘込み，さらに地山層から濠の覆土を約55cm掘込りこんでおり，計約105cmを測る。そして，その下には2本の丸太を濠の底（地山）まで打ちこんでいる。

規模は長軸約1.25m・短軸約1.15mの方形を呈する。

礎石は3段積みに設置されている。第1段目は濠の覆土を掘込んだ底部に約20～50cmの大型礫を敷きつめ，第2段目に約1m四方の巨大な石を敷きつめた礫上に設置し，第3段目に約80cmの石を設置する。第2段目と第3段目の礎石の間には，粘質土が充塡されている。

同遺構に関連する遺構に，K-4礎石・L-3礎石がある。いずれも大型の礎石であるが，本遺構では礎石の大きさ，掘込みの深さ，また礎石設置方法等に特徴が著しい。これは同遺構が，濠の直上に位置し，濠の壁を切る形で設置されているためと思われる。すなわち，柔らかい濠覆土上に設置したために起こる礎石の沈下を防止するため，三重の礎石を設置し，その間を粘質土で充塡し，加重を分散したと思われる。

K-3 礎石 (Fig. 6・11・23・25)

本礎石は，礎石はすでに無く根石のみ残されている。第Ⅲ期の遺構である。

K-3礎石より，5m南にK-4礎石が位置する。掘方は上端1.15m×1.25m・下端1m×83cmの不整方形を呈する。確認面よりの深さは最深部で50cmを測る。

根石は70cm×56cmの不整形の石を設置し，周囲には直径20～30cm大の石を7点用いている。

K-4 礎石 (Fig. 6・11・23・26)

本礎石は，礎石は無く，その下の根石のみ残されている。掘方は1.5m四方の不整方形を呈する。深さは40cmを測る。

根石は3段に積まれ，下段は小さな石を用い，中・上段は70cm程度の大きな石を用いている。

L-2 礎石 (Fig. 6・11・27, Pl. 15-b)

本遺構は，L-2区に位置する。第Ⅲ期の遺構である。K-2溝を切って構築している。掘方の規模は南北85cm×東西75cmである。平面形態は不整方形である。確認面からの深さは50cmである。壁はほぼ垂直で，底面は平坦であるが中央部に根石の掘方を有する。

根石掘方の規模は，南北65cm×東西50cmである。平面形態は不整方形である。深さは根石掘方の底面から約3～5cmを測る。壁は緩やかに立ちあがる。底面は平坦である。

掘方の中央に75cm×45cmの根石を置き，約30cm角の石を周囲に配する。礎石は中央の根石のほぼ真上に位置する。礎石は50cm×45cm・最大厚27cmの不整方形を呈する。

礎石と根石の間に約1～2cmの厚さで覆土と同じ土が敷かれている。

L-3 礎石 (Fig. 6・11)

本遺構は，L-3区北西隅に位置する。L-3溝の覆土を掘込んでいる。掘込み面は表土層の攪乱により不明である。

L-3礎石は土抗に石を2段重ねて構築している。石は上段34cm×27cm・下段50cm×32cmで，石の間に僅かに土をはさむ。礎石の上面の標高は約16.89mである。

遺物は土抗覆土中より瓦片12点が出土している。L-3礎石はK-3礎石列のほぼ延長上に位置する点からK-3礎石列の一部の可能性がある。

K-3 礎石列 (Fig. 6・12・28)

本遺構は，K-2・3・4区に位置する。北端の礎石からほぼ直角に西と南に一列に延びている。礎石は計11点からなる (Pl. 15-a)。

確認面は，西側調査区の焼土面である。礎石は東西方向・南北方向共に約1m間隔で並ぶ。石は30～40cm大の不整方形で，平な面を上面にして揃えている。

掘方は石の大きさにより，約25～70cmの不整形であり，深さは約10～20cmを測る。礎石上面は標高16.85～16.93mである。

本遺構の延長上にあるL-3礎石は，礎石上面の標高がほぼ同じ点から，本遺構の一部の可能性がある。

K-2 瓦管 (Fig. 6・11・22・23)

本遺構は，J-2区・K-2区にまたがって位置する。

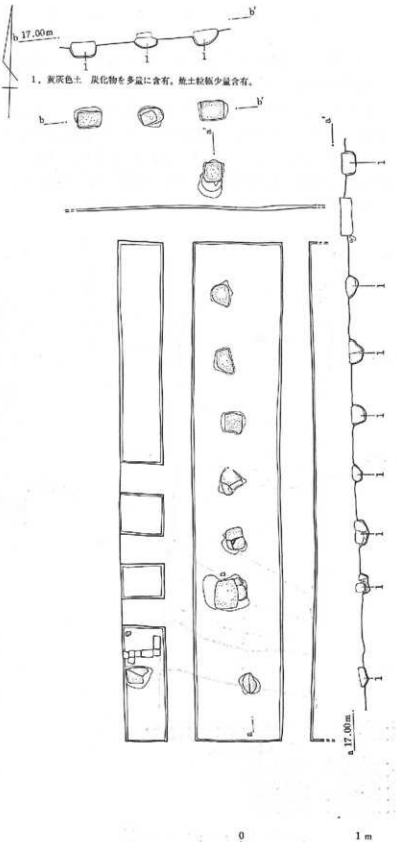


Fig. 28　K-3 礎石列実測図

K-3 礫石と隣接する。第Ⅲ期の遺構である。本遺構は，北西から南東に延びる全長4.35mの丸瓦を利用した遺構である。南東端には石囲施設を付設する。

瓦管部の掘方は，最大幅 25～55cm，深さは 20～25cm である。瓦と瓦接合部は淡黄色の漆喰を用いている。

瓦管は２枚１組として管状を呈し，全部で18組36枚の丸瓦を用いている。調査時管内には，径の半分程度土が堆積していた。瓦はいずれも，大きさ・胎土などほぼ同じである。

石囲部は，長さ30cm，厚さ15cmの自然石を用いて，瓦管の先端から「八」の字形に開くように設置されている。これより南は土坑に切られており不明である。石組内の覆土は３層に分かれる。

瓦管部において，北西端と南東端に比高差はほとんどみられず，ほぼ一定である。しかし水等の流れを考える場合，瓦の接合部からみて，北西から南東方向への流れが自然である。

本遺構において，瓦を除き遺物は出土していない。　　（小西直樹）

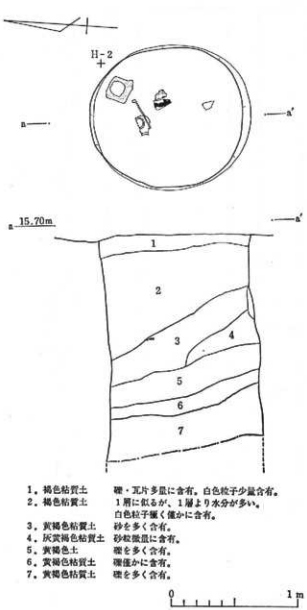


Fig.29　H-2 井戸実測図

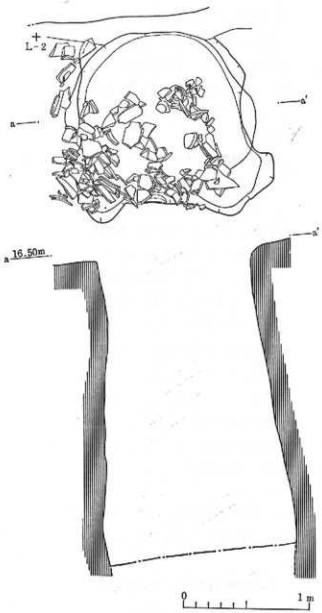


Fig.30　K-2 井戸実測図

井　　戸

H-2 井戸 (Fig. 6・29, Pl. 16-a)

本遺構は，H-2 区の北東端に位置する。確認面は，第Ⅳ期地山面である。平面形は，東西1.15m・南北1.28mのほぼ円形を呈する。深さは確認面より約1.7mまで検出するが，底部は未検出である。検出部の覆土は7層に分かれる。覆土名層に果粒状の白色粒子と砂を含んでいる。堆積状態は，南東から北西方向に傾斜しており一部壁と覆土の間に空洞がみられる。

遺物は，瓦片23点・陶磁器片10点・銅製品1点・五輪塔2点が出土している。

K-2 井戸 (Fig. 6・12・30, Pl. 16-b)

本遺構は，K-2 区北西端に位置する。第Ⅳ期の遺構である。K-2 埋桶と隣接する。本遺構は素掘りの井戸である。遺構は確認面より約2.50mの深さで検出した。平面形は，直径1.25mのほぼ円形を呈する。壁は内傾して立ちあがり，断面形は下に向って広がる。

本遺構は，遺構上部に多量の瓦片が堆積し瓦溜状を呈している。規模は，東西1.30m・厚さ約15cmで堆積している。

遺物は，多量の瓦片・陶磁器片・砥石1点・ガラスが出土している。上部の瓦堆積中よりプラスチックなど出土している。

本遺構は，遺物などから近年に埋め戻されたと考えられる。

埋　　桶

J-3 埋桶 (Fig. 6・12・31, Pl. 17-a)

本遺構は，調査区のほぼ中央 J-3 区に位置する。第Ⅳ期の遺構である。J-3 石組の東側一部と南側の J-4 土坑を切って構築されている。本遺構は上部削平が著しく及んでいる。

桶が埋設された土坑は，直径50cmで円形を呈する。確認面よりの深さは最深部で10cmを測る。底面は平坦である。

遺構確認面において桶底部の木材が出土した。桶は，底部については土坑とほぼ同一の直径をもっていたことが確認された。上部削平のため時期は不明である。本遺構の性格は不明である。

桶材以外の出土遺物は，無い。

K-2 埋桶 (Fig. 6・12・33, Pl. 17-b)

本遺構は，K-2 区と L-2 区にまたがって位置する。第Ⅳ期の遺構である。K-2 井戸と隣接する。規

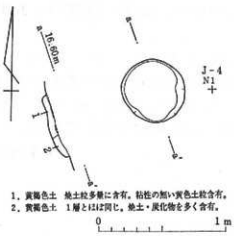


Fig. 31　J-3 埋桶実測図

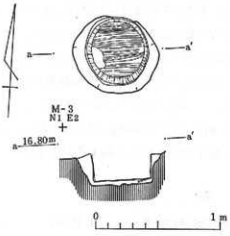


Fig. 32　L-2 埋桶実測図

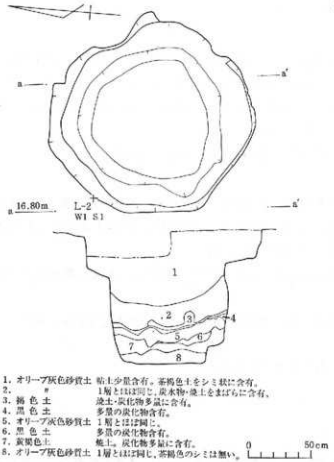


Fig.33 K-2 埋桶実測図

模は，上端径約1.60m，下端径約95mを測り，不整円形を呈する。断面形は，遺構上部に一段あり，中段を呈している。壁は，ほぼ垂直に立ちあがり，底部は平坦である。覆土は，8層に分かれる。第4層は，多量の炭から成る層であり，第4層以外は，ほとんど砂質の層である。

遺物は，覆土中より陶磁器片70点・瓦片多数・貝殻・ガラス片・鉄製品などが出土している。

本遺構は，壁の一部より炭化材を検出したため，埋桶遺構と判断した。

L-2 埋桶 (Fig.6・12・32)

本遺構は，L-2区のほぼ中央に位置する。L-2小穴群，K-2埋桶の南側に位置する。掘方の径は，60～70cmの不整円形である。壁は東側はほぼ垂直で，西側は約65°の角度で立ちあがる。底部は，ほぼ平坦である (Pl.18-a)。

桶部は，直径約47cm，深さ20cmを測る。桶は，底部・側部ともに著しく腐食している。桶の板材は，厚さ1.0～1.5cmである。木材の材質については不明である。

出土遺物は，無い。本遺構は，J-3埋桶と形態的に似ているが，K-2埋桶とは，形態的・規模ともに共通性はみられない。

溝

K-2 溝 (Fig.6・10・34, Pl.10-b・18-b)

本遺構は，J-2区・K-2区・L-2区にまたがり，東西に長く延びる。本遺構の重複関係は，J-2E土坑・K-2瓦管・L-2B小穴列に切られている。

第Ⅱ期の遺構である掘込みは，地山面で確認されている。溝底は西へ向って浅くなっている。

規模は，残存部全長8.16m・上端幅40～60cm・下端幅30～40cmである。深さは確認面より10～40cmを測る。底面は平坦で，壁はほぼ垂直に立ちあがる。断面形態は，ほぼU字形を呈する。溝西側の浅い部分は，壁と底面の区別がなくなる。覆土は3層で，各層に焼土と炭化物を含有する。

遺物は，覆土中より磁器の碗1点が出土している。 (荒井一彦)

土　　坑

F-2 区土坑群 (Fig.6・35, Pl.19-a)

東側の調査区東壁際に3基の土坑が並んで検出された。この3基(A～C)の土坑は，等間隔に列を

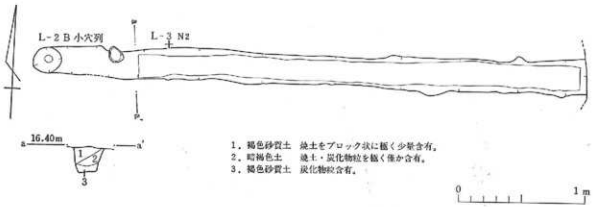


Fig.34　K-2 溝実測図

成していて，土坑の形状も類似する。掘込み面は大きく攪乱を受けているため不明である。

F-2A 土坑

本遺構は，3基の土坑の中で最も北側に位置する。西側半分は未調査区に延びている。残存部は，上端径40cm・下端径33cmで，ほぼ半円形を呈する。出土遺物は，無い。

F-2B 土坑

本遺構は，3基の土坑の中で中央に位置する。遺構東側の一部は未調査区へ延びている。残存部は上端径42cm・下端径45cmで，ほぼ円形を呈する。出土遺物は，無い。

F-2C 土坑

本遺構は，3基の土坑の中で最も南側に位置する。遺物東側の一部は未調査区へ延びている。残存部は，上端径45cm・下端径25cmである。出土遺物は，無い。

G-2 土坑（Fig.6・35，Pl.19-a）

本遺構は，G-1区とG-2区の一部に位置する。本遺構北側では，濠を切っている。確認面は，地山面である。

規模は，南北5.60m・東西2.10mである。平面形態は不整長方形を呈する。壁は，ほぼ垂直に立ちあがる。底部に，中央部を境にして南北各1つの掘込みを有する。北側の掘込みは，上端東西1.70m・南北1.30m，下端東西85cm・南北1.0mを測り，鉤形を呈する。深さは，確認面より1.20mを測る。底部は平坦である。南側の掘込みは，東西1.6m・南北1.13mの不整長方形である。確認面からの深さは，1.20mである。底部は平坦である。

壁は北側・南側ともに段を有するが，西側はほぼ垂直に立ちあがる。

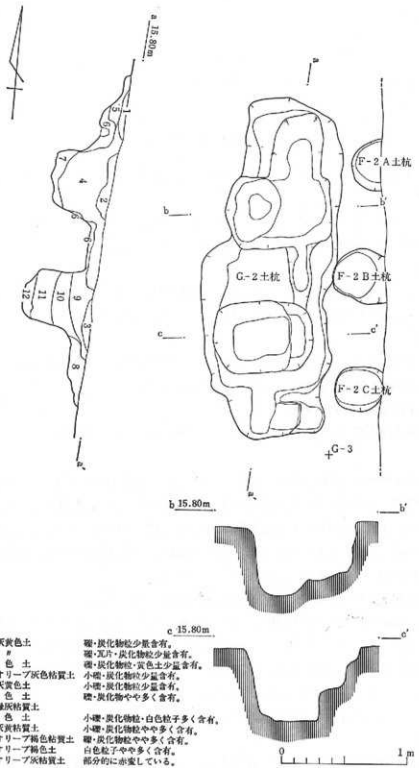
出土遺物は，陶磁器片7点・瓦片29点であり，北側の掘込み底部からは2本の木材（角材）が，多量の炭化物に混じって出土している。また本遺構覆土の上層からは，漆喰片が出土している。

G-3 区土坑群（Fig.6・36・37・38，Pl.19-b）

G-3区において4基の土坑（A～D）が検出された。このうちAとBは重複する。確認面はいずれも地山面である。遺物はAから瓦片が少量出土するが，その他の土坑からは出土していない。

G-3A 土坑

本遺構は，北側のG-3B土坑，南側のG-3C土坑を切っている。確認面は地山層である。遺構覆土は1～5cm大の礫が主となっている。覆土最上層では，水酸化鉄と思われる赤褐色のしみが多く存在する。特に同層下位では厚さ3mmほどの赤褐色の帯が層の境に認められる。



1．暗灰黄色土　　礫・炭化物粒少量含有。
2．　〃　　礫・瓦片・炭化物粒少量含有。
3．褐　色　土　　礫・炭化物粒・黄色土少量含有。
4．暗オリーブ灰色粘質土　小礫・炭化物粒少量含有。
5．暗灰黄色土　　小礫・炭化物粒少量含有。
6．灰　色　土　　礫・炭化物やや多く含有。
7．暗緑灰粘質土
8．褐　色　土　　小礫・炭化物粒・白色粒子多く含有。
9．暗灰黄粘質土　　小礫・炭化物粒やや多く含有。
10．暗オリーブ褐色粘質土　礫・炭化物粒やや多く含有。
11．暗オリーブ褐色土　　白色粒子やや多く含有。
12．暗オリーブ灰粘質土　　部分的に赤変している。

Fig. 35　G-2・F-2A～2C 土坑実測図

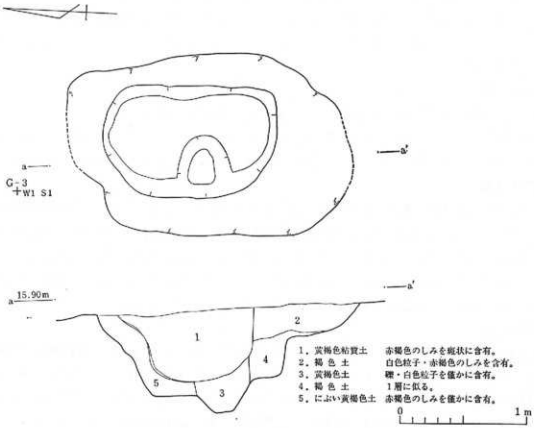


Fig.36　G-3A 土抗実測図

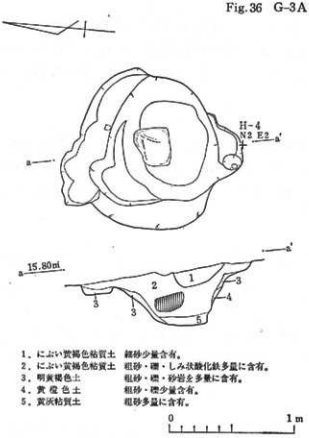


Fig.37　G-3D 土抗実測図

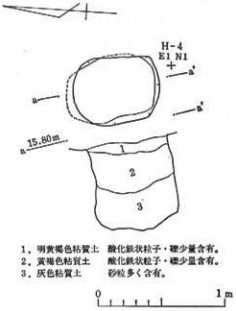


Fig.38　G-3E 土抗実測図

遺構規模は，長軸2.2m・短軸1.4mを測り，不整楕円形を呈する。確認面よりの深さは，81cmを測る。底部はほぼ平坦であるが，底部の西側寄りに，直径50cm・深さ25cmの円錐状を呈する落込みが存在する。壁は底部より80°で立ちあがるが，上部で角度を変え，緩やかに立ちあがる。遺物は，瓦小片が3点出土している。

G-3B 土坑

本遺構は，G-3A土坑の北側に位置する。遺構南側はG-3A土坑により，切られている。

第Ⅳ期の遺構である。規模は直径1.0mを測り，不整円形を呈する。底部は平坦で，壁はほぼ80°で立ちあがり，上部で35°に変わる。確認面からの深さは45cmを測る。出土遺物は，無い。

G-3D 土坑

本遺構はG-3E土坑の北側に位置する。確認面は地山面である。平面形は長軸1.0m・短軸75cmの不整楕円形を呈する。底面は長軸70cm・短軸50cmの不整楕円形を呈する。確認面よりの深さは65cmを測る。底部は平坦である。壁は底部より約80°で立ちあがるが，上部で角度を変え，緩やかに立ちあがる。遺構上面は，拡張か，撹乱か明確ではないが，北方向に2箇所小土坑状の落ち込みによって崩壊されている。底部より，15～20cm大の礫が1点出土している。

G-3E 土坑

本遺構は，G-3D土坑の南側に位置する。確認面は地山面である。平面形は長軸69cm・短軸25cmの不整楕円形を呈する。底面は長軸72cm・短軸47cmの不整楕円形を呈する。確認面よりの深さは最深71cmを測る。主軸方位はN-5°-Wである。壁面は下位でやや外側に膨らむ袋状を呈し，それより上では，ほぼ垂直に立ちあがる。底部にはやや起状がある。出土遺物は，無い。

I-2 区土坑群 (Fig. 6・10・11・12・39, Pl. 20)

西側の調査区の北東隅に土坑が集中して掘られている。この土坑は，I-2区・I-3区・J-2区に広がるが，特にI-2区に集中する傾向がある。I-2区では合計18基の土坑が重複するように検出された。重複関係から，土坑群は多時期にわたって形成されたと考えられる。しかし，出土遺物が各土坑ともに少ないため，時期の決定は困難である。

I-2A 土坑

本遺構は，I-2B・I-2C土坑に切られている。第Ⅳ期の遺構である。確認面から，約85cm掘込んで構築している。遺存状態は良好である。規模は，上端長軸2.1m・短軸1.4m，下端長軸1.7m・短軸1.1mを測り，不整長方形を呈する。断面形態は深い箱型を呈する。底部はほぼ平坦である。壁はほぼ垂直に立ちあがる。

I-2B 土坑

本遺構はI-2C土坑に切られており，I-2A土坑・I-2E土坑をそれぞれ切っている。土坑の北側は調査区外へ延びている。第Ⅳ期の遺構である。確認面から，約1.6m掘込んで構築している。遺存状態は，上部を削除されている以外は良好である。

調査区内での規模は，上端長軸2.7m，下端長軸1.5mを測り，平面形態は不整楕円形を呈する。断面形態は深い摺鉢状を呈する。底部はほぼ平坦である。壁は約45°の角度で立ちあがる。覆土は5層に大別でき，上層部にのみ遺物が出土する。

I-2C 土坑

本遺構は，第Ⅰ面においてI-2L土坑に切られており，I-2D土坑を切っている。本土坑の北側は調査区外へ延びている。第Ⅳ期の遺構である。確認面から，約60cm掘込んで構築している。遺存状態

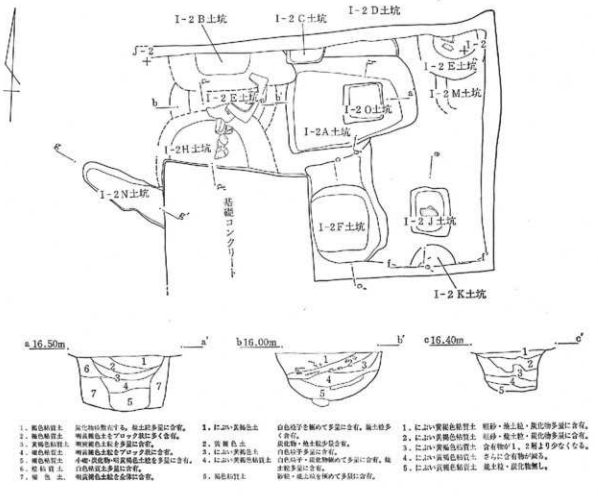


Fig.39 I-2 区土坑群実測図

はやや良好である。

調査区内での規模は，上端長軸70cm，下端長軸55cmを測り，平面形態は不整楕円形を呈する。断面形態は浅い皿状を呈する。底部はほぼ平坦で，壁は約 50° で立ちあがる。

I-2D 土坑

本遺構は，第Ⅰ面において西側を I-2C·B·L 土坑に切られている。本土坑の北側大半は，調査区外へ延びている。第Ⅵ期の遺構である。確認面から，約40cm 掘込んで構築している。

調査区内での規模は不明である。現存部での平面形態は楕円形を呈し，断面形態は，皿状を呈する。底部はほぼ平坦である。

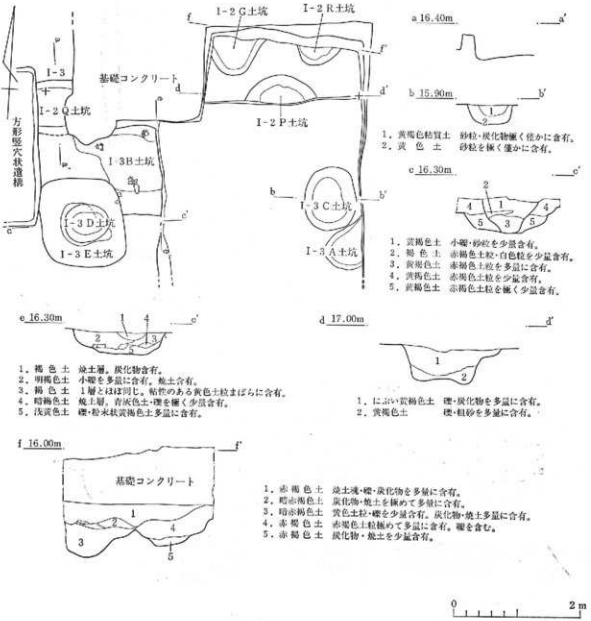


Fig. 40 I-3 区土坑群実測図

I-2E 土坑

本遺構は，北側・南側の大部分をI-2B・H土坑にそれぞれ切られており，ごく一部が残存するのみである。第Ⅳ期の遺構である。確認面から，約75cm 掘込んで構築している。

現存部での規模は上端長軸1.7m，下端長軸1.2mを測る。断面形態は，幅広気味のU字形を呈する。底部は丸底気味である。壁は約40°の角度で立ちあがる。覆土は，5層に大別でき，第1・2層からのみ遺物の出土が確認される。出土遺物は，瓦片のみである。

I-2F 土坑

本遺構は，I-2A土坑の南に位置する。確認面は地山であり，掘込み面は不明である。遺存状態は不良である。規模は，上端長軸1.25m・短軸1.0m，下端長軸95cm・短軸90cmを測る。平面形態は，不整方形を呈する。断面形態は，ほぼ箱型を呈する。底部は，ほぼ平坦である。壁は，ほぼ垂直

に立ちあがる。

I-2G 土坑

本遺構はI-2A土坑・I-2J土坑に切られている。本遺構の西側および南側の大部はコンクリート基礎の下へ延びている。完掘できれば，大型の土坑である。第Ⅳ期の遺構である。約60cm掘込んでいる。遺存状態は良好である。

規模は最大幅80cm・最小幅60cmを測り，平面形態は，不整形を呈している。底部は，段を有してはいるが，比較的緩やかである。壁は全体的に垂直気味に立ちあがる。

覆土は1層のみである。焼土・灰・炭化物の含有についてのみでは，細分できる。特に焼土の含有量が著しい。出土遺物は，瓦片のみである。（稲葉昭智）

I-2H 土坑

本土坑は，第Ⅰ面においてI-2E土坑の南側を切っている。本土坑の南側は，コンクリート基礎の下へ延びている。第Ⅳ期の遺構である。確認面から，約65cm掘込んで構築している。遺存状態は，やや不良である。

調査区内での規模は，上端長軸1.7m，下端長軸1.3mを測り，平面形態は半円形を呈する。断面形態は箱型を呈する。底部はほぼ平坦である。壁は垂直気味に立ちあがる。

覆土は3層に大別できる。

出土遺物は，無い。

I-2I 土坑

本遺構の北側・東側はともに調査区外へ延びている。第Ⅲ期の遺構である。確認面から，約80cm掘込んで構築している。遺存状態は良好である。

調査区内での規模は，上端長軸約1.1m・下端長軸約70cmを測る。平面形態は，ほぼ半円形を呈する。断面形態は，底面がほぼ平坦であるV字形を呈する。壁は上部で僅かに屈曲するが，約50°の角度で立ちあがる。覆土は3層に大別できる。覆土第1層は，砂層であり，本土坑の出土遺物は，本層のみより出土している。

I-2J 土坑

本遺構は，I-2G土坑を切っている。確認面は地山面であり，約40cm掘込んで構築している。

掘込み面は不明である。遺存状態はやや良好である。

規模は，上端長軸75cm・短軸60cm，下端長軸65cm・短軸45cmを測り，平面形態は不整長方形を呈する。断面形態は箱型を呈する。壁は垂直気味に立ちあがる。

覆土は3層に大別できる。

出土遺物は，無い。

I-2K 土坑

本遺構の南側は，コンクリートの基礎の下へ延びている。確認面は地山面であり，約35cm掘込んで構築している。遺存状態は，やや良好である。

調査区内での規模は，上端長軸70cm・短軸35cm，下端長軸40cm・短軸20cmを測り，平面形態は，不整長円形を呈する。断面形態は，浅い皿状を呈する。底部は，ほぼ平坦である。壁は緩やかに立ちあがる。覆土は3層に大別できる。出土遺物は，無い。

I-2L 土坑

本遺構は，第Ⅰ面においてI-2C・D土坑に切られている。第Ⅳ期の遺構である。確認面から，約30

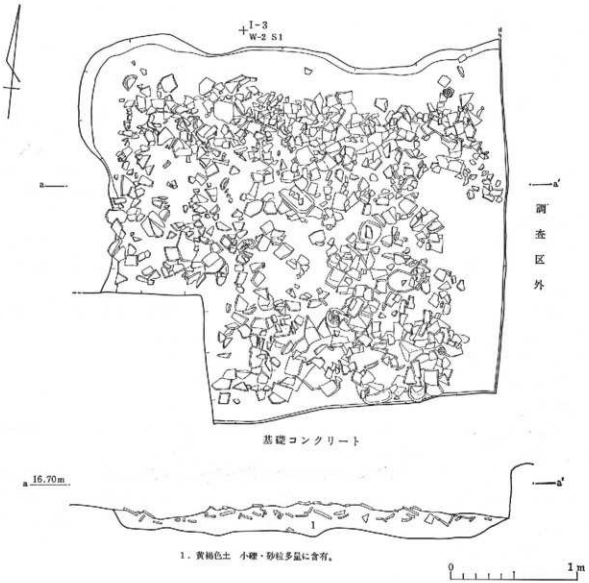


Fig.41　I-3F 土坑実測図

cm 掘込んで構築している。本土坑は I-2 区北壁の断面のみで確認された。

断面よりの規模は，上端長軸 1.8m，下端長軸 1.6m を測る。断面形態は，幅広の皿状を呈する。底部はほぼ平坦である。

I-2M 土坑

本遺構は，I-2I 土坑に切られている。確認面は地山面であり，約65cm掘込んで構築している。本土坑の東側は，調査区外へ延びている。遺存状態は不良である。

調査区内での規模は，上端長軸 1.5m・短軸65cm，下端長軸 1.3m・短軸50cm を測り，平面形態は，不整長方形を呈する。断面形態は幅広の皿状を呈する。底部はほぼ平坦である。壁は緩やかに立ちあがる。覆土は 4 層に大別できる。出土遺物は，無い。

I-2N 土坑

本土坑の東側は基礎コンクリートにより切られている。確認面は地山面である。平面形態は不明である。検出部の規模は，上端 1.60m×47cm，下端 1.47m×40cm である。深さは最深部18cm を測る。

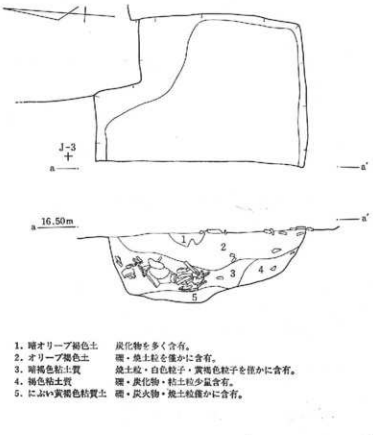


Fig. 42　I-3G 土坑実測図

壁はほぼ垂直に立ちあがり，底面はほぼ平坦である。覆土は1層である。出土遺物は，無い。

I-2O 土坑

本遺構の確認面は，地山であり約30cm掘込んで構築している。遺構状態は，良好である。規模は，上端，下端ともに約60mを測り，平面形態はほぼ正方形を呈する。断面形態は，箱型を呈する。底部は，ほぼ平坦である。壁は，四方とも垂直に立ちあがる。覆土は，3層に大別できる。出土遺物は，無い。

I-2P 土坑

本遺構は検出が遅れ，調査できたのは，遺構の一部となってしまった。平面形は不明であるが，長軸1.14m，短軸45cmの半円形のみ調査された。底部は中央部が隆起する。確認面よりの深さは最深45cm を測る。壁はほぼ垂直に立ちあがる。覆土には礫を多く含む。出土遺物は，無い。

I-2Q 土坑

本遺構は基礎コンクリートの攪乱を受け，I-3G 土坑，J-3 方形竪穴状遺構に切られている。掘込み面は重複や表土層の攪乱により不明。平面形態は不明だが，検出部の規模は南北74cm×東西44cmである。北側の壁は，ほぼ垂直に立ちあがり，底面はやや凸凹がみられる。出土遺物は，無い。

I-2R 土坑

本遺構は，基礎コンクリートにより大半が切られている。土層断面より土坑と確認された。残存部の規模は，長軸66cm，短軸30cmを測り，半円形を呈する。しかし，基礎コンクリート下に残された本遺構の北壁土層によると，確認面より約60cm上まで遺構が残っていることが確認された。東側はI-2G 土坑により切られている。覆土は4層に分かれる。出土遺物は無い。

I-3 区土坑群（Fig. 6・10・11・40・41・42, Pl. 21・22）

I-2区の土坑群に続いて，I-3区でも8基（A～H）の土坑が検出された。重複関係と確認面から，少なくとも3時期にわたって土坑が掘られていることが判る。I-2区と異なり，I-3区の土坑には，瓦をはじめ多数の陶磁器が出土している。中でもF土坑は，何層にも重なって瓦が出土する。

I-3A 土坑

本遺構は完掘されていないため，平面形は不明である。調査区内の規模は80cm×65cmの不整楕円形，断面形態は摺鉢状を呈する。第Ⅱ期の遺構である。出土遺物は，無い。

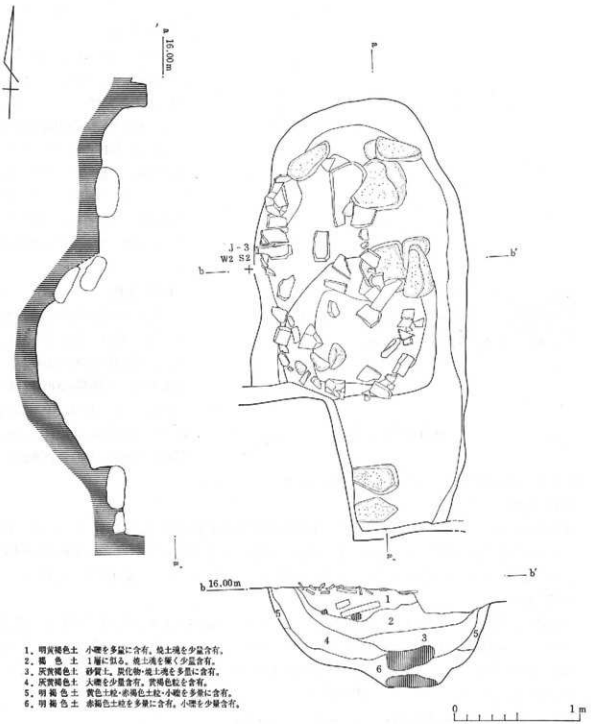


Fig. 43　I-3H 土坑実測図

I-3B 土坑

本遺構は，西側をI-3E土坑・I-3G 土坑により切られている。第Ⅱ期の遺構である。覆土全層にわたって炭化物粒・焼土粒が認められる。壁土等が焼けたと推定される固く締った焼土塊を含有する焼土層も存在する。炭化物・焼土粒は下層ほど少なくなっている。規模は，残存部で東西95cm・南北

1.5m を測る。なだらかな丸底を有するレンズ状を呈し，確認面よりの深さは 35cm を測る。遺物は覆土中より瓦片 1 点・磁器 3 点・土師皿 4 点が出土している。

I-3C 土坑

本遺構は，I-3A 土坑の北側に位置する。平面形は長軸 1.0m・短軸 81cm の楕円形を呈す。確認面よりの深さは最深 30cm を測り，底面はほぼ平坦であり，壁はほぼ直立する。覆土は 2 層に分かれる。2 層ともに砂質の多い土である。出土遺物は，無い。

I-3D 土坑

本遺構は，遺構西側を J-3 方形竪穴状遺構に，遺構南側を I-3G 土坑に切られている。また遺構東側はコンクリート基礎のため損なわれている。壁は，北側で東西に約 60cm 残存し，壁高は平均 45cm を測る。掘込みは，地山面から確認されている。底面はほぼ平坦で，壁は擂鉢状に立ちあがる。遺物は瓦片が 2 点出土している。

I-3E 土坑

本遺構は，J-3 方形竪穴状遺構によって遺構北西隅を切られている。I-3B 土坑・I-3G 土坑と切り合っている。濠覆土を掘り込んで構築されている。第Ⅱ期の遺構である。規模は，各辺約 1.2m を測り，隅丸方形を呈する。底面はほぼ平坦で，壁はなだらかに立ちあがる。壁高は平均して 37cm を測る。遺構覆土中には水酸化鉄と思われる赤褐色のしみが観察できる。このしみは覆土下部において顕

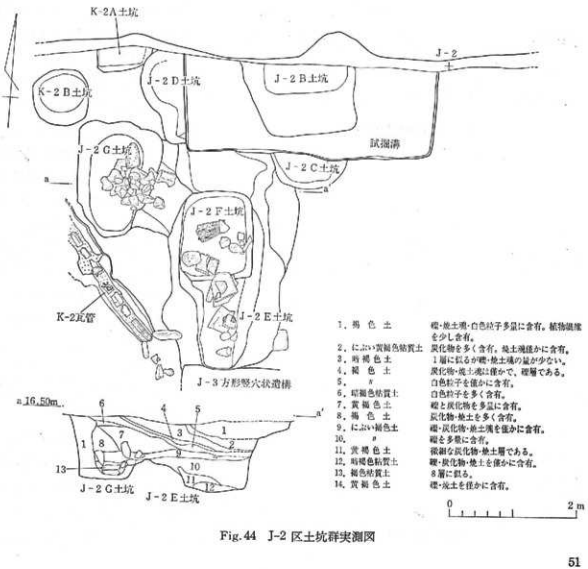


Fig. 44　J-2 区土坑群実測図

著である。特に遺構底部に沿って薄い層を成している。出土遺物は，無い。

I-3F 土坑

本遺構は東側をI-3A土坑，南側を基礎コンクリートに切られる。第Ⅲ期の遺構である。残存部の規模は長軸3.02m・短軸2.70mで，隅丸方形を呈する。深さは25cmを測る。断面形態は皿状で，壁は緩やかに立ちあがる。遺物は瓦片多数・瓦当1点・陶磁器片71点・鉄製品1点・土師質土器片13点・石臼片11点が出土している。遺構は瓦を主とした廃棄用土坑と考えられる。

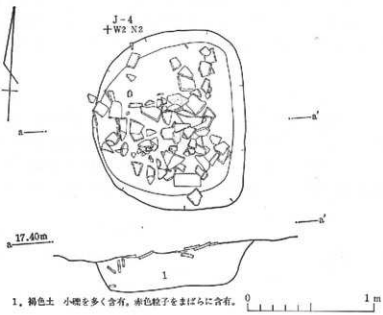


Fig. 45　J-3C 土坑実測図

Fig. 46　J-3F 土坑実測図

I-3G 土坑

本遺構は，遺構西側をJ-3方形竪穴状遺構に切られている。またI-3B土坑・E土坑を切っている。規模は，南北1.1mを測る。底面は凹凸が著しい。底面より，壁は55～60°で立ちあがり，壁高58cmを測る。遺構覆土中位に瓦片・自然石・焼土塊・漆喰が集中している。遺物は，磁器片1点・摺鉢2点・『金岡瓦宗』の銘入り丸瓦1点他瓦片多数が出土している。

I-3H 土坑

本遺構は，南側をI-3F土坑に切られている。東側は基礎コンクリート下へ延びている。平面形は不明であるが，調査部は長楕円形を呈する。長軸3.41m・短軸1.71mを測る。長軸断面は，南側が深く落ちこみ，北側がやや浅くなっている。短軸断面は，漏斗形を呈する。確認面からの深さは最深部で90cmを測る。遺物は瓦片を多量に出土した。この他に30cm大の礫を6点出土した。この礫は南北に列を成し，遺構の下端に沿って特異な出土状況をみせる。瓦廃棄土坑の可能性がある。

（土田智恵子）

J-2 区土坑群 (Fig. 6・12・44)

西側調査区の北壁寄りに，比較的大型の土坑が集中している。J-2区で検出された土坑は合計7

Fig.47 J-4 土坑実測図

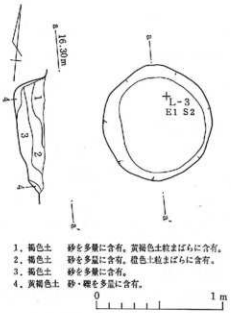


Fig.49 K-3C 土坑実測図

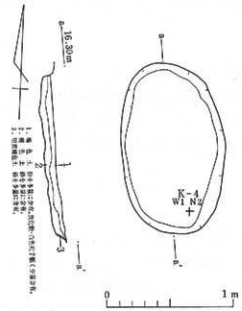


Fig.48 K-3B 土坑実測図

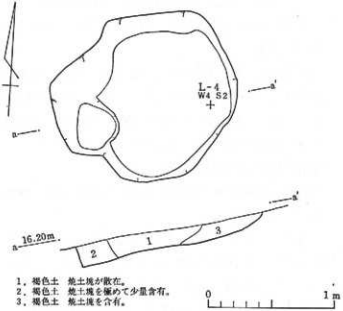


Fig.50 L-3 土坑実測図

基（A～G）である。A·C·E～Gの土坑間で重複関係がある。I-2区土坑群とは少し距離を隔てており，重複しない。

J-2A 土坑

本遺構は，J-2区のほぼ中央に位置する。J-2C土坑・J-2E土坑・J-2F土坑を切っている。

規模は93cm×52cm，確認面よりの深さは65cmを測る。壁はほぼ垂直に立ちあがり，遺構東側へむかって深くなる。覆土には焼土・炭化物を多く含む。遺物は縁1点・陶磁器片9点・瓦片7点・鉄器1点が出土している。

J-2B 土坑

本遺構は，J-2区内北端に位置する。遺構北側は未調査区へ延びる。遺構は試掘溝により大部分削除されているため，平面形態は不明である。残存部の規模は1.80m×1.30mを測る。東壁は垂直気味に立ちあがる。西壁は73°で立ちあがり遺構上部で緩やかに外反する。深さは1.70～2.0mで地山を僅かに掘込む。底部は平坦である。覆土は5層に分かれ，第2層より瓦片多数が出土した。また覆土中から径20cm大の礫が多数出土している。

J-2C 土坑

本遺構は土坑群の中で最も東端に位置する。遺構の北側部分を試掘溝に削除されている。また J-2石列とJ-2E土坑を切って掘込んでいる。残存部の規模は上端径1.23m・下端90cm×45cmである。平面は半円形，底部は不整形を呈する。壁は凹凸があるが，約80°の角度で立ちあがる。深さは確認面より約50cmである。覆土は4層である。出土遺物は，無い。

J-2D 土坑

本遺構は，土坑群の中で最北端に位置する。遺構東側は試掘溝に削除され，東側はK-2A土坑に接する。残存部の規模は上端径1.0m・下端径60cmである。平面形は円形を呈すると思われる。底部も円形と思われ，平坦である。壁はほぼ垂直に立ちあがる。

J-2E 土坑

本遺構は，南側をJ-3方形竪穴状遺構，北側を試掘溝とJ-2A土坑に切られている。またJ-2F土坑・J-2G土坑・K-2瓦管・K-2溝を切って掘込んでいる。残存部の規模は南北3.46m・東西3.20mである。深さは最深部で1.11mを測る。残存部の平面形は鉤形を呈している。南北方向土坑の壁は丸く内彎し，東西方向土坑の壁はほぼ垂直に立ちあがる。東西方向の土坑は断面形が漏斗状を呈する。

覆土は13層に分かれる。

遺物は瓦片187点・陶磁器片4点・釘1点・直径20cm大の礫を多量に出土する。

J-2F 土坑

本遺構は，土坑群のほぼ中央に位置する。遺構上部はJ-2E土坑により削除されている。残存部の規模は，上端1.4m×1.1m・下端1.2m×1.0mである。深さは約75cmである。平面形は隅丸方形である。壁は約80°の角度で立ちあがる。底部は平坦。覆土は1層である。遺物は35cm×25cm・厚さ約1.2cmの木材1点・釘1点である。木材は炭化している。

J-2G 土坑

本遺構はJ-2E土坑・K-2瓦管に切られている。残存部の規模は上端径1.6m。下端1.5m×1.0mである。壁はほぼ垂直に内彎しながら立ちあがる。

覆土は1層のみ確認できた。出土遺物は，無い。

J-3 区土坑群（Fig. 6・9・10・45・46, Pl. 23-b・24）

J-3区にはA～Fの6基の土坑がある。この6基の土坑には集中する傾向は無い。A土坑とB土坑はJ-3方形竪穴状遺構に切られており，底の部分しか残っていない。C土坑とF土坑はともに内部に多量の瓦が存在することから瓦廃棄用の土坑と考えられる。

J-3A 土坑

本遺構は，上部をJ-3方形竪穴状遺構に切られている。残存部の規模は上端径75cm・下端径45cmを測り，ほぼ円形を呈する。底面は平坦である。南壁・北壁は80°の角度をもって立ちあがる。残存部の覆土は4層である。出土遺物は，無い。

J-3B 土坑

本遺構は，東側をJ-2E土坑・J-3方形竪穴状遺構に切られている。確認面は地山面である。平面形態は不明である。残存部の平面形態は不整形を呈する。残存部の規模は，東西1.45m・南北62cmである。深さは，確認面より約20cmを測る。壁は約55°の角度で立ちあがる。底部はほぼ平坦である。覆土は1層で地山層によく似ており，焼土・炭体物をしみ状に含む。出土遺物は，無い。

J-3C 土坑

本遺構の確認面は，第Ⅰ期地山面である。平面形は長軸1.4m・短軸1.2mを測り不整円形を呈する。確認面からの深さは最深32cmを測る。断面形は緩やかに壁が立ちあがり，丸底を呈す。瓦は上層部に集中している。遺構の性格は瓦廃棄用の土坑と考えられる。

J-3D 土坑

本遺構は，J-3C土坑により東側を切られている。確認は壁でのみ認められており，平面形は把めていない。残存部の規模は長さ65cm・深さ25cmを測る。断面形態はU字形を呈する。遺物は覆土中より瓦片が多量に出土している。遺構の性格は瓦廃棄用土坑と考えられる。

J-3E 土坑

本遺構は，東側をJ-3方形竪穴状遺構に切られ，K-3瓦列を切っている。遺構は，長軸1.9m・短軸1.3mを測る不整楕円形である。掘込み面よりの深さは40cmを測る。南北に長い遺構である。丸底の底面から緩やかに立ちあがる。

出土遺物には瓦片多数と陶磁器片1点がある。すべて遺構底面上から粘質土と共に出土した。瓦片の出土状況から判断して，瓦廃棄用土坑と考えられる。

J-3F 土坑

本遺構はK-3A土坑に切られている。規模は長軸2.15m・短軸1.2mを測り，隅丸長方形を呈する。底面は平坦で，壁は垂直に立ちあがる。壁高74cmを測る。遺構覆土中層に粘質土を付着させた瓦片が多量に堆積している。同層には自然石も混入している。瓦片の堆積状況から本遺構へ瓦片・自然石を廃棄したと考えられる。

J-4 土坑（Fig. 6・12・47）

本遺構は，北側をJ-3埋桶に，東側を基礎コンクリートに切られている。平面形は長軸1.85m・短軸95cmの不整楕円形を呈する。確認面よりの深さは最深23cmを測り，南ほど浅くなる。壁は緩やかに立ちあがる。覆土は4層から成る。1層は硬質黒色土，2層は焼土層，3層は炭化物層，4層は軟質黒色土である。遺物はガラス片多数・陶磁器片9点である。

K-3 区土坑群（Fig. 6・9・48・49, Pl. 25-a）

K-3区ではA～Cの3基の土坑が検出された。A土坑は内部に多量の瓦の堆積があり，瓦溜と考え

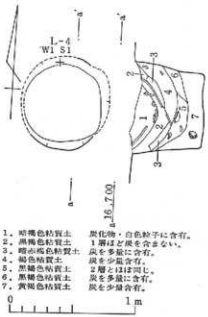


Fig. 51　L-4A 土坑実測図

られる。B土坑とC土坑は，最終面（地山層）において検出したが，ほとんど遺物が出土せず，時期を断定することは困難である。

K-3A 土坑

本遺構は，試掘溝により遺構南側 1/2 を損失している。覆土は畝質の焼土塊を多量に含有する単一層である。規模は，長軸 1.0m・短軸推定 60cm を測り，東西に長い不整楕円形を呈する。壁は丸い底からなだらかに立ちあがる。

遺物は，陶器片 2 点が出土している。これらの遺物は，底面にへばりつくように出土している。

K-3B 土坑

本遺構と K-3C 土坑は第Ⅰ期の遺構である。規模は，長軸約 1.35 m・短軸約 82cm・壁高約 10cm を測り，形状は長円形を呈する。壁は平坦な底面から，緩やかに立ちあがる。底面は，長軸約1.25m・短軸約 72cm を測り，長円形を呈する。覆土は 3 層に分かれ，おおむね褐色を呈し，砂粒・小礫を混入する。

遺物は，覆土中よりかわらけ片数点が出土している。

K-3C 土坑

本遺構は，K-3 区西側に位置する。遺構の東側に，I-2D 土坑・J-3 区土坑群・K-3B 土坑，北側に L-2 区土坑群・L-2 溝，西側に L-3 土坑，南側に濠が位置する。確認面は，地山面である。規模は長軸約 91cm，短軸約 86cm，壁高約 27cm を測る。底面は，長軸約 75cm，短軸約 66cm を測り，円形を呈する。壁は，平坦な底面から，北側で急激に，南側で緩やかに立ちあがる。覆土は，3 層に分かれ，おおむね褐色を呈し，砂粒・礫・炭化物が混入している。

出土遺物は，無い。

L-2 区土坑群（Fig. 6・11）

L-2 区では，A～C の 3 基の土坑が検出された。A土坑・B土坑はともに L-2溝を切っている。C 土坑は北壁際にあって，そのほとんどが調査区外に延びている。

L-2A 土坑

本遺構は，L-2 区に位置し，遺構の 1 部は未調査区へ延びている。遺構は，L-2B 土坑を切って掘込まれている。規模は，上端長軸 1.0m・短軸 38cm を測り，楕円形を呈する。壁は，ほぼ垂直に立ちあがる。底部は丸味をもつ。覆土は 4 層に分かれる。

出土遺物は，無い。

L-2B 土坑

本遺構は，L-2 区の東壁で断面のみ確認されている。L-2A 土坑に切られている。壁は，約 78° の角度で立ちあがる。平面形態・底部については不明である。覆土は 7 層に分かれる。覆土中に，直径 30cm 大の礫を多く含む。

出土遺物は，無い。

L-2C 土坑

本遺構は，L-2 区北壁際に位置し，1 部は未調査区へ延びている。遺構西側の 1 部は L-2溝に切られている。確認面は地山層である。平面形態は不明である。残存部の規模は，上端東西 1.9m×南北

30cm・下端東西 1.8m×南北 10cm である。深さは最深部 32cm を測る。東壁は約 80°，南壁は約 70° の角度で立ちあがる。覆土は 2 層に分かれる。1 層は砂質層，2 層は粘質土層である。

出土遺物は，無い。

L-3 土坑 (Fig. 6・9・50)

本遺構は，L-3 区に位置する。K-3 区土坑群に隣接する。第Ⅰ期の遺構である。平面形態は，不整円形を呈する。規模は，上端 1.55m×1.3m，下端 1.2m×1.15m，深さ 18cm を測る。東壁は約 10° で緩やかに，西側は 90° の角度で急に立ちあがる。底部は東から西に緩やかに傾斜する。覆土は，3 層に分かれ，各層に焼土塊を混入する。

出土遺物は，無い。

L-4 区土坑 (Fig. 6・11・12・51，Pl. 25-b)

L-4 区には遺構が少なく，土坑 2 基（A・B）が検出された。A 土坑からは，瓦・陶磁器・土師皿など，遺物が多量に出土した。

L-4A 土坑

本遺構は，L-3 溝の覆土を掘込んで構築されている。土坑の形態が，埋桶遺構と酷似している。平面形はほぼ円形を呈する。規模は，上端径 75cm・下端径 60cm を測る。確認面よりの深さは約 56cm を測る。底面は平坦であり，壁は約 95° の角度で垂直に立ちあがる。覆土は，7 層に分かれる。各層ともに炭化粒を含んでいる。

出土遺物は，瓦片多数・陶磁器片 36 点・土師皿片多数・銅銭 2 点・骨 1 点である。

L-4B 土坑

本遺構は，上部を削平されている。残存部の規模は，長軸約 40cm・短軸約 35cm を測り，楕円形を呈する。深さは最深部で 11cm を測る。断面形態は，U 字型を呈する。覆土は，3 層に分かれる。

遺物は，陶器片・大型の礫が出土している。

小穴列

L-2A 小穴列 (Fig. 6・12)

本遺構は，L-2 区において検出された 3 基（P_1～P_3）の小穴である。小穴は，約 90cm の間隔で東西に一列に並んでいる。

P_1 東側に位置する小穴である。柱穴と柱抜き取り穴と思われる部分がある。柱穴部の規模は，直径 35cm・深さ 25cm を測る。柱穴抜き取り部分は，上端径 25cm×20cm である。覆土は，5 層に分かれる。遺物は，瓦片数点が出土している。

P_2 中央に位置する小穴である。上端径 30cm の円形を呈し，下端は 15cm×10cm の長方形を呈する。底部はほぼ平坦である。壁は垂直に立ちあがる。覆土は，4 層に分かれる。遺物は，瓦片が多量に出土している。

P_3 西側に位置する小穴である。柱穴の西側部分は未調査区へ延びている。規模は，上端径 55cm・下端径 10cm を測り，円形を呈する。底部はほぼ平坦である。壁は垂直に立ちあがる。覆土は，層に分かれる。遺物は，覆土中より瓦片が多数出土している。

L-2B 小穴列 (Fig. 6・10)

本遺構は，L-2 区において検出された 3 基（P_1～P_3）の小穴である。A 小穴列の南側 70cm に位置する。小穴は，約 90cm の間隔で東西に一列に並んでいる。

P_1　東側に位置する小穴である。K-2 溝を切っている。規模は，上端径 25cm・下端径 20cm×15 cm の不整円形である。底部はほぼ平坦である。壁は垂直に立ちあがる。覆土は，2 層に分かれる。遺物は，覆土中より瓦片 3 点が出土している。

P_2　中央に位置する小穴である。K-2 溝を切っている。規模は，上端径 55cm・下端径 15cm・深さは最深部で 23cm を測る。平面形態は，円形を呈する。底部はほぼ平坦である。壁は約 60° の角度で立ちあがる。覆土は，3 層に分かれる。遺物は，覆土中より瓦片 5 点が出土している。

P_3　西側に位置する小穴である。L-2 溝の覆土を掘込んでいる。規模は，上端 30cm×22cm・下端径 8cm である。平面形態は，楕円形を呈する。底部はほぼ平坦である。壁は垂直に立ちあがる。覆土は，3 層に分かれる。遺物は，覆土中より瓦片 1 点が出土している。

竪穴状遺構

J-3 方形竪穴状遺構（Fig. 6・12・52，Pl. 26）

本遺構は，遺構の北側で J-2E 土坑を切っている。規模は，東西 3. 4m×南北 2. 6m，深さは確認面より 1. 2m を測る。平面形態は，長方形を呈する。底面は，西壁から東へ 80cm の所で，約 20cm 高くなっている。

遺構の一段低い面に，方形に組合わせた胴木を据え，その上に 4 本の柱を直立させている。柱間の 4 辺には，板材による壁を貼っている。胴木の規模は，長さ 2. 3m・厚さ 2～3cm・幅 13cm を測る。柱の規模は，厚さ 1～2cm・幅 15cm・長さは不詳である。壁材・柱材の組合わせ方は不明であるが，胴木には，北西・南西の隅に鉄製の鎹が打ち込まれている。遺構西壁・南壁からも，胴木と思われる木材が検出されている。

遺物は，レンガ片・瓦片が少量出土している。　（鍋島直久）

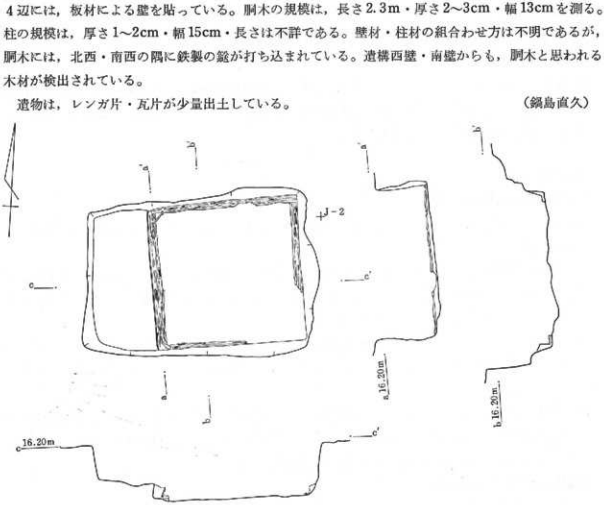


Fig. 52　J-3 方形竪穴状遺構実測図

第5章　遺　　物

この度の郵便局増築に伴う有岡城跡第32次調査では，コンテナパット200箱にのぼる遺物が出土した。遺物の種類は多岐にわたって，陶磁器・瓦の他に漆器椀などの木製品や，石仏・石臼・五輪塔などの石製品・金属製品等がある。量のうえでは瓦が50%以上を占め，その次に陶磁器・石製品の順となっている。陶磁器の総量は約80箱である。

本地点の調査では，最終面の，通称地山層までの間に4面の生活面を検出している。各面の間には整地層の堆積が認められ，上下面を分けている。今回の調査では，上層から下層へ1枚ずつ層を剝がす方法で生活面を検出していき，明治期→江戸後期→江戸前期→戦国期の生活面を明らかにした。第2章で述べた第Ⅰ期～第Ⅳ期はこれと同じである。本章では，出土した遺物について説明するが，説明にあたっては，各期の遺構出土遺物を時期毎にわけて詳細を述べることにする。しかし，第Ⅳ期出土の遺物については割愛した。整地層あるいは位置不明の遺物は遺構外出土遺物として一括した。

Ⅰ期の遺物（Fig. 53・54，Pl. 27・28・29）

この時期の明確な遺構は濠だけである。よってここに掲げた第Ⅰ期の遺物はすべて濠出土の一括遺物である。

土師器（1～6）

図示した6点の土師皿のうち，1・3・5は底部が若干上部に突き出す，所謂「ヘソ皿」に近い形態を残している。しかし，その突き出す度合いは極めて弱い。これに対し，2・4・6の底部は丸味を帯びている。色調は1・3が灰白色，その他は黄橙色を呈している。2・4・6には口縁部に煤の付着が認められる。

陶器（7～11）

陶器には備前焼，瀬戸・美濃焼，丹波焼がある。丹波焼は7の他に擂鉢片が少量出土している。7は口縁部が強く外反し，胴部は最大径を中ほどにもつ長胴壺である。胴部上半には，灰を被った痕が白く残る。胎土は灰色を呈している。11は備前焼の大皿。轆轤成形の後，底部のみ篦削りを施している。底部には「吉」の字が篦書きされている。口縁端部の作りからみて，蓋の可能性もある。8～10は瀬戸・美濃焼の皿。8は，薄緑色の灰釉を施した灰釉丸皿。見込みには菊花様の「印花文」が押印されている。高台は断面三角形を呈する付高台である。高台内に輪トチの付着した痕が残る。10も同様，灰釉皿である。ただ8と異なり，体部はいったん直線的に開いた後，中ほどに弱い稜を成し，口縁部は緩やかに外反する。高台は付高台で，断面は三角形を呈する。9は鉄釉の稜皿。口縁部は端部に至り，僅かに外反する。高台は幅広に削り出されている。高台周辺は無釉である。

漆器（12・13）

12・13は共に，内面朱漆・外面黒漆に塗られ，外面に朱漆により文様が描かれている。12は形状をよく残すが，土圧により一方に強く歪んでいる。高台は「八」の字に開き，高い。文様は丸の中に綾杉を描いたものを3個三角形状におき，それを2箇所に配している。13は，高台は低く，「八」の字状に開いている。外面には文様の一部が残るが，文様の種類は不明である。

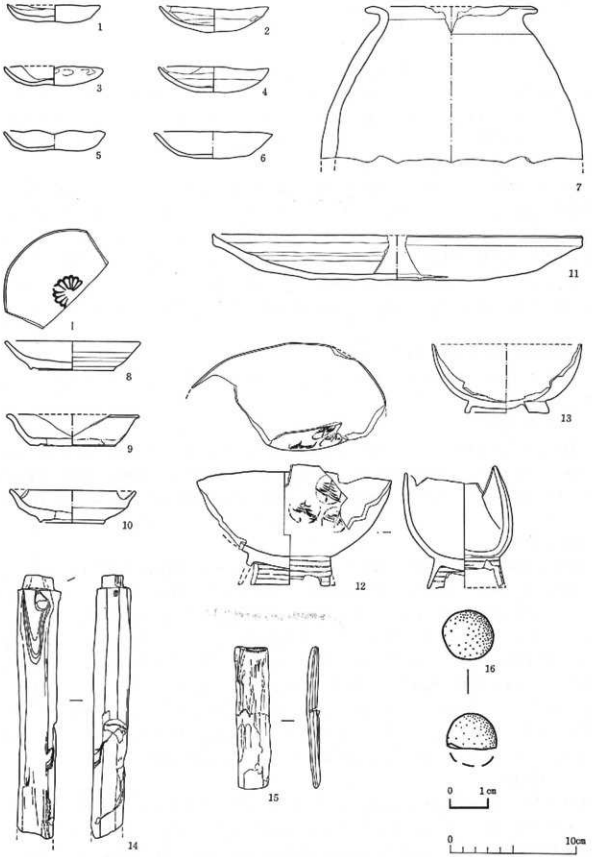


Fig.53 Ⅰ期の遺物（1）

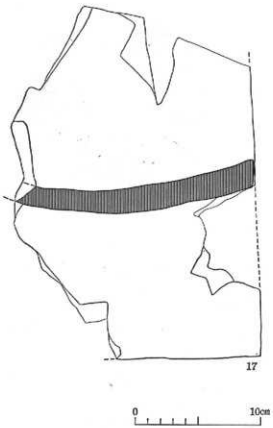


Fig.54　Ⅰ期の遺物（2）

木器（14・15）

木製品は漆器も含め多数出土したが，いずれも小破片で，しかも加工された資料は少ない。この中でその一部を図示し説明を加える。14 は，丁寧に面取りされた加工品。一方に柄のような削り出しがある。15 は小型の板状加工品である。

鉄砲玉（16）

鉛製の鉄砲玉。径 1.3cm の球形を呈する。約半分が欠損している。この鉄砲玉は，遺物の中で唯一，有岡城をめぐる攻防を証明し，濠を挟んで実戦が行なわれたことを伝えてくれる貴重な資料である。

瓦（17）

濠の中から出土した瓦には丸瓦と平瓦がある(註1)。17は比較的よく形状を留めている。凸凹面は共に篦により粗く撫でられている。この他図示しなかったが，瓦には須恵質の厚手の瓦と胎土が灰白色で，器面が灰黒色の薄手の瓦が出土している。前者の須恵質の瓦は重く硬いのに対し，後者は軽くやや軟質である。これでいうと17は後者の平瓦である。

Ⅱ期の遺物（Fig. 55～59，Pl. 29～33）

Ⅱ期は，濠が埋められて後，建物が並び町屋として利用される段階である。ただ調査区内には，建物を示す礎石や柱穴等は無く，庭園と考えられる施設が広く検出されているのである。この理由は，調査範囲と当時の道の間にかなりの距離を残していることである。その未調査の所に家屋が建てられていたのであろう。江戸前期の寛文年間に描かれた伊丹郷町の絵図（Fig. 3）にも，この地点には道に面して家屋が建てられていたことが示されており，おそらく調査地点は屋敷の裏庭にあたるのであろう。

さて，この面で検出した遺構の時期については，庭園関係の施設から出土した遺物が古く，それ以外の土坑や，ゴミ穴状の土坑の遺物には，新しい時期を示す遺物が出土している。おそらくこの面で建物の建替えが行なわれた結果であろう。時期は，17世紀初頭から18世紀前半頃と推定される。

土師器（1～7）

1～7はすべて土師皿である。出土遺構別にみると，1～3はI-3C土坑，4～6はK-3溝，7は濠埋没後，その上部に構築されたJ-3石組より出土している。大きさは1と4が小さく，他は大きく口径は10cm前後である。器形の上では，4が平坦な底部から短かく立ちあがる口縁部を成し，5が「S字」状に屈曲する口縁部を成す他は，底部に緩やかな丸味をもち，そのまま上方に内彎気味に立ちあがっている。この段階では，濠から出土した底部が内側へ突出する「ヘソ皿」型は認められない。1～7は，いずれも砂目積みの唐津焼皿と共伴している。

陶器（8～16・21・22）

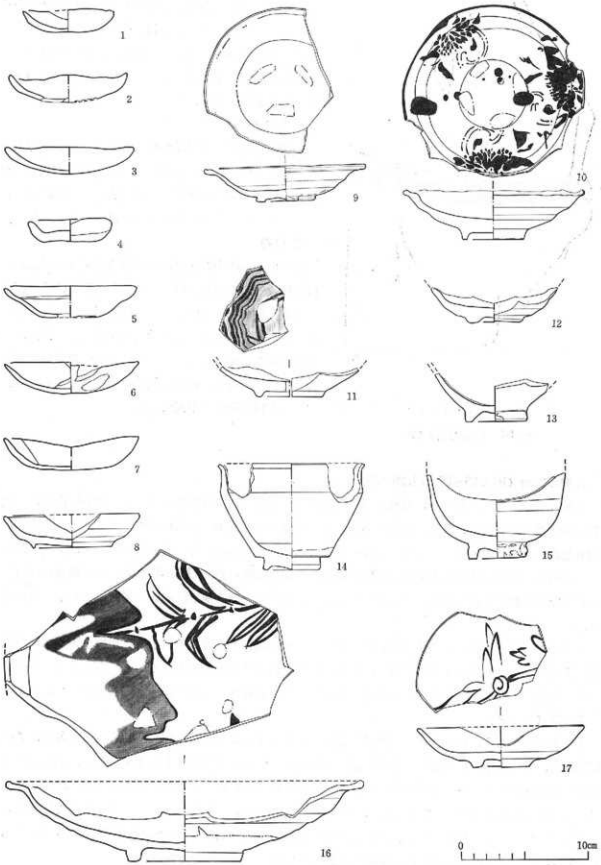


Fig.55 Ⅱ期の遺物（1）

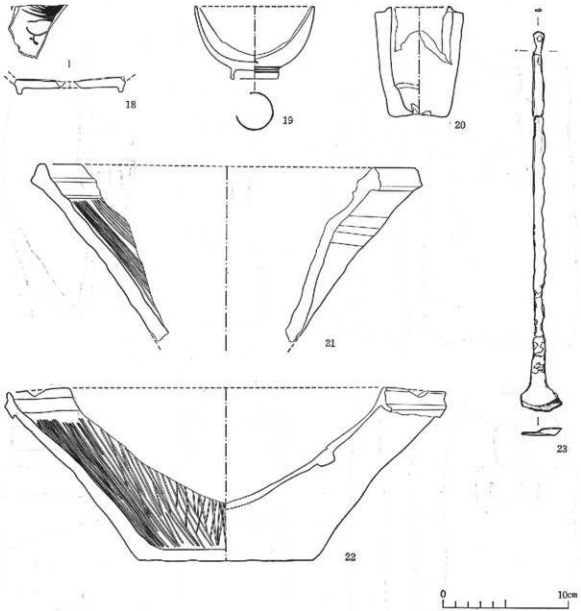


Fig.56　Ⅱ期の遺物（2）

9～11は唐津焼砂目積の皿。9は口縁端部内側に浅い溝が全周する「溝縁皿」である。見込みに3箇所砂目積痕が残る。10も同様に「溝縁皿」であり，型紙摺りの手法によって花文が描かれている。花文は口縁に沿って三方に配され，文様の部分は長石釉が厚く溜ってできている。この他のところにも釉が薄くかけられている。見込みに4箇所，砂目積痕が残る。11は刷毛目唐津。見込みに砂目積痕が残る。高台無釉。12は唐津焼の胎土目積皿である。高台周辺は無釉。胎土目積の唐津焼皿は，本品を含め，2点出土している。13は緑釉碗。内面には透明の釉をかけ，外面は緑釉をかけ流しており，高台まで釉がたれている。また，高台は削り出されている。13と共伴する遺物には，網目文碗・青磁碗（Pl. 31-8）と備前焼甕・同摺鉢・丹波焼摺鉢などがある。15は唐津焼碗。腰が強く張り，体部は直線的に上方に延びる。外面には粗い削りの痕が残り，その上に厚く長石釉がかけられている。高台には釉がかかるが，露胎のところもある。16は二彩唐津の大皿。高台から緩やかに開き，口縁端部

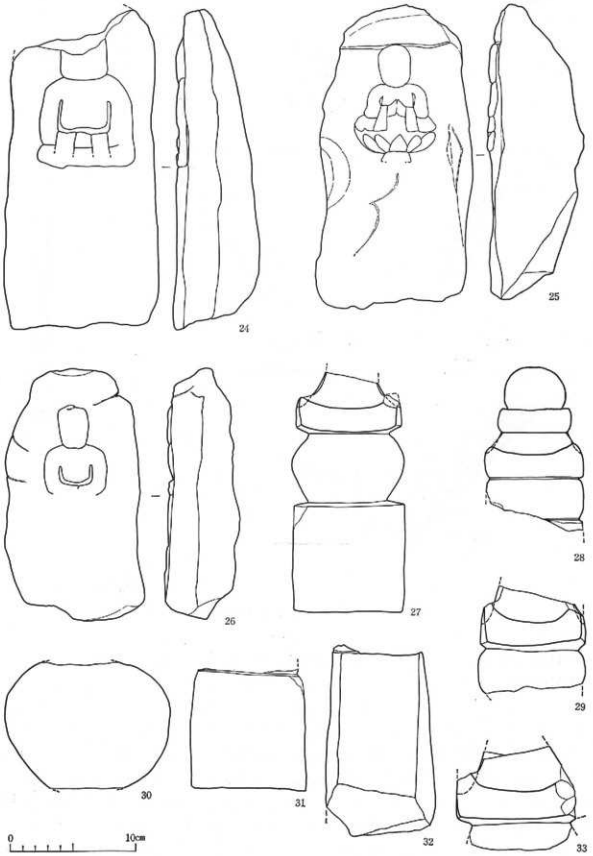


Fig. 57　Ⅱ期の遺物（3）

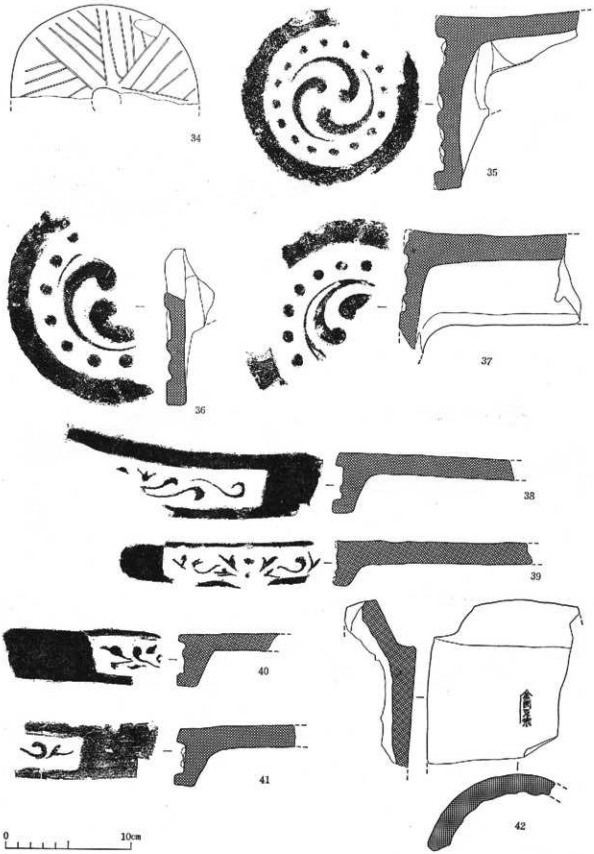


Fig.58 Ⅱ期の遺物（4）

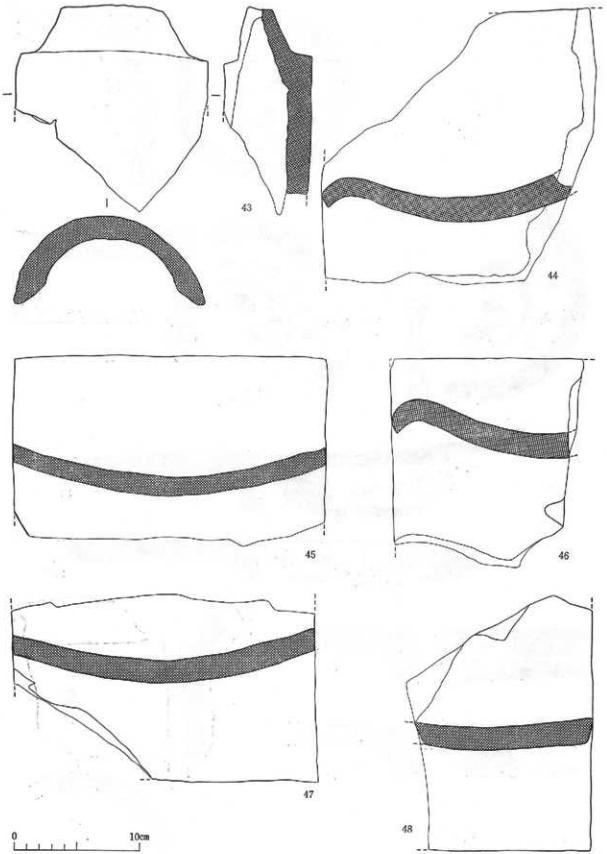


Fig.59 Ⅱ期の遺物（5）

に至り強く外傾する。内面は白土を刷毛で同心円状に塗り，その上に草花文を鉄絵で，その先を銅緑釉で波状に描いている。さらにその上には薄く長石釉をかけるが，外面では高台周囲には及んでいない。見込みには5箇所に砂目積痕が残る。これと共伴する遺物には，銅製の杓子（23）がある。8と14は瀬戸・美濃焼の製品である。8は灰釉丸皿。8を出土したJ-3石組遺構は漆に重たり，漆の埋土を深く掘込んで構築しているので，漆内の遺物が調査中にまぎれこんだ可能性がある。14は天目茶碗。体部が強く立ちあがり，口縁部が長く端部もあまり外反しない。高台内の削りは，中央が下方に張り出す輪高台である。高台周辺は露胎。この遺物は，4～6の土師皿・型紙摺りの唐津皿(10)，肥前染付磁器皿と共伴する。同期の摺鉢として2点（21・22）を図示した。21は底部を欠損する。口縁部は断面三角形を呈し，内面には，口縁部に弱い2条の沈線が回る。卸目は7本を1単位とし，上方では隣の単位に，1.5cmほどの間隔をあけている。外面はすべて撫でによって仕上げられ，体部上位には横に平行する凸凹が数条残る。胎土は黄色がかった褐色を呈す。これに対し，22は，口縁部は外側に折返され，口唇部は小さく丸く納められる。卸目は7本を一単位とし，粗く引かれ，見込みは同一工具で一方向にのみ引かれている。外面には指頭圧痕が顕著に残され，その土を軽く撫でて仕上げている。胎土は灰白色を呈す。この2点は，ともにI-3G土坑から出土し，19の染付磁器碗・20の焼塩壺と共伴している。この焼塩壺の形態やその他の共伴遺物には，同期の他の遺物に比べ新しい要素が認められるので，21・22の摺鉢は同期最終段階の遺物であろう。

磁器（17～19）

17・18は共に肥前の皿である。17は内面にやや崩れた花文を染付している。高台は小さく畳付に砂の付着が認められる。釉調は全体に青味がある。18は高台径の大きな皿。高台には砂の付着がある。内面には草のような文様が描かれている。やはり全体に青味がかった釉調を呈している。17は土師皿（1～3）と唐津焼砂目積皿（9）と共伴する。19は肥前染付碗。

焼塩壺（20）

欠損する部分が多いため，銘の有無は不明。口縁部に蓋を受ける立ちあがりがある。内面には布目痕がよく残されている。

金属製品（23）

23は銅製の杓子。柄は扁平な板状で，一方に小さなさじを設け，一方には孔が穿かれている。さじの部分は土圧でつぶれ，しかも先端を欠損するため，どの程度の大きさであったのかは不明。

石製品（24～34）

石製品には石仏3体と，五輪塔は残欠も入れて7基と石臼一点が出土した。これらの石製品の出土状況は，石組遺構や石列に使用され，普通の石と同様の扱いを受けている。石仏をこの時期の遺物として図示したが，信仰の対象として使用されていた以上，製作時との間に時間差を考慮しなければならないだろう。ただ，この時期に多く転用されるということは認められるのである。24～26の石仏は，器面が荒れているので顔の表情やその他細部については不明な箇所が多い。いずれも舟型光背を有する「大日如来像」と考えられる。24は上部が欠損し風化著しく印相は不明瞭。手の左右には絡子が垂れる。25は比較的よく残されており，台の上の蓮華座に大日如来が座していることが判る。手の左右には絡子が垂れる様子は24と似ている。26も風化著しく，上半身のみ判別できる程度である。

五輪塔はすべて一石から彫られた一石五輪塔である。完存するものは1点も無い。27は火輪以下が遺存。水輪の最大径は中位よりやや上にあり，横断面では方形に近い形になる。28は地輪を欠損。

各部位の接点はあまり彫りこまれず，火輪から地輪まで同じ幅となっている。水輪断面は極めて方

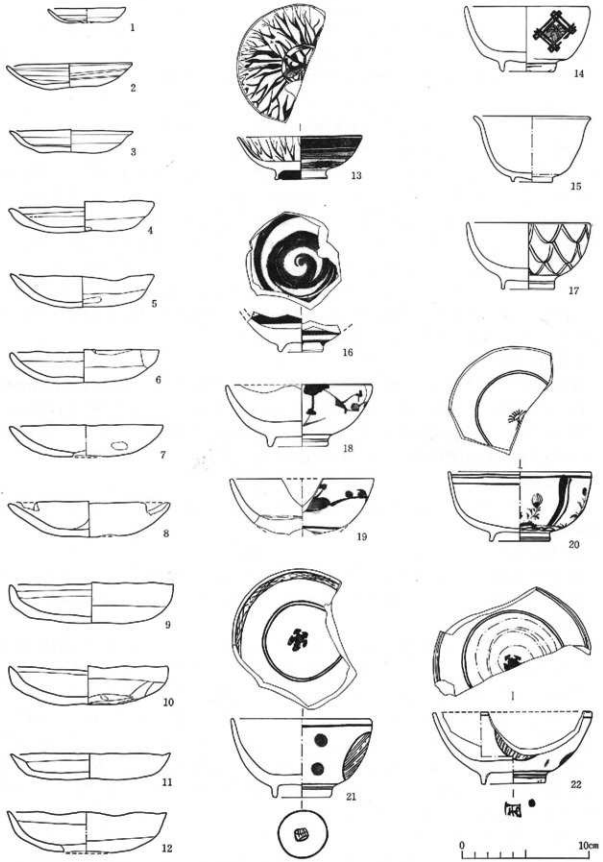


Fig. 60　Ⅲ期の遺物（1）

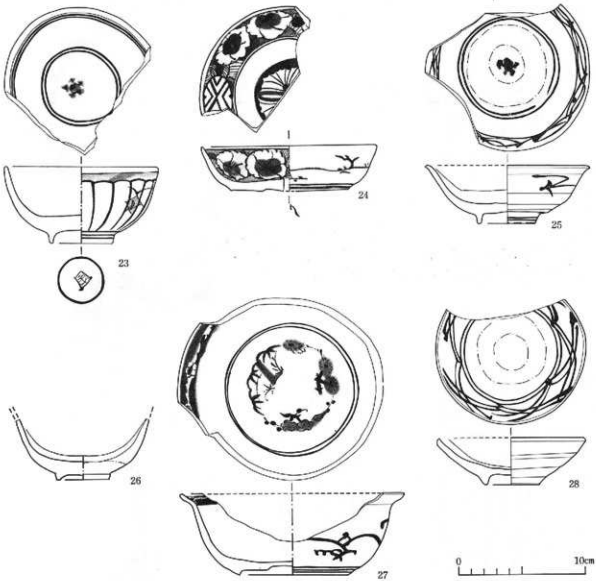


Fig.61　Ⅲ期の遺物（2）

形に近い。29・33は火輪と水輪のみ遺存。形態的には28に近い形である。30は水輪のみ遺存。最大径は中位やや上にあり，30cmを測る。出土した五輪塔中，最も大きい。31・32は地輪。両者とも水輪との接点を僅かに残すが，その削りこみは浅く小さい。板碑・五輪塔の石材はすべて花崗岩製である。

石臼が1点出土している。34は下臼。約半分欠損する。推定すると刻目は8区画あり，1区画に4本の条線を彫りこんでいる。花崗岩製。

軒丸瓦（35～37）

35～37はすべて同一の土坑から出土するが，巴文に違いが認められる。35は頭部が小さく，尾は他の巴と接しない。36は尾は接しないが，頭部は肥大する。37は頭部が大きく，尾が接していて，巴は上面が丸く盛りあがらず平坦である。いずれも左巻の三ツ巴文で，周囲に珠文を配している。35の珠文の数は16個である。

軒平瓦（38～41）

軒平瓦の4点はいずれも均整唐草文である。このうち38～40は軒丸瓦（35～37）と同じ土坑から出

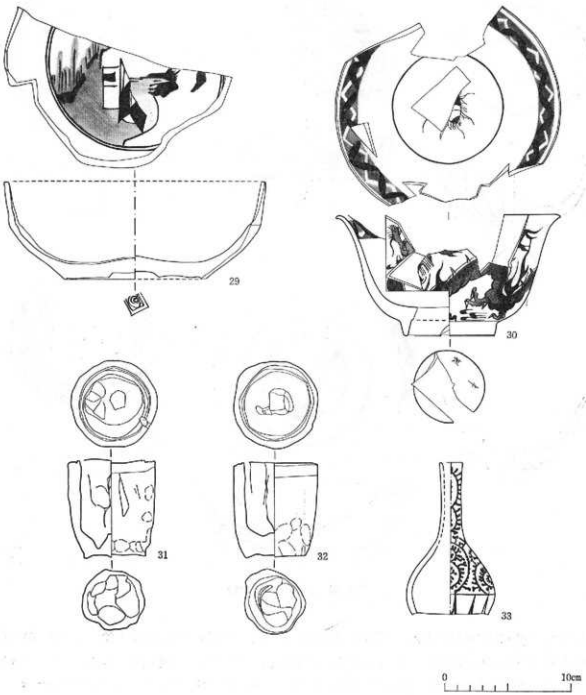


Fig.62 Ⅲ期の遺物（3）

土している。やはり軒丸瓦同様に文様に違いが認められ，大きさにも大小がある。いずれも断片であるため，細部にわたる比較は困難であるが，端部の弯の流れをみると4点とも異なることが判る。

丸瓦（42・43）

2点を図示したが，このうち42には，『金岡瓦宗』銘が凸面中央に印刻されている。この銘は軒平瓦にも例がある。現在のところこの銘によって産地を限定することはできていない。

平瓦（44～48）

44・46は桟瓦である。断面をみると，両者とも桟の部分の盛りあがりは小さく丸く仕上げられてい

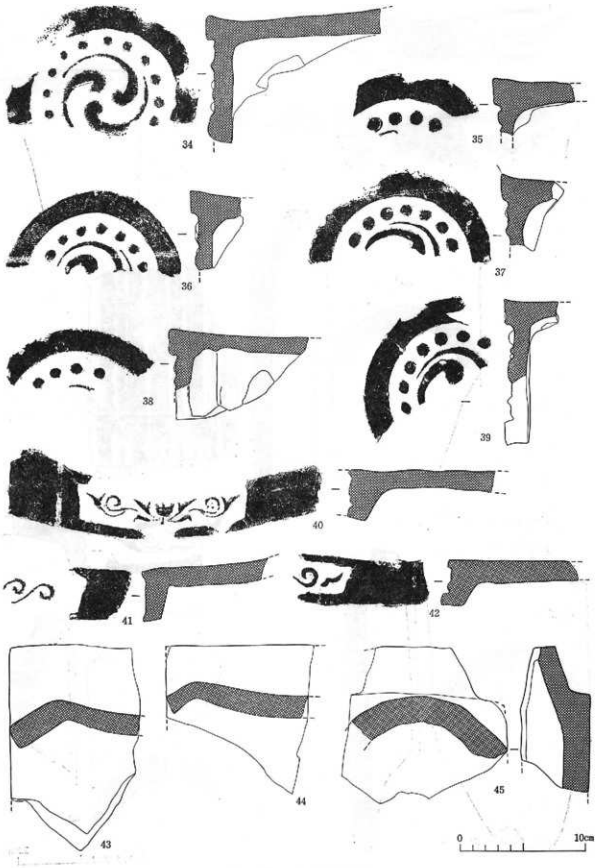


Fig. 63　Ⅲ期の遺物（4）

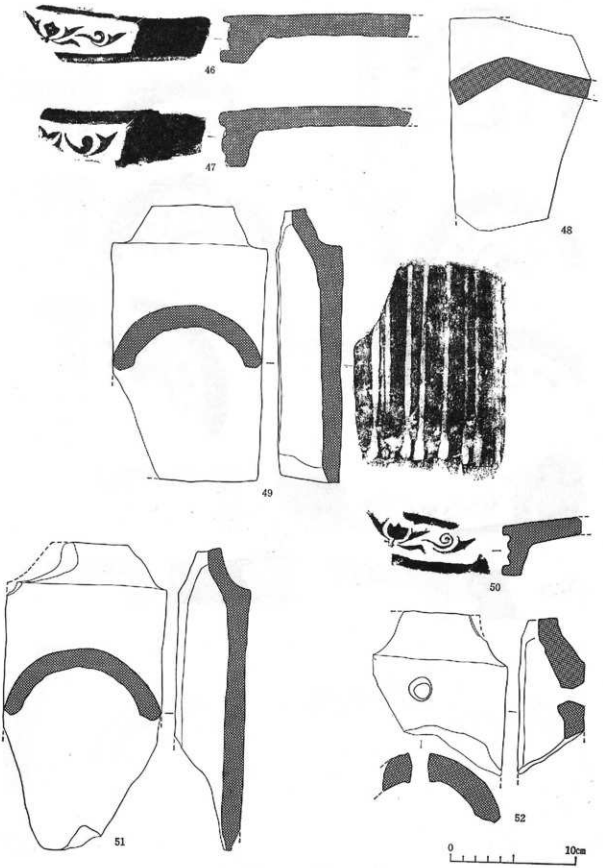


Fig.64 Ⅲ期の遺物（5）

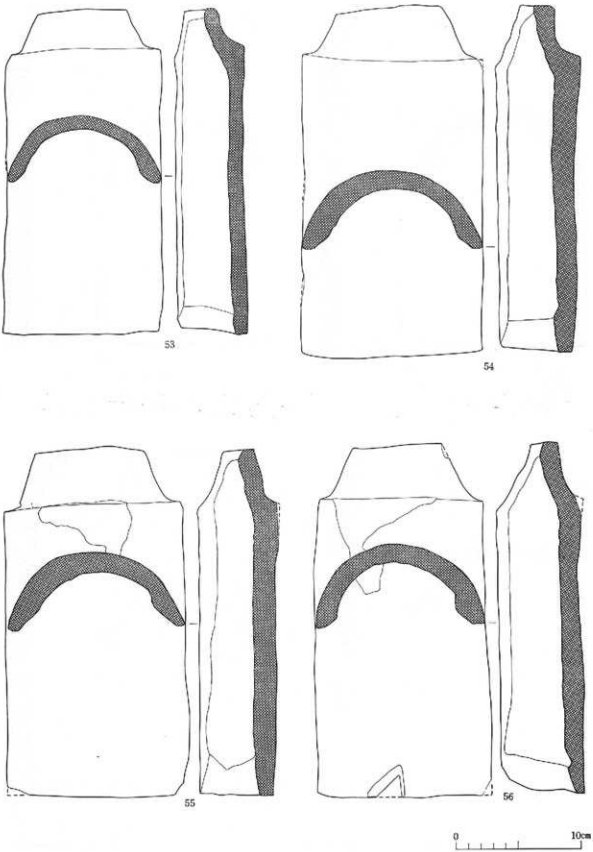


Fig.65 Ⅲ期の遺物（6）

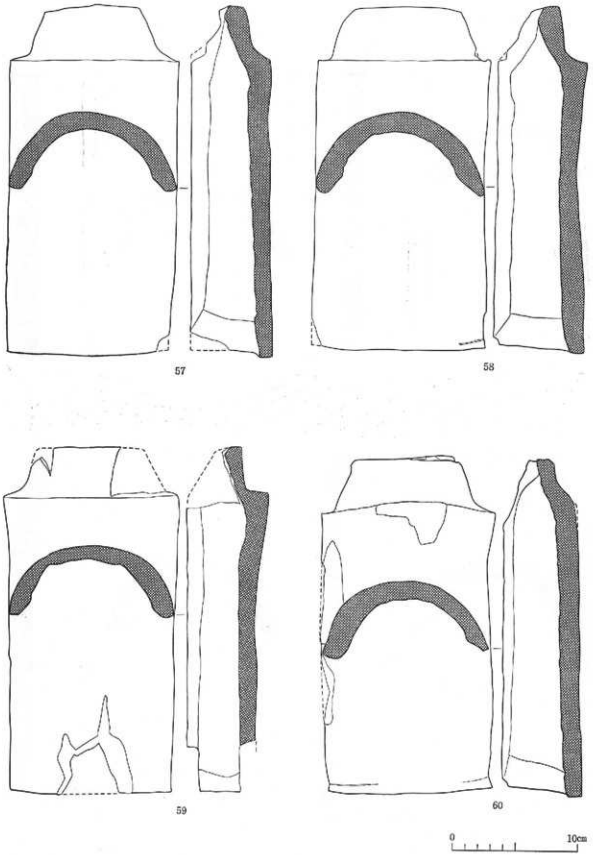


Fig. 66　Ⅲ期の遺物（7）

る。凸面・凹面とも「篦撫で」によって整形されている。この桟瓦は，35～37の軒丸瓦と同一の土坑から出土しているが，その量は極めて少なく，少量が補助的に使用されていたこともいえる。桟瓦は延宝年間に発明されたと言われるが，そうだとすれば，瓦の使用期間も考慮すると初期の頃の製品と考えられる(註2)。

III期の遺物（Fig. 60～66・P1. 34・35・46）

第Ⅲ期の面では，伊丹郷町が酒造業で栄えていたことを裏付けるように，当地点に酒蔵が建造されている。酒蔵の規模は正確には把握できないが，西側調査区西半分に建てられていたことが判る。

酒蔵の創業期間は遺物からみて，江戸中期頃（18世紀前半）から，I-3F 土坑など酒蔵解体に伴って大量の瓦を廃棄したと考えられる土坑が掘られた江戸後期（18世紀末～19世紀初頭）と思われる。

当期の遺物は，L-4A 土坑・I-3F 土坑・I-2I 土坑から良好な一括資料が得られたので，その遺物を中心に説明を加えることにする。

土師器（1～12）

1～12はすべて土師皿である。1～8は J-4A 土坑から出土した。1は口径の最も小さい土師皿で，轆轤によって成形されている。底部には糸切り痕を残している。2・3も同様に轆轤によって成形されている。2は，1箇所，3は4箇所に煤の付着した部分があるので，灯明皿として使用されていたことが判る。4～8は手捏ねによって成形されている。いずれも扁平な底部から緩やかに開く口縁部を有する。器厚は底部より口縁部の方が厚く仕上げられており，口縁部に煤の付着が認められる。9は，I-2I 土坑出土。扁平な底部から直立気味に立ちあがる口縁部を有し，4箇所に煤の付着がある。口径も大きく，厚手。手捏ね成形。10～12は I-3F 土坑出土。11は器高が低いが，口縁部が直立気味に立ちあがる形態は9と共通する。外面には指頭圧痕がそのまま残るが内面は丁寧に撫でられている。いずれも口縁部に煤の付着がある。手捏ね成形。

この時期の土師皿には，口径の大小が顕著に認められる。各々の土師皿の口径数値を挙げると，1は，6.2cm，2・3は9.6～9.8cm，4～6は11.4～11.7cm，7は12.2cm，8～12は12.6～13cmとなっている。7は小破片を復元実測しているため本来の数値を示しているとは言い難いが，他はすべて実数値である。これまで言われている如く，土師皿に規格があるとすれば，1は2寸，2・3は3寸，4～6は3寸5分，8～11は4寸となる。この時期の土師皿の形態及び成形技法上の特徴は，轆轤成形の土師皿（1～3）が手捏ねの土師皿に伴って出土したことである。これと共伴する遺物にはコンニャク印判の染付碗（14）と唐津焼刷毛目碗（15）があり，時期は18世紀前半頃に比定される。また，大型で口縁部が直立する土師皿（9～12）は2つの遺構から出土したが，共伴遺物でみると後出の要素が強く，18世紀後半～19世紀初頭に比定される。

陶器（13・15・16）

13・16は刷毛目碗である。13は浅碗で，高台は小さく「八」の字状に開く。内面はちりめん刷毛，外面は上部において横方向に直線的な刷毛目が施され，下部では波状の刷毛目が施されている。16は底部のみ遺存。内外ともに渦巻状の刷毛目が施されている。見込みは蛇ノ目釉ハギ。15は口縁部が緩やかに外反する碗で，高台は短かく小さい。高台部を除いて全体に淡い緑色の釉が施されている。

磁器（14・17～30・33）

14は外面にコンニャク印判による井桁桐文を3箇所に施文している。17は二重網目文と高台に2条の線が引かれている。18・19は草花文と条線を施文する碗で，ともに口縁部の開く形態である。20は

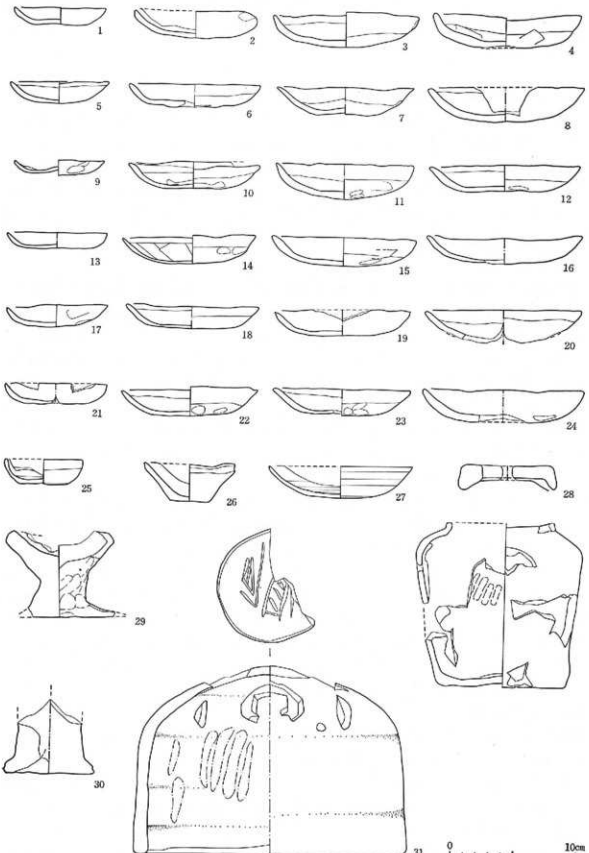


Fig.67　遺構外出土の遺物（1）

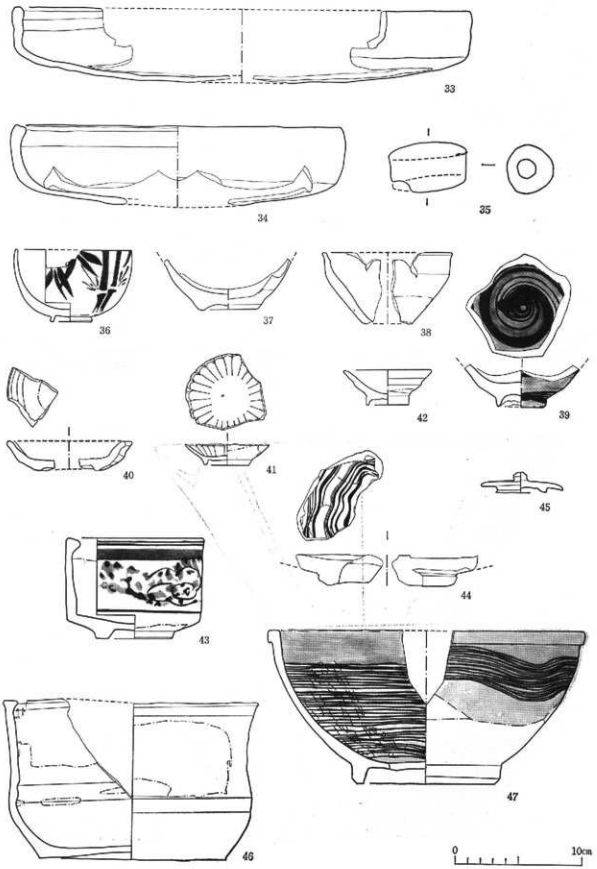


Fig. 68　遺構外出土の遺物（2）

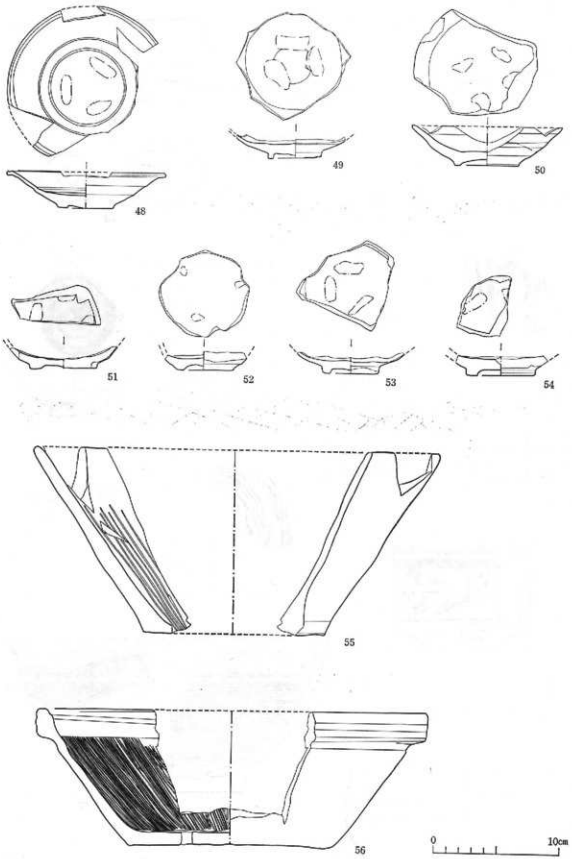


Fig.69　遺構外出土の遺物（3）

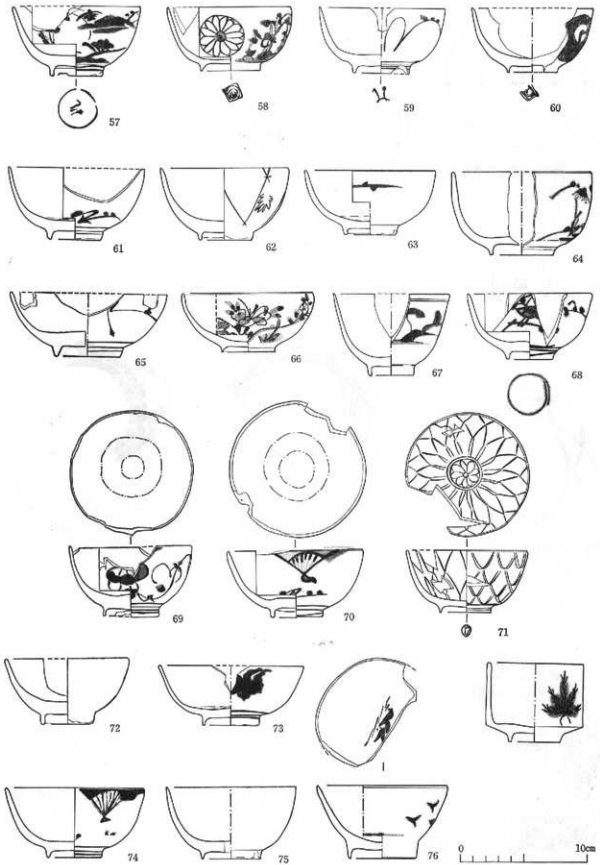


Fig.70　遺構外出土の遺物（4）

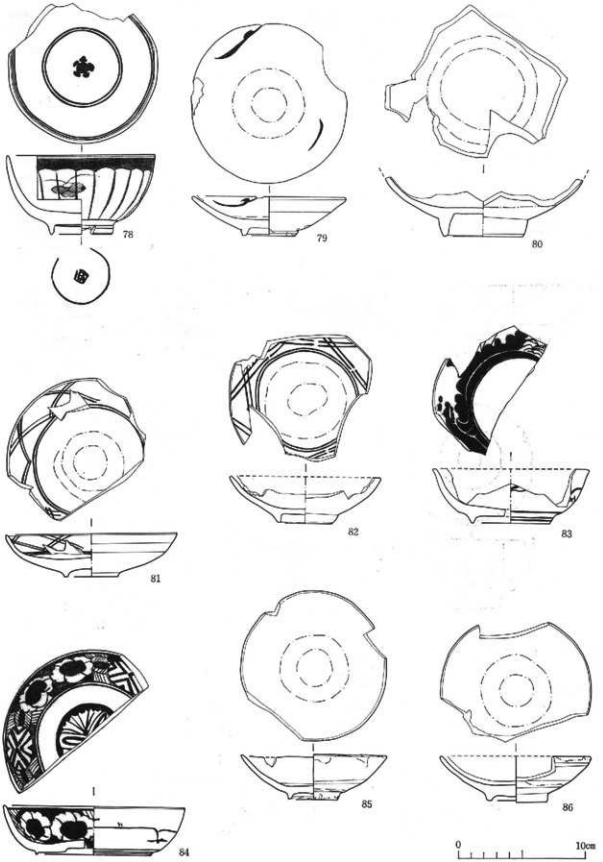


Fig.71　遺構外出土の遺物（5）

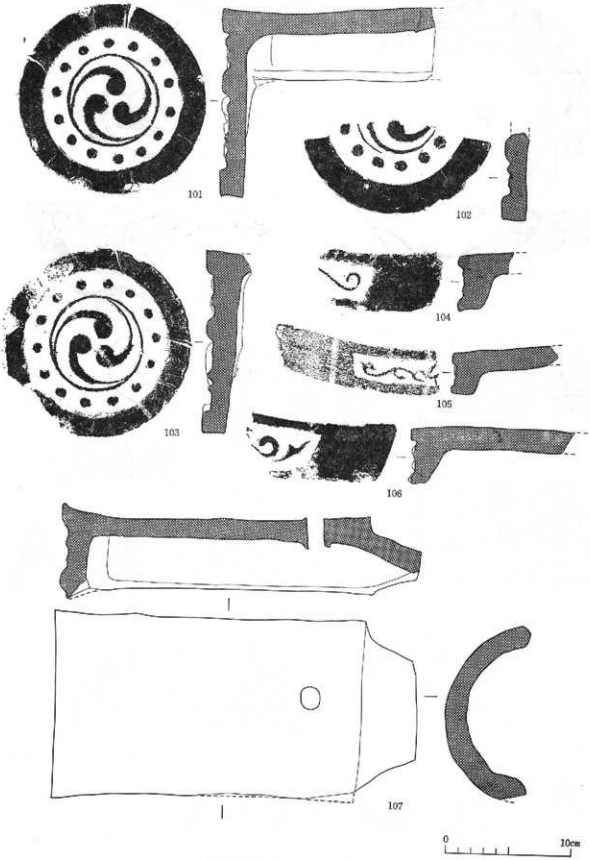


Fig.73　遺構外出土の遺物（7）

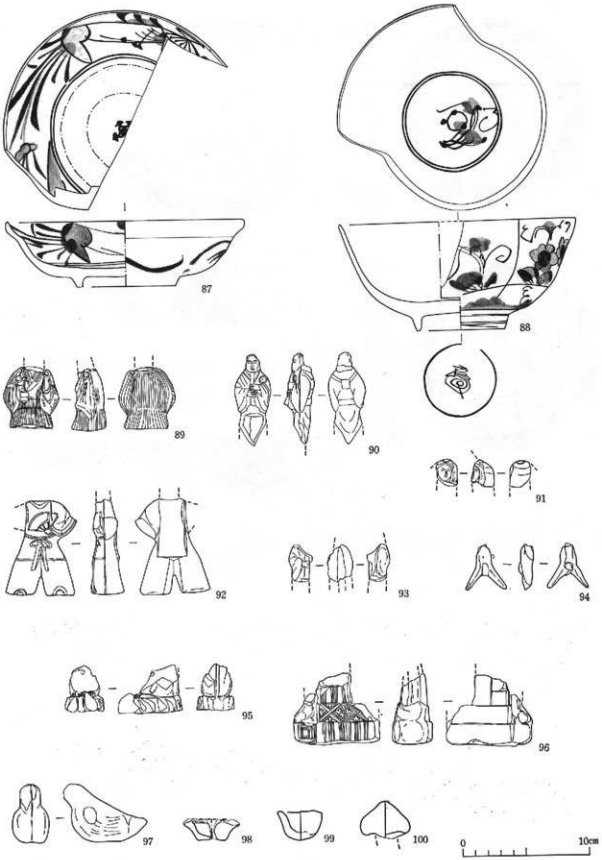


Fig.72　遺構外出土の遺物（6）

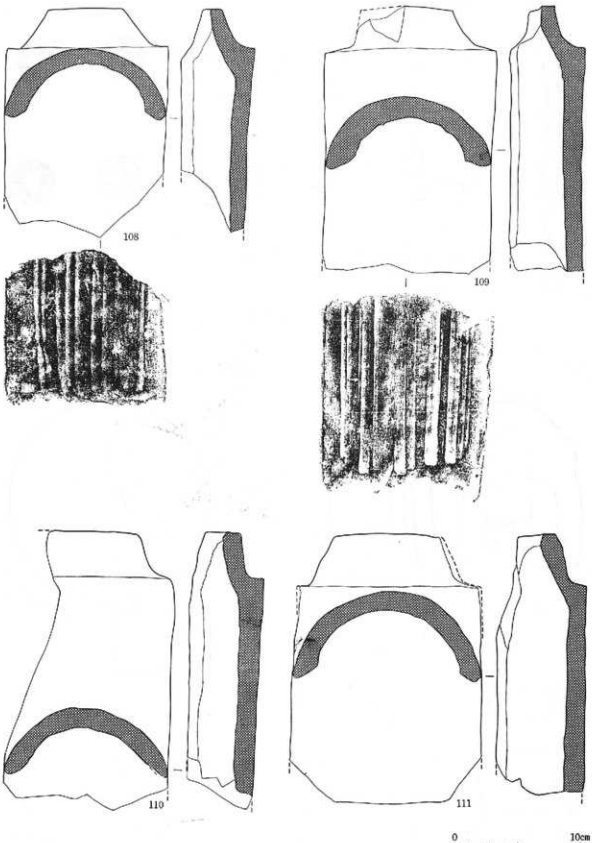


Fig.74　遺構外出土の遺物（8）

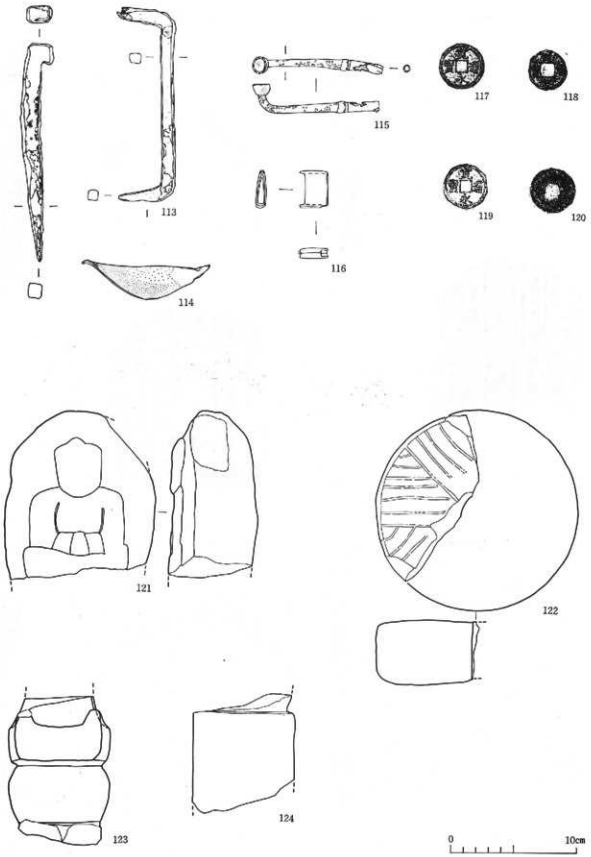


Fig.75 遺構外出土の遺物（9）

器厚が薄く，丁寧な染付が内外面に施されている。外面は縦に区画された中に草花が描かれ，区画割草花文，内面には，見込みに二重に回る条線の中に花文が描かれている。21～23は厚手大型の碗で，いずれも見込みにコンニャク印判による五弁花が描かれている。21は外面に丸文，口縁部内面に２本の条線によって帯状に区画された中に，斜格子文様が一巡する。見込みには五弁花の周囲に２条の線が回る。22も丸文が施されるが内面には斜格子文のかわりに条線が描かれ，見込みは蛇の目釉ハギが成されている。23は外面に連子格子蝶文，内面には条線が口縁部と見込みに回る。24は口縁部が上方に立ちあがり，器形に深みがある。皿というより浅い鉢という方が適当かもしれない。内面には口縁部と見込みを花文とその他の文様で埋めている。外面は，内面に比べ，僅かに草文が描かれている。25・26は碗と皿の中間的な形態を示している。25は深みのある器形で，内面には，見込みに崩れた五弁花，そのまわりは蛇の目に釉が剝がされている。外面には折松葉文が描かれる。28は口縁部が直線的に開く。施文は内面のみで二重の線による斜格子文が描かれている。見込みには蛇の目釉ハギが認められる。27は口縁部が強く外反する。底部は蛇ノ目凹型高台。文様は内面には見込みに松竹梅文，口縁部に波頭文，その間に二重の条線を回らしている。外面には唐草文とその下方に３本の条線が描かれている。29は青磁染付である。口縁部は一担外方に開き，その後直線的に立ちあがる。底部は蛇ノ目凹型高台である。内面には口縁部に帯状の区画の中に草花文，見込みに山水画風の風景が描かれる。30は口縁部が緩やかに外反する。外面には竜が，内面には，見込みと口縁部に文様が描かれる。高台には「○○年製」の文字が書かれている。29と30は焼継された痕が残る。33は蛸唐草文が描かれている。

焼塩壺（31・32）

31・32はともにI-2I土坑出土の焼塩壺である。円筒形を呈すが，底部近くが僅かにすぼむ。口縁部に蓋を受ける立ちあがりが残る。ともに無銘。内面には粘土を板状に切った時の糸切りの痕が斜目の線として残り，その上に布目痕が重なる。外面にも糸切りの痕が残るが，ほとんどの部分は「撫で」によって消されている。底部内面には円筒形の本体に新たに別の粘土を加えて底とした痕が明瞭に残る。両者ともに内面には粘土のつなぎ目がある。

軒丸瓦（34～39）

６点とも三ツ巴文の周囲に連珠文を配している。すべて左巻きの巴文で，尾は短かい。34の頭部は丸味を帯び，比較的小さい。39の頭部はやや肥大する。すべてI-3F土坑出土の一括資料である。

軒平瓦（40～42・46・47・50）

文様は，唐草文を配している。40は，I-3F土坑から出土している。

桟瓦（43・44・48）

桟の部分は，Ⅱ期では丸形，Ⅲ期では山形に仕上げられている。

丸瓦（45・49・51～60）このうち56～60は，瓦を利用した水路の転用瓦である。

49は凹面に棒状工具によって縦に撫でた痕が明瞭に残る。53～60は凹面に布目が残されている。いずれも凸面は丁寧な「篤撫で」が施されている。

遺構外出土の遺物（Fig. 67～75・Pl. 36～48）

ここに掲げた遺物は，主に整地層から出土した遺物である。整地層から出土したといっても，本遺跡の場合，４期にわたって生活面が形成されている事情から，出土遺物の時期にも各々に大きな差が生じているのである。

これらの遺物の中には一ケ所にある程度の量が集中している場合もあるが，多くの場合散在するといった状況で出土している。

土師皿（1～25・27）

1・9は底部が内側に突きでる「ヘソ皿」の形態を示している。類例はⅠ期の淺出土遺物にあり，この土師皿も同一時期の所産と考えられる。25は轆轤成形で，深味のある器形は他に例が無い。口縁部に煤の付着は認められない。27も同様に轆轤によって成形されている。胎土は緻密で，仕上がりも極めて良好。底部は静止糸切りの後に，周囲のみ回転篦削りを行ない整形している。煤の付着は認められない。この他の土師皿は手捏ねによって作られ，多くのものは口縁部に一ケ所以上煤が付着する部分があり，多い場合は4・5箇所にも及ぶ。一概には判断できないが，土師皿の大半は灯明皿とすることができる。

灯明具（26・29～31）

前出の土師皿の大半が灯明皿として使用されたとすると，分類上，土師皿も灯明具に属することになるが，中には煤が無いものや破片実測のため煤の付着があったかどうかの判断ができないものもある。そのためここでは器形の上から明らかに灯明具とすることのできる遺物をあげて説明する。

29～31は瓦燈と呼ばれる灯明具の一種である。東京都内で発掘された江戸期の遺跡に類例がある。それによると，お盆状の器の中央に高杯形の油入れがあり，それに鐘状の蓋が付き，鐘状(註3)の蓋の側面にはスカシがいくつもあって，そこからあかりがもれるのである。本遺跡出土の瓦燈は，完形でないため復元をすると，お盆状の部分は無く，その中央の高杯形の油入れ（29・30）のみ出土している。31はその上にのせる鐘状の蓋である。この蓋の側面には楕円形と方形のスカシがあけられているので使用時にはここからあかりが放出されていたのであろう。また都内出土の瓦燈には蓋の上にも油皿が付くのが通例で，31の頂部にある欠損部には油皿が取りつけられていたと考えられる。29・30は同一場所で出土している。

26は摺鉢型の灯明皿。内面には摺鉢の卸目まで描いてある。透明の釉が内面のみに施されている。煤は片口を横にした部分に明瞭に残る。轆轤成形。

壺（32）

土師質の壺である。口縁部が短かく直立する形態からみて，蓋の付く形態あったと考えられる。器形は肩部に最大径があり，胴部に丸味無く直線的に底部に到る。器面は丁寧に「篦撫で」が施されている。

焙烙（33・34）

33・34は焙烙である。33は底部が扁平で口縁部は直立する。口縁端部は丸く仕上げられている。底部外面は「篦撫で」の痕が明瞭に残る。口径が36cmあり，34に比べかなり大きい。34は底部がやはり扁平であるが，口縁部はやや内彎する。

土鍾（35）

内外面共に，丁寧に「篦撫で」されている。

陶器（36～56）

36は京焼風の碗。径の小さい削り出し高台と，内彎しながら立ちあがる口縁部が特徴。器面には笹文が描かれているが，風化して消えかかっている。高台は露胎。その他の部分は透明の釉がかけられる。37は唐津焼碗。高台は削りだされ，釉は内面と外面腰部までかけられている。38は瀬戸・美濃焼の天目茶碗。高台は欠損しているが長く延びる口縁部にあまり反らない端部をみると，江戸時代初期

頃の製品と考えられる。39・42・44・47は唐津焼である。共に刷毛目文様が施されている。39は碗。44は大皿。47は鉢である。42は小坏。外面には轆轤目が粗く残る。高台は露胎。41は小坏。型作りの体部に高台を貼りつけている。釉は内面は全面に及び外面は釉がたれている状態である。43は香炉。直立する体部と内側に張りだす口縁端部が特徴。高台は露胎。45は急須蓋。46は丹波焼の水差し。胴部には一定の間隔で丸く，くぼませた部分があり，数ヶ所に緑色の釉を斑文にかけている。47は唐津焼の刷毛目鉢。48～54は，唐津焼砂目積皿と胎土目積皿である。48は外反する口縁端部に一条の溝をもつ。所謂「溝縁皿」で，見込みに3箇所砂目積痕が残る。胎土は灰白色を呈す。49・53は口縁部を残さないが同類である。50は同じ砂目積ながら，胎土は褐色を呈し，器厚もかなり厚い。内外面口縁部には長石釉が施されている。52は胎土目積痕が見込みに3箇所残る。高台脇は露胎。内面には緑色の釉が厚く施されている。高台はゴケ底風に削りこまれている。55は丹波焼の摺鉢。卸目は1本引きで深く明瞭に彫られている。外面には指頭圧痕の凹凸が残るが上半部はその上を軽く撫でて整形している。胎土は灰色を呈し，硬く焼きしまっている。56は8本を単位とする工具で，すき間なく卸目が引かれている。見込みには僅かに卸目が引かれているが，中心部にあるだけで周囲には無い。胎土はにぶい赤褐色を呈する。

磁器（57～88）

出土した磁器の産地は肥前と考えられる。

57は草花文，高台内側には圏線の中に銘がある。58は草花文と菊丸文が描かれ，高台内側には渦福が書かれている。59・61・63・65は器面に草花文が描かれるが，一筆，二筆程度で装飾性の少ない碗で器厚が厚く粗製の碗である。60はコンニャク印判によって団鶴文が描かれている。66は器高がやや低く，緩やかに内彎する体部と短かい高台が特徴。器厚も薄く仕上げられている。67は口縁部があまり開かず上方に直線的に延びる。器面に松の木が力強く描かれている。焼成悪く，乳白色を呈する。70・74は口縁部に扇文，その下方に草花文が描かれる。71・72は共に二重絡網目文碗であるが，72が内面無文であるのに対し，71は内面にも見込みに二重圏線の内側に菊花様の花文とその周囲に一重の網文を配している。また形態の上でも71が薄く仕上げられているのに対し，72は器厚が厚く重い。73はコンニャク印判による文様が描かれるが，にじんでいて文様不明。77は筒形の湯のみ。器面には松文。76は高台が高く直線的に開く口縁部をもつ「広東碗」とよばれる碗である。78は大ぶりの碗。外面には連子格子に蝶が描かれ，内面は口縁部と見込みに2重の圏線と五弁花文が描かれる。五弁花文は印判手法による。

79～84は皿である。75は口縁部が直線的に開く。内外面には僅かに草文が配される。高台は無釉。81・82は内面に二重縁による交叉線文が描かれている。口径は81がやや大きい。83・84は平坦な底部から強く上方に延びる口縁部を有する。皿というより浅い鉢とよぶ方が適当かもしれない。84は蛇ノ目凹型高台である。

土製品（89～100）

土製品は伊丹郷町の発掘調査において，これまでも数多くの出土が認められる。その種類も多く，人物像・動物像を型どったものから，建物や鍋・皿・甕など日常生活用品を模したものもある。ただこれらの土製品は他の遺物同様，ゴミ穴等に廃棄されているので，用途やそのもののもつ本来の意味については不明な点が多い。

89～94は人物像である。89は人物の頭部と足を欠損する。この像は袈裟を着た僧侶が右手に何かをさげ，左手はひじを曲げて手を肩のところまであげている。その左手には一孔が穿たれているので，

別の物が差しこまれていたのかもしれない。型おこしによって作られている。90・93は袈裟を着た，虚無僧が尺八を奏している。両方共に型おこし。91は人物の頭部。頭巾を被っている。型おこし。92は袴をはいて左手に扇を持つ。右手・頭部欠損。型おこし。94は裸の男子像。頭部と両方の腕を欠損。手捏ね。95・96は信仰に関する資料と考えられる。95は台座の上に足を揃えた動物が座している。狐のように見受けられるが，狗犬の可能性もある。型おこし。96も二段になった台座の向かって左側には狐か狗犬がいる。中央の高くなっているところは祠であろう。これが狐であれば稲荷信仰に関する資料であろう(註4)。型おこし。97は鳥を型作っている。やはり型を合わせた痕が胸の部分に残る。98・99は食器を模している。98は摺鉢，99は碗か鉢のようである。94は淡い黄色の釉がかけられている。100は宝珠状の土製品。下につながる部分は欠損。手捏ね。

軒丸瓦（101～103）

101と103は同一場所から出土した三ツ巴文軒丸瓦である。巴の頭部は丸く，尾は細長く延び，三ツ巴文周囲に回る圏線に接する。周囲には珠文が14個配されている。102は同じ三ツ巴文ながら巴文の周囲に一圏を設けず巴の尾部も他の尾部と接しない。107は瓦当の半分を欠損する。

軒平瓦（104～106）

いずれも唐草文である。

丸瓦（108～111）

108・109，110・111は各々，同一場所より出土した。前者（108・109）には凹面に棒状工具による「撫で」が行なわれていて，その痕がよく残されている。後者（110・111）は凹面には「篦撫で」が施され，布目を丁寧に消している。

金属製品（112～120）

112は端部を直角に折りまげて頭部とする平折釘。断面は方形である。113は鋲（かすがい）。いずれも鉄製品。115は煙管の雁首。銅製。116は鉋（はばき）。銅製の刀装具の一種である。117～120は寛永通寶である。

石製品（121～124）

121は石碑。下半分を欠損する。風化が著しいため顔など詳細は不明であるが，合わせた手の左右に絡子が垂れている。Ⅱ期の遺物に類品（Fig. 57・58）がある。花崗岩製。123・124は一石五輪塔。123は火輪と水輪のみが遺存している。火輪は，四隅が強く上方に立ちあがっている。水輪は，丸味が無く，方形に近い。124は地輪と水輪の一部のみ遺存する。花崗岩製。122は石臼の下臼の一部である。刻目は8区画と考えられ，1区画の中に6条の刻目が彫られている。花崗岩製。

註1　瀧から数10片の瓦が出土したが，軒瓦は出土していない。丸瓦・平瓦には須恵質の瓦と灰黒色から黒色の瓦がある。須恵質の瓦は厚さが2.5～2.7cmあり，丸瓦の内面には布目が明瞭に残る。これに対し，黒色の瓦の厚さは1.7cm程度で，須恵質の瓦に比べかなり軽い。有岡城37次の調査では井戸の中から，須恵質の瓦が大量に出土し，第34次調査では黒色の瓦が出土した。

註2　桟瓦については，駒井鋼之助著『かわら日本史』の中で，「明暦の大火災十七年目の延宝二年（1674年）に近江大津の瓦工西村半兵衛によって発明された」と書かれている。

註3　瓦煙は，都内の都立一橋高校地点の発掘調査や郵政省飯倉分館構内遺跡の調査で出土している。

註4　この遺物は欠損が多いため，狐か狗犬かは判断が難しいが，同様の形態のもので中央の祠の中に天神様がまつられた例が，大手前女子学園有岡城跡調査委員会が調査した有岡城第17次調査において出土している。これが狗犬だとすれば天神様の信仰に関する資料である可能性もある。

(単位：cm)

番　号	器　種	法　量	成形・整形の特徴	色調・胎土	出土地点	備　考
Fig. 53-1 Pl. 27-1	土 師 皿	口径 7.4 現高 1.4	扁平な底部より，体部は内彎しながら緩やかに開く。「手捏ね」成形後，外面に「撫で」を施す。	5Y 8/2 灰白色	J-4 区濠	
Fig. 53-2 Pl. 27-2	土 師 皿	口径 8.8 現高 2.0	丸底ぎみの底部より，直線的に立ちあがる。内面は右回りの「撫で」，外面も「撫で」を施す。	10YR 8/4 浅黄橙色	K-4 区濠	口縁部の一部に煤付着
Fig. 53-3 Pl. 27-3	土 師 皿	口径 7.9 現高 1.6	底部は扁平で上げ底状。体部は直線的に外傾する。「手捏ね」成形後，内外面共に「撫で」を施す。	10YR 8/2 灰白色	K-4 区濠	
Fig. 53-4 Pl. 27-4	土 師 皿	口径 8.9 現高 2.0	丸底ぎみの底部より，直線的に立ちあがる。「手捏ね」成形後，内面は右回りの「撫で」外面も「撫で」を施す。	10YR 8/6 黄橙色	K-4 区濠	口縁部の一部に煤付着
Fig. 53-5 Pl. 27-5	土 師 皿	口径 10.0 現高 (1.2)	扁平な底部より，直線的に緩やかに外傾する。「手捏ね」成形後，外面に「撫で」を施す。	2.5Y 8/2 灰白色	K-4 区濠	
Fig. 53-6 Pl. 27-8	土 師 皿	口径 (9.4) 現高 2.1	扁平な底部より，直線的に緩やかに外傾する。「手捏ね」成形後，内外面に「撫で」を施す。	5.7YR 8/3 浅黄橙色	K-4 区濠	口縁部の一部に煤付着
Fig. 53-7 Pl. 27-7	甕	口径 (13.8) 現高 12.5	体部は丸味をおび，口縁部は外側に強く屈曲する。内面に轆轤調整痕あり。	(内)10YR 4/2 灰黄褐色 (外)7.5YR 3/4 暗褐色	J-4 区濠 (下層)	陶器
Fig. 53-8 Pl. 27-9 Pl. 4a-1	灰 釉 皿	口径 (10.8) 現高 2.3	付高台より，やや丸味を帯び開きながら立ちあがる。見込みに菊花印花文がある。全面施釉。内外面に貫入あり。底裏に輪トチ痕あり。	10Y 6/2 オリーブ灰色	J-4 区濠	陶器
Fig. 53-9	鉄 釉 皿	口径 (10.6) 現高 2.5	削り出し高台。高台より直線的に開き口縁部でやや外反する。轆轤回転成形あり。腰部以下無釉。	5YR 4/6 赤褐色	K-4区濠 (下層)	陶器
Fig. 53-10 Pl. 4a-2	灰 釉 皿	口径 (10.1) 現高 2.6	低い削り出し高台より，腰部は張り，直線的に開いて立ちあがる。内外面に貫入がみられる。	(内)7.5Y 6/3 オリーブ黄色 (外)5Y 7/4 浅黄色	I-3 区濠 (上層)	陶器

番　号	器　種	法　量	成形・整形の特徴	色調・胎土	出土地点	備　考
Fig. 53-11 Pl. 27-10	皿	口径 (29.2) 現高 3.6	平底より直線的に開いて立ちあがる。口縁部は直立ぎみ。非常に浅い。	(内)2.5YR 3/6 暗赤褐色 (外)2.5YR 4/6 赤褐色	L-4 区溝 (上層)	陶器 底部中央に「吉」の篤書きあり
Fig. 53-12 Pl. 4b	漆　椀	口径 (16.0) 現高 9.0	高い高台より，丸味をもって口縁部へ開きぎみに立ちあがる。	(内)2.5YR 4/8 赤褐色 (外) 2.5YR 5/8 明赤褐色	J-4 区溝	
Fig. 53-13	漆　椀	口径 (11.5) 現高 5.5	高台は短く開き，体部は丸味がある。	(内)2.5YR 4/8 赤褐色 (外)2.5YR 1.7/1 赤黒色	I-4 区溝	
Fig. 53-14 Pl. 27-13	木 製 品	残存長 21.0 幅 3.1	端部に柄状の造出しがある。		J-4 区溝	
Fig. 53-15 Pl. 27-12	木 製 品	残存長 11.4 幅 2.6 厚 0.8			J-4 区溝	
Fig. 53-16 Pl. 27-14	鉄鉤の玉	直径 (1.2)			G-1 区溝 (下層)	半分欠損
Fig. 54-17 Pl. 27-15	平　瓦	残存長 29.1 残存幅 14.3 器厚 2.0	器面に粗い「掻撫で」が施される。		K-4 区溝	
Fig. 55-1 Pl. 29-4	土 師 皿	口径 7.2 現高 1.9	扁平な底部より，体部は内彎しながら緩やかに立ちあがり口唇部に至る。「手捏ね」成形後，内外面に「撫で」を施す。	10YR 8/3 浅黄橙色	I-3 C 土坑	
Fig. 55-2 Pl. 29-5	土 師 皿	口径 (9.4) 現高 2.2	扁平な底部より，体部は内彎ぎみに緩やかに立ちあがり，口唇部に至る。「手捏ね」成形後，内外面に「撫で」を施す。	7.5YR 8/4 浅黄橙色	I-3 C 土坑	
Fig. 55-3 Pl. 29-6	土 師 皿	口径 (10.2) 現高 2.1	丸味のある底部より，体部は直線的に緩やかに外反し口唇部に至る。「手捏ね」成形後，内外面に「撫で」を施す。	7.5YR 7/6 橙色	I-3 C 土坑	口唇部に煤付着
Fig. 55-4	土 師 皿	口径 6.5 現高 1.75	底部は，ほぼ平らで，体部は直立ぎみに立ちあがる。「手捏ね」成形後，内外面に「撫で」を施す。内面底は右回りの「撫で」を施す。	(内)5YR 7/6 橙色 10R 6/6 赤橙色 (外)5YR 7/6 橙色	K-3 溝	2mm 大の礫を僅かに含む

番　号	器　種	法　量	成形・整形の特徴	色調・胎土	出土地点	備　考
Fig. 55-5 Pl. 29-3	土 師 皿	口径 (10.5) 現高 2.5	扁平な底部より体部は内彎しながら緩やかに立ちあがり口唇部に至る。「手捏ね」成形後，内外面に「撫で」を施す。全体的に成形による凸凹がみられる。体部に稜をもつ。	10YR 8/1 灰白色	K-3 溝	内外面に煤付着
Fig. 55-6	土 師 皿	口径 10.7 現高 2.5	丸底ぎみの底部より，体部は内彎ぎみに緩やかに開く。「手捏ね」成形後，「撫で」を施す。底部から体部にかけて外面に剥離が多くみられる。	2.5Y 8/3 淡黄色	K-3 溝	口唇部全体に煤付着
Fig. 55-7 Pl. 29-7	土 師 皿	口径 (10.6) 現高 (2.0)	底部，体部共に扁平である。「手捏ね」成形後，外面は「撫で」，内面は右回りの「撫で」を施す。	7.5YR 8/3 浅黄橙色	J-3 石組	
Fig. 55-8 Pl. 30-1	灰 釉 皿	口径 (10.8) 現高 2.6	低い高台から，内彎ぎみに開いて立ちあがる。外面は轆轤痕が顕著。高台部無釉。	5Y 7/4 浅黄色	J-3 石組	陶器
Fig. 55-9 Pl. 7-3	緑 釉 皿	口径 (12.8) 現高 2.7	低い高台から開きながらほぼ直線的に立ちあがる。口縁部は折縁で口唇部内面に1条の沈線が回る。轆轤回転成形。底裏・畳付部無釉。	2.5GY 7/1 明オリーブ灰色	I-3 C 土坑	陶器 見込みに3箇所砂目痕あり
Fig. 55-10 Pl. 7-2	灰 緑 皿	口径 14.9 現高 3.9	付高台。腰部と胴部に段状を呈し，直線的に立ちあがる。口縁部は外反し折縁となる。縁帯内面は浅い沈線状を呈する。文様は見込みに型紙ずりによる菊花文。	(内)7.5R 4/2 灰赤色 (外)7.5Y 8/2 灰白色	K-3 溝	陶器 砂目痕，4個 型紙摺で菊模様
Fig. 55-11 Pl. 31-7	皿	底径 (5.0) 現高 2.4	高台は低く，轆轤成形。文様は見込みに刷毛目文あり。畳付部無釉。	(内)2.5YR 3/2 暗赤褐色 10YR 7/3 にぶい黄橙色 (外)7.5YR 5/2 極暗赤褐色 2.5YR 5/2 灰赤色	K-3 溝	陶器 見込みに，砂目痕あり
Fig. 55-12 Pl. 31-11	皿	口径 (10.0) 現高 3.0	削り出し高台。轆轤右回転成形。残存部外面無釉。見込み施釉。	(内)5YR 6/3 にぶい橙色 (外)5YR 8/2 灰白色	G-3 A 土坑	陶器 胎土日
Fig. 55-13	緑 釉 碗	口径 (9.5) 現高 4.0	削り出し高台，高台より直立ぎみに丸味をもって立ちあがる。畳付部・底裏無釉。外面無釉。	(内)7.5Y 8/2 灰白色 10Y 4/2 オリーブ灰色 (外)2.5Y 8/3 淡黄色	J-3 F 土坑	陶器
Fig. 55-14 Pl. 6-6	天 目 茶 碗	口径 (11.6) 現高 8.4	削り出し高台。体部はほぼ直線的に開き，口縁部は内彎ぎみで，口唇部はやや外反する。高台内の削り込みは深い輪高台。	7.5YR 2/2 黒褐色	K-3 溝	陶器 下部以下は露胎 高台周辺無釉

番　号	器　種	法　量	成形・整形の特徴	色調・胎土	出土地点	備　考
Fig. 55-15 Pl. 29-8	碗	口径　(11.0) 現高　6.8	腰部は丸味をおび，体部は直立ぎみに立ちあがる。外面は「笹削り」が顕著である。畳付部・底裏無釉。	5Y 7/2 灰白色	K-2 溝	陶器
Fig. 55-16 Pl. 7-1	二彩大皿	口径　(28.4) 現高　6.3	高台より直線ぎみに緩やかに開き，口縁部で屈曲し折縁となる。口唇部は直立ぎみである。轆轤右回転成形。見込みの文様は草文。腰部以下無釉。	(内)7.5R 7/2 明褐灰色 (外)5YR 7/2 明褐灰色 5YR 6/6 橙色	H-2 井戸	陶器 砂目痕6個
Fig. 55-17 Pl. 7-5	皿	口径　(13.2) 現高　3.3	高台より腰部は丸味をおび，体部は直線的に開く。口縁部はやや外反ぎみである。文様は見込みに草花文である。全面施釉。	10GY 8/1 明緑灰色	I-3 C 土坑	磁器 畳付部に砂付着
Fig. 56-18 Pl. 31-5	皿	底径　(8.6) 現高　1.3	高台は低く付高台。畳付部無釉。見込みに文様あり。	5G 7/1 明緑灰色	K-3 溝	磁器 畳付部付近に床砂熔着
Fig. 56-19 Pl. 31-4	碗	口径　(9.6) 現高　5.8	高台から腰部は丸味をおび，内湾ぎみにやや開きながら立ちあがる。高台1条・高台脇2条の線を回す。全面施釉。	N8/1 灰白色	I-3 G 土坑	磁器
Fig. 56-20	焼塩壺	口径　(4.8) 胴径　(7.0) 現高　8.8	底部よりほぼ垂直に立ちあがる。口縁部に低い蓋受けを呈する。成形は粘土板巻きである。体部内面に布目痕あり。	5YR 6/6 橙色	L-3 瓦溜	
Fig. 56-21 Pl. 30-3	摺　鉢	口径　(35.0) 現高　13.8	体部はほぼ直線的に開き，端部は縁帯を形成することなく断面三角形を呈する。櫛目は1単位8本で，体部内面に密に施す。	(内)10R 4/3 赤褐色 (外)10R 4/3 赤褐色 5Y 7/3 浅黄色	I-3 G 土坑	
Fig. 56-22 Pl. 30-2	摺　鉢	口径　(29.8) 現高　13.8	体部はほぼ直線的に開き，端部は縁帯を形成し，口縁部はやや開きぎみである。櫛目は1単位7本で，体部内面に密に施す。	(内)10YR 8/3 浅黄橙色 2.5YR 6/6 橙色 (外)2.5YR 4/4 にぶい赤褐色 2.5YR 5/6 明赤褐色	I-3 G 土坑	
Fig. 56-23 Pl. 33-8	杓　子	残存長　13.0 残存幅　1.0～3.1 器厚　0.1	皿部欠損。端部に吊孔あり。		H-2 井戸	銅製品

番　号	器　種	法　量	成形・整形の特徴	色調・胎土	出土地点	備　考
Fig. 57-24 Pl. 32-5	石　碑	残存高 43.6 最大幅 23.2 最大厚 12.0			J-2 石列	花崗岩 上部欠損
Fig. 57-25 Pl. 32-7	石　碑	現　高 41.0 最大幅 23.6 最大厚 14.8			J-3 石組	花崗岩
Fig. 57-26 Pl. 32-6	石　碑	現　高 41.1 最大幅 20.8 最大厚 10.3			K-3 石列	花崗岩
Fig. 57-27 Pl. 32-4	一石五輪塔	残存高 37.0 最大幅 18.0			J-3 石組	花崗岩 空・風輪欠損
Fig. 57-28 Pl. 32-1	一石五輪塔	残存高 24.0 最大幅 15.4			J-3 石組	花崗岩 地輪欠損
Fig. 57-29 Pl. 32-3	一石五輪塔	残存高 14.4 最大幅 16.6			J-3 石組	花崗岩 火・水輪のみ残存
Fig. 57-30 Pl. 32-2	一石五輪塔	残存高 15.4 最大幅 18.8			J-2 石列	花崗岩 水輪のみ残存
Fig. 57-31 Pl. 31-12	一石五輪塔	残存高 9.6 最大幅 9.0			K-2 石列	花崗岩 地輪のみ残存
Fig. 57-32	一石五輪塔	残存高 18.4 最大幅 18.3			L-2 溝	花崗岩 地輪のみ残存
Fig. 57-33	一石五輪塔	残存高 8.4 最大幅 9.5				花崗岩 火輪のみ残存
Fig. 58-34	石　臼	直径 (15.0)			J-3 石組	
Fig. 58-35 Pl. 33-1	軒 丸 瓦	直　径 14.0 器　厚 1.8 残存長 11.6			J-3 F 土坑	
Fig. 58-36	軒 丸 瓦	直　径 17.0 器　厚 1.4 残存長 4.2			J-3 F 土坑	
Fig. 58-37 Pl. 33-2	軒 丸 瓦	直　径 17.0 器　厚 1.4 残存長 14.6			J-3 F 土坑	
Fig. 58-38 Pl. 33-3	軒 平 瓦	残存長 14.0 横　幅 5.2 器　厚 1.7			J-3 F 土坑	

番　号	器　種	法　量	成形・整形の特徴	色調・胎土	出土地点	備　考
Fig. 58-39 Pl. 33-4	軒平瓦	残存長 15.8 横　幅 15.8 器　厚 1.7			J-3 F 土坑	
Fig. 58-40 Pl. 33-5	軒平瓦	残存長 8.0 横　幅 12.6 器　厚 1.5			J-3 F 土坑	
Fig. 58-41 Pl. 33-6	軒平瓦	残存長 9.6 横　幅 11.0 器　厚 1.7			L-4 瓦溜	
Fig. 58-42 Pl. 33-7	丸　瓦	残存長 12.8 最大幅(14.0) 器　厚 1.5			I-3 G 土坑	「金岡瓦宗」の銘あり
Fig. 59-43	丸　瓦	残存長 16.6 最大幅 15.3 器　厚 1.9			L-4 瓦溜	
Fig. 59-44	平　瓦	残存長 21.8 残存幅 22.0 器　厚 1.8			J-3 F 土坑	桟瓦
Fig. 59-45	平　瓦	残存長 15.4 残存幅 25.0 器　厚 1.5			K-3 瓦列	
Fig. 59-46	平　瓦	残存長 17.7 残存幅 15.4 器　厚 1.7			J-3 F 土坑	桟瓦
Fig. 59-47	平　瓦	残存長 14.2 残存幅 24.1 器　厚 1.8			K-3 瓦列	
Fig. 59-48	平　瓦	残存長 20.4 残存幅 14.8 器　厚 1.8			I-3 G 土坑	
Fig. 60-1	土師皿	口径 (6.2) 現高 1.3	平底より直線的に緩やかに外傾しながら立ちあがる。轆轤成形後，内外面に轆轤調整を施す。轆轤右回転糸切痕あり。	10 YR 8/3 浅黄橙色	L-4 A 土坑	
Fig. 60-2	土師皿	口径 10.0 現高 2.0	平底より直線的に緩やかに外傾しながら立ちあがる。轆轤成形後，内外面に轆轤調整痕を残す。轆轤右回転糸切痕あり。	5 YR 8/4 淡橙色	L-4 A 土坑	口唇部の一部に煤付着
Fig. 60-3	土師皿	口径 9.8 現高 1.8	平底より直線的に緩やかに外傾しながら立ちあがる。轆轤成形後，轆轤調整。轆轤右回転糸切痕あり。	5 YR 8/4 淡橙色	L-4 A 土坑	口唇部の一部に煤付着

番　号	器　種	法　量	成形・整形の特徴	色調・胎土	出土地点	備　考
Fig. 60-4 Pl. 34-1	土 師 皿	口径 11.6 現高 2.4	扁平な底部より，丸味をおび緩やかに外傾しながら立ちあがり口唇部に至る。「手捏ね」成形後，内外面に「撫で」を施す。外面に指頭圧痕あり。	5YR 8/3 淡橙色	L-4 A 土坑	口唇部の一部に煤付着
Fig. 60-5 Pl 34-2	土 師 皿	口径 11.4 現高 2.7	扁平な底部より，丸味をおび緩やかに外傾しながら立ちあがり口唇部に至る。「手捏ね」成形後，内外面に「撫で」を施す。外面に指頭圧痕あり。	5YR 8/3 淡橙色	L-4 A 土坑	
Fig. 60-6 Pl. 34-3	土 師 皿	口径 11.7 現高 2.6	扁平な底部より，丸味をおび緩やかに外傾しながら立ちあがり口唇部に至る。「手捏ね」成形後，内外面に「撫で」を施す。外面に指頭圧痕あり。	7.5YR 8/3 浅黄橙色	L-4 A 土坑	口唇部の一部に煤付着
Fig. 60-7 Pl. 34-5	土 師 皿	口径 (12.2) 現高 2.5	体部はやや直線的に外傾しながら立ちあがる。「手捏ね」成形後，内外面に「撫で」を施す。	5YR 8/3 淡橙色	L-4 A 土坑	
Fig. 60-8 Pl. 34-6	土 師 皿	口径 12.8 現高 2.7	扁平な底部より，直線的に緩やかに外傾しながら立ちあがる。「手捏ね」成形後，内外面に「撫で」を施す。外面に指頭圧痕あり。	5YR 8/3 淡橙色	L-4 A 土坑	
Fig. 60-9 Pl. 34-4	土 師 皿	口径 13.0 現高 3.2	扁平な底部より内彎ぎみに立ちあがり口唇部に至る。「手捏ね」成形後，内外面に「撫で」を施す。	7.5YR 7/4 にぶい橙色	I-2 I 土坑	口縁部に煤付着
Fig. 60-10 Pl. 34-7	土 師 皿	口径 12.6 現高 3.0	底部よりも丸味をもって立ちあがる。「手捏ね」成形後，内外面に横方向の「撫で」を施す。	5YR 8/4 淡橙色	I-3 F 土坑	口縁部に煤付着
Fig. 60-11 Pl. 34-8	土 師 皿	口径 12.6 現高 2.1	底部より，体部は外傾して立ちあがる。非常に浅い。「手捏ね」成形。外面に剥離がみられる。	5YR 8/3 淡橙色	I-3 F 土坑	口唇部に煤付着
Fig. 60-12 Pl. 34-9	土 師 皿	口径 (12.6) 現高 3.8	丸味をおび，外傾しながら立ちあがり口唇部に至る。「手捏ね」成形後，内外面に横方向の「撫で」を施す。	10YR 8/3 浅黄橙色	I-3 F 土坑	口唇部に煤付着
Fig. 60-13 Pl. 7-4	小　皿	口径 (12.6) 現高 3.45	器高は低く，付高台より口縁部へ内彎ぎみに立ちあがる。口縁部はやや開く。内外面に刷毛目文様を施す。糸付部無釉。	2.5YR 5/3 にぶい赤褐色 7.5Y 8/3 淡黄色	L-4 A 土坑	陶器 唐津焼

番　号	器　種	法　量	成形・整形の特徴	色調・胎土	出土地点	備　考
Fig. 60-14 Pl. 5-10	碗	口径　9.9 現高　5.2	体部がやや低めである。高台より腰部に丸味をもち，やや内彎ぎみに開いて立ちあがる。文様は体部に3つの井桁射文と腰部以下に3条の線を回す。畳付部無釉。	7.5GY 8/1 明緑灰色	L-4 A 土坑	磁器
Fig. 60-15 Pl. 6-3	碗	口径　(9.3) 現高　5.2	削り出し高台は小さく低い。高台より丸味をもって立ちあがり口縁部で外反する。全面に貫入が入るが，腰部以下無釉。	10Y 7/2 灰白色	I-2 I 土坑	陶器
Fig. 60-16 Pl. 34-10	碗	底径　3.4 現高　3.5	高台は小さめである。内外面に刷毛目文様を施す。畳付部無釉。	2.5Y 5/4 黄褐色 5GY 8/1 灰白色	I-3 F 土坑	陶器
Fig. 60-17 Pl. 6-5	碗	口径　9.8 現高　5.4	底部は厚く，高台より内彎ぎみにやや開きながら立ちあがる。体部に二重絡綱手文様と高台外側脇以下に3条の線を回す。	5BG 7/1 明青灰色	I-2 I 土坑	磁器 外面二重網目文 畳付部に床砂溜着
Fig. 60-18 Pl. 6-2	碗	口径　11.7 現高　4.9	底部は厚く，高台より口縁部へ内彎しながら立ちあがる。口縁部はやや開く。文様は体部に草花文と高台外側脇以下に3条の線を回す。	7.5GY 8/1 明緑灰色	I-3 I 土坑	磁器 見込み蛇ノ目釉ハギ 釉ハギ部分に円形の高台痕あり
Fig. 60-19	碗	口径　(11.4) 現高　4.5	体部は内彎しながら立ちあがり，口縁部はやや開く。文様は体部に草花文。	10GY 8/1 明緑灰色	I-3 F 土坑	磁器
Fig. 60-20 Pl. 6-1	碗	口径　(11.3) 現高　5.5	高台より腰部は丸味をおびて膨らみ，体部はやや直立ぎみに立ちあがる。文様は区画割草花文と口縁部内面に3条・外面に1条・高台脇以下に3条の線を回す。見込みに花文あり。畳付部無釉。	7.5GY 8/1 明緑灰色	I-2 I 土坑	磁器
Fig. 60-21 Pl. 34-13	碗	口径　(11.2) 現高　6.3	高台より内彎ぎみに立ちあがる。口縁部は垂直ぎみに立ちあがる。文様は胴部に丸文・口縁部内面に斜格子文様があり，見込みに2条・腰部以下3条・口縁部・底裏に各1条の線を回し，五弁花文あり。	7.5GY 8/1 明緑灰色	I-3 F 土坑	磁器 五弁花文 底裏に銘あり
Fig. 60-22 Pl. 34-11	碗	口径　(12.6) 現高　5.79	高台より内彎ぎみに口縁部へ立ちあがり，体部はやや浅い。文様は胴部に丸文・見込みに五弁花文・口縁部内面2条・外面1条・腰部以下3条の線を回す。	7.5GY 8/1 明緑灰色	I-3 F 土坑	磁器 五弁花文 見込み蛇ノ釉ハギ 重ね痕あり
Fig. 61-23	碗	口径　(12.2) 現高　6.1	厚い底部から内彎ぎみに開きながら立ちあがる。文様は外面に連子格子帯文，見込みに五弁花文，腰部以下3条・口縁部内面・見込みに各2条の線を回す。畳付部無釉。	10GY 8/1 明緑灰色	I-3 F 土坑	磁器 五弁花文

番　号	器　種	法　量	成形・整形の特徴	色調・胎土	出土地点	備　考
Fig. 61-24 Pl. 8-2	皿	口径 (14) 現高 3.6	蛇ノ目凹型高台。底部から緩やかに内彎しながら立ちあがる。胴部と見込みに文様あり。高台から腰部に3条の線を回す。高台蛇ノ目部の釉をぬぐう。	7.5GY 8/1 明緑灰色	I-2 I 土坑	磁器
Fig. 61-25 Pl. 8-1	皿	口径 13 現高 5.6 底径 4.6	高台より丸味をもって立ちあがり口縁部は外反する。文様は見込みに五弁花（コンニャノ判）・胴部に折松葉文と腰部以下3条・見込2条の線を回す。口縁部内面に幾何学文を回す。畳付部無釉。	7.5GY 8/1 明緑灰色	I-2 I 土坑	磁器 見込み蛇ノ目釉ハギ
Fig. 61-26	碗	現高 4.8 底径 4.1	削り出し高台。腰部は内彎しながら立ちあがる。轆轤左回転成形。腰部以下無釉。	10Y 7/2 灰白色	I-3 F 土坑	磁器
Fig. 61-27 Pl. 8-4	鉢	口径 (17.8) 現高 6.4	蛇ノ目凹型高台。高台より丸味をもって立ちあがり，口縁部で外反する。文様は口縁部波頭文・見込みは松竹梅文・外面唐草文と腰部以下に3条の線を回す。	10GY 8/1 明緑灰色	I-2 I 土坑	磁器
Fig. 61-28 Pl. 8-3	皿	口径 11.8 現高 3.8	削り出し高台より直線的に口縁部へ立ちあがる。文様は内面が格子文である。見込みは蛇ノ目釉ハギ。	7.5GY 8/1 明緑灰色	I-2 I 土坑	磁器 畳付部に床砂溜着
Fig. 62-29	鉢	口径 (10.6) 現高 7.7	蛇ノ目凹型高台。底部から緩やかに内彎し，体部は直立ぎみに立ちあがる。底部中央部は厚い。文様は見込みに風景文と花文と2条の線を回す。	(内)5GY 8/1 灰白色 (外)5G 7/1 明緑灰色	I-3 F 土坑	磁器
Fig. 62-30 Pl. 8-6	鉢	口径 17.8 現高 9.6	高台より丸味をもって立ちあがり口縁部は外反する。見込みと口縁部内面に文様が描かれている。外面には龍が描かれている。	10GY 8/1 明緑灰色	I-3 F 土坑	磁器 底裏は「〇〇年製」の銘あり
Fig. 62-31 Pl. 34-15	焼塩壺	口径 6.8 底径 4.9 現高 7.8	底部よりほぼ垂直に立ちあがる。口縁部の蓋受けはほとんどみられない。成形は粘土板巻きである。体部内面に布目痕と工具による「撫で」を施す。指頭圧痕あり。	5YR 6/6 橙色	I-2 I 土坑	
Fig. 62-32 Pl. 34-14	焼塩壺	口径 6.8 底径 4.8 現高 7.5	底部よりほぼ垂直に立ちあがる。蓋受け部はほとんどみられない。成形は粘土板巻きである。体部内面に布目痕あり。外面に指頭圧痕あり。	2.5Y 8/3 淡黄色 5YR 7/6 橙色	I-2 I 土坑	
Fig. 62-33 Pl. 6-4	徳　利	口径 1.8 現高 12.0	腰部に張りをもち，頸部は鉤首状に立ちあがる。文様は唐草文である。	10GY 8/1 明緑灰色	I-2 I 土坑	磁器

番　号	器　種	法　量	成形・整形の特徴	色調・胎土	出土地点	備　考
Fig. 63-34 Pl. 35-1	軒丸瓦	直　径　15.2 器　厚　1.7 残存長　14.0			I-3 F 土坑	
Fig. 63-35 Pl. 46-1	軒丸瓦	器　厚　1.0 残存長　6.6			I-3 F 土坑	
Fig. 63-36 Pl. 35-3	軒丸瓦	直　径　13.8 器　厚　1.3 残存長　4.0			I-3 F 土坑	
Fig. 63-37 Pl. 35-2	軒丸瓦	直　径　14.4 器　厚　1.2 残存長　5.0			I-3 F 土坑	
Fig. 63-38 Pl. 46-2	軒丸瓦	器　厚　1.2 残存長　11.4			I-3 F 土坑	
Fig. 63-39	軒丸瓦	直　径(14.0) 器　厚　1.5 残存長　4.6			I-3 F 土坑	
Fig. 63-40 Pl. 35-4	軒平瓦	残存長　11.8 横　幅　25.0 器　厚　1.5			I-3 F 土坑	
Fig. 63-41 Pl. 46-3	軒平瓦	残存長　10.0 横　幅　10.4 器　厚　1.3			I-3 F 土坑	
Fig. 63-42 Pl. 35-5	軒平瓦	残存長　10.8 横　幅　11.0 器　厚　2.0			I-3 F 土坑	
Fig. 63-43	平瓦	残存長　16.4 残存幅　10.4 器　厚　1.5			I-3 F 土坑	桃瓦
Fig. 63-44	平瓦	残存長　12.0 残存幅　11.2 器　厚　1.8			I-3 F 土坑	桃瓦
Fig. 63-45	丸瓦	残存長　12.0 最大幅　12.5 器　厚　2.1			I-3 F 土坑	
Fig. 64-46 Pl. 35-6	軒平瓦	残存長　15.0 横　幅　14.8 器　厚　2.0			I-3 H 土坑	
Fig. 64-47 Pl. 35-7	軒平瓦	残存長　15.4 横　幅　13.5 器　厚　2.3			I-3 H 土坑	
Fig. 64-48	平瓦	残存長　17.2 残存幅　11.4 器　厚　1.6			I-3 H 土坑	桃瓦

番　号	器　種	法　量	成形・整形の特徴	色調・胎土	出土地点	備　考
Fig. 64-49 Pl. 46-4	丸　瓦	残存長 22.7 最大幅 12.0 器　厚 1.7			I-3 H 土坑	
Fig. 64-50 Pl. 35-8	軒 平 瓦	残存長 6.2 横　幅 4.3 器　厚 1.5			J-3 C 土坑	
Fig. 64-51 Pl. 46-5	丸　瓦	残存長 24.5 最大幅 12.5 器　厚 1.6			I-3 H 土坑	
Fig. 64-52	丸　瓦	残存長 12.4 最大幅 11.0 器　厚 2.2			J-3 C 土坑	
Fig. 65-53	丸　瓦	残存長 26.0 最大幅 12.5 器　厚 1.0			K-2 瓦管	
Fig. 65-54	丸　瓦	残存長 28.0 最大幅 14.5 器　厚 1.5			K-2 瓦管	
Fig. 65-55 Pl. 35-9	丸　瓦	残存長 28.0 最大幅 14.5 器　厚 1.5			K-2 瓦管	
Fig. 65-56	丸　瓦	残存長 28.2 最大幅 14.7 器　厚 1.4			K-2 瓦管	
Fig. 66-57	丸　瓦	残存長 28.0 最大幅 13.5 器　厚 1.2			K-2 瓦管	
Fig. 66-58 Pl. 35-10	丸　瓦	残存長 27.4 最大幅 13.6 器　厚 1.5			K-2 瓦管	
Fig. 66-59	丸　瓦	残存長 27.6 最大幅 13.1 器　厚 1.2			K-2 瓦管	
Fig. 66-60	丸　瓦	残存長 26.7 最大幅 13.2 器　厚 1.4			K-2 瓦管	
Fig. 67-1 Pl. 36-1	土 師 皿	口径 6.9～7.4 現高 1.4	底部は上げ底ぎみで，体部は丸味をおび緩やかに立ちあがり，口唇部に至る。内外面共に，指頭による「撫で」を施す。	10 YR 8/3 浅黄橙色	K-4 南壁	
Fig. 67-2 Pl. 36-8	土 師 皿	口径 9.7 現高 2.3	丸みのある底部より，体部は丸味をおび緩やかに立ちあがり口唇部に至る。内外面共に不定方向の「撫で」を施す。	7.5 YR 8/4 浅黄橙色	K-4 区	

番　号	器　種	法　量	成形・整形の特徴	色調・胎土	出土地点	備　考
Fig. 67-3 Pl. 36-15	土　師　皿	口径　11.6 現高　2.8	丸味のある底部より，体部は緩やかに立ちあがる。底部内外面共に不定方向の「撫で」を施す。口縁部内外面共に左回りの指による「撫で」を施す。	7.5YR 8/3 浅黄橙色	L-4 区	
Fig. 67-4 Pl. 37-6	土　師　皿	口径　11.8 現高　2.7	底部には凸凹がみられ，体部は丸味をおびて緩やかに立ちあがる。底部の不定方向の「撫で」の後，口縁部に右回りの「横撫で」を施す。	7.5YR 8/4 浅黄橙色	L-4 区	口唇部の一部に煤付着
Fig. 67-5 Pl. 36-2	土　師　皿	口径　7.9 現高　1.7	底部より丸味をおびて立ちあがる。「手捏ね」成形後，内外面共に横方向の「撫で」を施す。	7.5YR 7/4 にぶい橙色	L-4 整地層	口唇部の一部に煤付着
Fig. 67-6 Pl. 36-9	土　師　皿	口径　(10.5) 現高　1.8	底部は扁平で浅く，体部は緩やかに外傾する。「手捏ね」成形後，「横撫で」と不定方向の「撫で」を施す。指頭圧痕あり。	7.5YR 7/6 橙色	L-4 区	
Fig. 67-7 Pl. 36-16	土　師　皿	口径　(10.0) 現高　2.2	底部は上げ底ぎみである。体部は外傾しながら緩やかに立ちあがる。底部内外面は不定方向の「撫で」の後，口縁部に右回りの「横撫で」を施す。	7.5YR 7/4 にぶい橙色	L-4 区	口唇部の一部に煤付着
Fig. 67-8 Pl. 37-8	土　師　皿	口径　(12.3) 現高　2.8	底部は丸みがあり，体部は外傾しながら緩やかに立ちあがる。底部内外面は「撫で」を施し，口縁部内面に横方向の「撫で」を施す。	5YR 8/3 淡橙色	L-4 整地層	
Fig. 67-9 Pl. 36-3	土　師　皿	口径　7.2 現高　1.2	底部中央部が上げ底ぎみで，凹状のヘソ皿型である。口縁部は直線的に緩やかに外傾する。内外面共に不定方向の「撫で」を施す。	7.5YR 8/4 浅黄橙色	K-4 区	
Fig. 67-10 Pl. 36-10	土　師　皿	口径　10.6 現高　2.2	底部はほぼ平底。体部は丸味をもって立ちあがり，口縁部はやや外反する。「手捏ね」成形後，内面は横方向の「撫で」，外面は不定方向の「撫で」を施す。	10YR 8/3 浅黄橙色	L-4 区	
Fig. 67-11 Pl. 37-1	土　師　皿	口径　(11.0) 現高　2.8	底部は丸味をおび浅く，口縁部は緩やかに外傾する。内外面共に不定方向の「撫で」を施す。	7.5YR 8/3 浅黄橙	L-4 整地層	
Fig. 67-12 Pl. 37-7	土　師　皿	口径　(12.0) 現高　2.1	扁平な底部より丸味をもって立ちあがる。「手捏ね」成形後，内面は右回りの「撫で」，外面は不定方向の「撫で」を施す。指頭圧痕あり。	2.5Y 8/3 淡黄色	J-4 区	

番　号	器　種	法　量	成形・整形の特徴	色調・胎土	出土地点	備　考
Fig. 67-13 Pl. 36-4	土師皿	口径 (8.0) 現高 1.2	底部はほぼ平底で，体部は丸味をおびて立ちあがる。「手捏ね」成形後，「撫で」を施す。	(内)7.5YR 1/3 にぶい橙色 (外)2.5YR 7/6 橙色	K-3 区	口唇部の一部に煤付着
Fig. 67-14 Pl. 36-11	土師皿	口径 10.7 現高 2.3	底部はほぼ平底で，直線的に外傾しながら口縁部に至る。口縁部は左回りの「横撫で」の後，内外面共に指による「撫で」を施す。	7.5YR 7/3 にぶい橙色	L-4 区	2mm 大の粒砂を含む 底部口縁部の内外面に多量の煤付着
Fig. 67-15 Pl. 37-2	土師皿	口径 11.5 現高 2.3	底部は扁平で，丸味をおびて立ちあがる。「手捏ね」成形後，「撫で」を施す。指頭圧痕あり。	5YR 8/3 淡橙色	L-4 区	口唇部に煤付着
Fig. 67-16 Pl. 37-9	土師皿	口径 (12.4) 現高 2.2	丸味のある底部より，緩やかに立ちあがり口唇部に至る。底部外面は指頭圧の後，「撫で」を施す。口縁部内面に横方向の「撫で」を施す。	(内)7.5YR 8/3 浅黄橙色 (外)5YR 8/3 淡橙色	第2トレンチ	口唇部全体に煤付着
Fig. 67-17 Pl. 36-5	土師皿	口径 8.0 現高 1.8	扁平な底部より丸味をおびて立ちあがる。「手捏ね」成形後，「撫で」を施す。指頭圧痕あり。	7.5YR 7/4 にぶい橙色	L-4 整地層	口唇部の一部に煤付着
Fig. 67-18 Pl. 36-12	土師皿	口径 (10.6) 現高 1.8	扁平な底部より，体部は直線的に緩やかに外傾しながら立ちあがる。「手捏ね」成形後，内外面に「撫で」を施す。指頭圧痕あり。	10RY 7/3 にぶい黄橙色	L-4 区	
Fig. 67-19 Pl. 37-3	土師皿	口径 (10.8) 現高 2.1	扁平な底部より丸味をもち緩やかに開いて立ちあがる。「手捏ね」成形後，内外面に「撫で」を施す。指頭圧痕あり。	10YR 8/2 灰白色	K-4 区	
Fig. 67-20 Pl. 37-10	土師皿	口径 (12.5) 現高 2.8	底部より丸味をおび開きながら立ちあがる。「手捏ね」成形後，「撫で」を施す。外面に指頭圧痕あり。	5YR 8/3 淡橙色	L-4 区	
Fig. 67-21 Pl. 36-6	土師皿	口径 (8.1) 現高 1.2	底部は浅く丸味がある。体部は丸味をおび緩やかに立ちあがる。内外面共に「撫で」を施す。	75YR 8/3 浅黄橙色	L-4 区	口唇部の一部に煤付着
Fig. 67-22 Pl. 36-13	土師皿	口径 10.8 現高 2.4	平底の底部より緩やかに外傾しながら口唇部に至る。底部外面に指頭圧痕と「撫で」を施す。内面の「撫で」を施した後，口唇部に右回りの「横撫で」を施す。	7.5YR 8/3 浅黄橙色	L-4 整地層	

番　号	器　種	法　量	成形・整形の特徴	色調・胎土	出土地点	備　考
Fig. 67-23 Pl. 37-4	土 師 皿	口径 (11.0) 現高 2.2	扁平な底部より直線的に外傾しながら立ちあがる。内外面共指頭圧痕あり。「手捏ね」成形後，「撫で」を施す。	7.5YR 8/4 浅黄橙色		
Fig. 67-24 Pl. 37-11	土 師 皿	口径 (12.3) 現高 2.8	底部より，緩やかに内彎し立ちあがる。内外面共に指頭圧痕と不定方向の「撫で」を施す。	5YR 8/3 淡橙色	L-2 区	口縁部に煤状付着物あり
Fig. 67-25 Pl. 36-7	土 師 皿	口径 6.2 現高 2.1	平底の底部より内彎ぎみに立ちあがり口縁部でほぼ直立となる。轆轤回転（右）による成形の後，口縁部に「横撫で」を施す。底部内面に右回りの「撫で」を施す。	25Y 8/3 淡黄色	L-4 区	
Fig. 67-26 Pl. 36-14	土 師 皿	口径 7.2 現高 3.1	底部より直線的に立ちあがり口縁部に至る。口縁上部に浅い沈線と片口を呈する。内面に5条の削し目あり。轆轤回転による成形の後，内面は釉のため赤褐色を呈する。	5YR 6/8 橙色	K-4 区	灯明具
Fig. 67-27 Pl. 37-5	土 師 皿	口径 11.4 現高 2.5	平底の底部より，緩やかに丸味をもって立ちあがり口縁部に至る。轆轤左回転による成形の後，底部内面は「撫で」を施す（静止糸切り？）。	7.5YR 8/4 浅黄橙色	L-4 区	轆轤水びき 底部内外面に吸炭あり 胎土が非常に細かい
Fig. 67-28 Pl. 37-12	蓋(焼塩壺)	直径 8.0 現高 1.1	粘土の接合痕あり。蓋部外面は「撫で」。内外には布目を施す。	5YR 7/6 橙色	J-4 区	
Fig. 67-29 Pl. 38-3	瓦　燈	上部径 6.4 現　高 6.9 底　径 (8.8)	瓦燈の下部である。杯状の施設のみ残存し，燈状部分は欠損。接合部は指による「撫で」。杯状部は，横方向の「撫で」を内外面に施す。	7.5YR 8/4 浅黄橙色	K・L-4 区	
Fig. 67-30 Pl. 38-2	瓦　燈	現高 5.8 底径 7.2	手捏ね土製品。	7.5YR 7/4 にぶい橙色	K-4 区	表面に煤状付着物あり
Fig. 67-31 Pl. 38-4	瓦　燈	直径 (21.0) 現高 14.9	瓦燈の蓋部である。粘土帯積みあげ。内面に指による「撫で」を施す。上部の受台部は欠損し，不定形の透し孔を複数有する。	7.5YR 7/4 にぶい橙色	L-4 整地層	
Fig. 67-32 Pl. 38-7	土師質土器 （壺）	口径 17.0 現高 26.2	平底の底部から直線的に緩やかに外傾し口縁部に至る。底部・胴部共に粘土帯積みあげ。内外面に横方向の「撫で」，口縁部は外面に横方向の「撫で」を施す。	7.5YR 7/6 橙色	L-4 整地層	

番　号	器　種	法　量	成形・整形の特徴	色調・胎土	出土地点	備　考
Fig. 68-33 Pl. 37-14	土　鍋 （焙烙）	口径　(36.0) 現高　6.0	底部はほぼ平底で，体部は直立する。体部粘土帯積みあげ。底部内外面に不定方向の「撫で」。口縁部内外面に横方向の「撫で」を施す。	5YR 6/8 橙色	L-4 整地層	底部・口縁部の一部に煤付着
Fig. 68-34 Pl. 37-13	土　鍋 （焙烙）	口径　(26.0) 現高　6.4	底部はほぼ平底である。口縁部は直立ぎみでロ唇部付近は丸味をもつ。底部内面は水びき。口縁部内外面は横方向の「撫で」を施す。	5YR 7/8 橙色	L-4 区	口縁部一部に吸炭あり
Fig. 68-35 Pl. 38-1	土　鐘	直径　3.9 孔径　1.4 現長　6.1	俵型を量する。棒状工具に粘土を巻きつけた後，外面・孔内部共に「撫で」を施す。	5YR 6/6 橙色	L-3 区	胎土には直径2～4mm大の礫を少し含む。
Fig. 68-36 Pl. 5-7	碗	口径　9.2 現高　5.7	小さな高台より内彎ぎみに直立し口縁部に至る。轆轤回転成形。高台と高台脇以外施釉。施釉部分は貫入がみられ文様は竹文である。	7.5Y 8/3 淡黄色	L-4 整地層	陶器
Fig. 68-37 Pl. 38-6	碗	底径　4.4 現高　4.0	底部は厚くて，低い削り出し高台。腰部は大きく開きながら立ちあがる。轆轤回転成形高台と腰部は無釉。腰部から上と見込みは施釉。	(内)5Y 6/4 オリーブ黄色 (外)5YR 6/6 黄色	J-4 区	陶器
Fig. 68-38 Pl. 40-7	天目茶碗	口径　(10.3) 現高　5.6	体部は直線的に外反し口縁部で直立ぎみになり口縁部のくびれは緩やかである。轆轤回転成形。体部上部・見込み全面に施釉。露胎部外面に横方向の「撫で」を施す。	5YR 5/6 明赤褐色	K-4 区	陶器 天目釉
Fig. 68-39 Pl. 38-5	碗	底径　3.8 現高　3.2	高い高台をもつ。文様は現存部では畳付以外の全面に刷毛目あり。	(内)5Y 4/2 灰オリーブ色 7.5Y 82 灰白色 (外)2.5GY 6/1 オリーブ灰色	K-3 区	陶器
Fig. 68-40 Pl. 40-6	灰釉皿	口径　(10.0) 現高　2.2	底部は回型を呈し，体部は丸みをもって開く。体部外面に「撫で」による浅い段状を2～3段施す。外面・見込み貫入を施す。	7.5Y 5/3 灰オリーブ色 7.5Y 7/2 灰白色	I-4 区	陶器 見込み蛇ノ目釉ハギ
Fig. 68-41 Pl. 39-1	皿	口径　(6.6) 現高　1.7	付高台。体部は直線的に立ちあがり波状の口唇部に至る。轆轤回転成形。体部内面は型打成形。高台と体部の一部は無釉である。	7.5GY 8/1 明緑灰色	L-4 区	陶器
Fig. 68-42 Pl. 39-2	小　杯	口径　(6.9) 現高　2.8		(内)2.5Y 6/4 にぶい黄色 (外)2.5Y 6/4 にぶい黄色 7.5Y 8/2 灰白色	J-2 区	陶器

番　号	器　種	法　量	成形・整形の特徴	色調・胎土	出土地点	備　考
Fig. 68-43 Pl. 6-7	椀	口径　10.8 現高　7.9	高台脇は水平ぎみで腰部は角ばって成形し直線的に口唇部へと立ちあがる。削り出し高台。口唇部はかえりをもつ。轆轤回転成形。見込みと高台は無釉。口縁部3条・腰部1条の線を回す。	5GY 7/1 明オリーブ色	L-4 区	陶器
Fig. 68-44 Pl. 40-3	皿	底径　(9.0) 現高　2.2	削り出し高台。見込みは刷毛目文様である。	5YR 5/4 にぶい赤褐色 5YR 5/4 灰白色	L-4 区	陶器
Fig. 68-45 Pl. 39-3	蓋	口径　3.8 現高　1.6	天井部に宝珠状のつまみを貼付け，内面かえり部は低い。天井部内面中央につまみ接合の粘土の貼付痕あり。轆轤回転成形。	(内)5YR 6/8 橙色 (外)2.5YR 4/6 赤褐色	L-4 整地層	陶器
Fig. 68-46 Pl. 6-8	鉢	口径　20.1 現高　12.6	底部は平底であり，体部下波は丸味を帯びて外傾し，胴部は内弯ぎみに立ちあがる。口縁部にかえりがある。轆轤回転成形。	7.5R 4/4 にぶい赤褐色 5Y 4/4 暗オリーブ色	L-4 区	陶器
Fig. 68-47 Pl. 8-5	水　指	口径　(25.6) 現高　12.1	高台端を削り，腰部は内弯ぎみに立ちあがる。口唇部は厚く外側にそる。轆轤回転成形。底裏無釉。文様は口縁部外面と見込みに刷毛目文あり。	(内)5Y 4/4 暗オリーブ色 7.5Y 8/1 灰白色 (外)5YR 4/4 にぶい赤褐色 5Y 4/4 暗オリーブ色		陶器
Fig. 69-48 Pl. 39-7	皿	口径　(12.8) 現高　2.9	低い高台から開きながらほぼ直線的に立ちあがる。口縁部は折縁で口唇部内面に1条の沈線が回る。轆轤回転成形。底裏・畳付部無釉。	2.5GY 7/1 明オリーブ色	I-3 区	陶器 見込みに3箇所の砂目痕あり
Fig. 69-49 Pl. 39-8	皿	底径　4.2 現高　2.0	付高台。腰部は開きながら直線的に立ちあがる。底裏無釉。轆轤回転成形。	2.5GY 7/1 明オリーブ色	J-3 区	見込みに3箇所の砂目痕あり
Fig. 69-50 Pl. 39-4	皿	口径　(12.0) 現高　3.1	低い削り出し高台から内弯ぎみに開いて立ちあがる。外面には轆轤痕が顕著。体部以下無釉。	(内)7.5YR 7/3 にぶい橙色 (外)7.5YR 7/3 にぶい橙色 10YR 7/4 にぶい黄橙色	I-4 区	陶器 見込みに4箇所の砂目痕あり
Fig. 69-51 Pl. 40-1	皿	底径　5.4 現高　1.8	低い削り出し高台。高台脇以下無釉。	(内)5Y 5/4 オリーブ色 2.5Y 3/3 暗オリーブ褐色 (外)5Y 5/4 オリーブ色	I-3 区	陶器 見込みに砂目痕あり
Fig. 69-52	皿	底径　4.4 現高　1.5	低い削り出し高台。轆轤回転成形。見込み施釉。	7.5Y 4/3 暗オリーブ色	L-3 区	陶器 見込みに3箇所の胎土目痕あり

番　号	器　種	法　量	成形・整形の特徴	色調・胎土	出土地点	備　考
Fig. 69-53 Pl. 41-1	皿	底径　4.4 高高　1.7	轆轤回転成形。底裏と腰部の一部無釉。	2.5GY 7/1 明オリーブ灰色 2.5Y 7/3 浅黄色	J-3 区	陶器 見込みに3箇所砂目痕あり
Fig. 69-54 Pl. 40-2	皿	底径　5.5 現高　1.6	轆轤回転成形。高台脇以下無釉。見込み施釉。	10YR 8/3 浅黄橙色	K-4 区	陶器 見込みに砂目痕あり
Fig. 69-55 Pl. 41-3	摺　鉢	口径　(32.7) 現高　15.7	底部より，直線的に開いて立ちあがり口唇部に至る。口縁部外面は右回転の「横撫で」。胴部外面以下指頭圧痕と「撫で」を施す。	10R 4/4 赤褐色	J-3 区	陶器
Fig. 69-56 Pl. 41-4	摺　鉢	口径　(30.8) 現高　10.8	平底より直線的に開く。口縁部外面は突出し口縁帯を作りだし，2条の沈線を回らす。内面は口縁部に浅く広い沈線が1条回る。体部外面に「撫で」を施す。轆轤回転成形。	(内)7.5YR 4/3 にぶい赤褐色 (外)7.5YR 4/3 にぶい赤褐色 5YR 6/6 橙色	第2トレンチ	陶器 10条単位以上の卸し目
Fig. 70-57 Pl. 5-9	鞴	口径　10.2 現高　5.6		2.5GY 7/1 明オリーブ灰色		磁器
Fig. 70-58 Pl. 5-4	碗	口径　9.8 現高　5.1	高台より腰部は，丸くふくらみ内彎ぎみに開いて立ちあがる。口縁部はやや開く。全面施釉。高台に2条の線が回る。文様は草花・菊丸文。	10GY 8/1 明緑灰色	K-4 区	磁器
Fig. 70-59 Pl. 41-6	碗	口径　(10.0) 現高　5.2	底部は厚く腰部に丸味をもちながら口縁部に至る。高台に2条の線が回る。文様は草花文である。畳付部無釉。	10G 7/1 明緑灰色	L-4 区	磁器 高台内に銘あり
Fig. 70-60 Pl. 41-2	碗	口径　(9.6) 現高　5.1	高台外側脇部が厚く高台より内彎ぎみに開きながら立ちあがり，口縁部はやや開く。高台に2条・高台脇に1条の線が回る。文様は，団鶴文。畳付部無釉。	7.5GY 8/1 明緑灰色	K-4 区	磁器 コンニャク印判 高台内に銘あり
Fig. 70-61	碗	口径　10.8 現高　5.7	底部は厚く高台は高い。腰部は丸味をもち胴部は直線的に開きながら立ちあがり口唇部に至る。畳付部無釉。高台2条・腰部1条の線が回る。文様は草花文。	10GY 8/1 明緑灰色	不明	磁器 見込み蛇ノ目釉ハギ
Fig. 70-62 Pl. 41-7	碗	口径　10.2 現高　5.7	腰部はやや丸味を帯び，胴部から口縁部にかけて，直線的にやや開いて立ちあがる。底部はやや厚い。文様は花文。高台に1条の線を回す。	7.5Y 8/2 灰白色	L-4 整地層	磁器 上薬が溜けていない

番　号	器　種	法　量	成形・整形の特徴	色調・胎土	出土地点	備　考
Fig. 70-63 Pl. 42-1	碗	口径　(10.4) 現高　5.1	高台脇から丸味をもって立ちあがり，口縁部はやや開く。畳付部無釉。文様は草花文である。	5G 7/1 明緑灰色		磁器 見込み蛇ノ目釉ハギ
Fig. 70-64 Pl. 42-2	碗	口径　(11.1) 現高　(6.6)	底部がやや厚く，丸味のある腰部から口縁部にかけ直立する。畳付部は無釉。文様は腰部から体部に草花文がある。	5GY 6/1 緑灰色	K-4 区	磁器
Fig. 70-65 Pl. 42-3	碗	口径　(12.4) 現高　5.1	底部が厚く，高台脇より口縁部へ，丸味をおびて立ちあがる。口縁部はやや開く。文様は体部に草花文と高台・高台脇・腰部に1条の線を回す。	7.5GY 6/1 明緑灰色	I-2 区	磁器 見込み蛇ノ目釉ハギ釉ハギ部分に円形の高台痕あり
Fig. 70-66 Pl. 5-3	碗	口径　(10.2) 現高　4.7	高台は小さく器高が低い。高台脇で器厚が厚く，高台脇から口唇部へ緩やかに内彎しながら立ちあがる。畳付部無釉。文様は体部に草花文がある。	10GY 8/1 明緑灰色	K-4 区	磁器
Fig. 70-67 Pl. 42-4	碗	口径　(9.2) 現高　6.5	高台は高く，丸味のある腰部から，直線的に開きぎみに立ちあがる。文様は植物文様と口縁部外面と高台脇に1～2条の線を回す。畳付部無釉。	5Y 8/2 灰白色	J-3 区	磁器
Fig. 70-68 Pl. 42-5	碗	口径　(9.9) 現高　5.2	底部に厚く腰部は丸味を帯び開きながら立ちあがる。畳付部無釉。文様は 草花文 と 高台・高台脇・腰部・底裏に各1条の線が回る。	7.5GY 8/1 明緑灰色	K-4 区	磁器
Fig. 70-69 Pl. 5-5	碗	口径　9.7 現高　5.6	底部は，厚く腰部は丸味をもち，やや開きながら立ちあがる。畳付部無釉。文様は草花文と高台2条・腰部1条に線が回る。	5GY 8/1 灰白色	K-4 区	磁器 見込み蛇ノ目釉ハギ
Fig. 70-70 Pl. 5-6	碗	口径　10.7 現高　5.3	底部は厚く腰部は丸味をもち胴部は直線的に開きながら立ちあがる。畳付部無釉。文様は草花文と層文。高台・高台脇・腰部に1条の線が回る。	7.5GY 8/1 明緑灰色	K-4 区	磁器 見込み蛇ノ目釉ハギ
Fig. 70-71 Pl. 42-8	碗	口径　9.7 現高　4.9	高台は低く，丸味のある腰部より直線的に開きながら口唇部へ立ちあがる。畳付部無釉。文様は外面に二重絡網手文。見込みは劃文と花文。高台2条・高台脇1条の線が回る。	5GY 8/1 灰白色	L-4 区	磁器 底裏に銘あり
Fig. 70-72 Pl. 5-2	碗	口径　9.8 現高　5.2	底部は厚く高台より内彎ぎみに開き口縁部で直線的に開きながら立ちあがる。文様は外面に二重絡網手文と高台・高台脇・腰部に各1条の線を回す。畳付部無釉。	10BG 7/1 明青灰色	I-3 区	磁器 器厚が厚め

番　号	器　種	法　量	成形・整形の特徴	色調・胎土	出土地点	備　考
Fig. 70-73 Pl. 42-7	碗	口径 (11.4) 現高 4.7	底部は厚く器高は低い。丸味のある腰部より直線的に開きながら立ちあがる。文様は胴部に草花文と高台脇と腰部に1条の線を回す。釉付部無釉。	5GY 8/1 灰白色	L-4 区	磁器 見込み蛇ノ目釉 ハギ
Fig. 70-74 Pl. 5-8	碗	口径 (10.8) 現高 5.5	底部は厚く，腰部は丸味をもち胴部は直線的に開きながら立ちあがる。文様は草花文と扇文・高台2条・高台脇1条に線を回す。	10GY 8/1 明緑灰色		磁器 見込み蛇ノ目釉 ハギ
Fig. 70-75 Pl. 42-6	碗	口径 (10.2) 現高 5.7	底部は厚く，腰部は丸味をもち，体部は内彎ぎみに開きながら立ちあがる。口唇部先端はやや鋭い。釉付部無釉。	7.5GY 8/1 明緑灰色		磁器
Fig. 70-76 Pl. 43-1	碗	口径 (10.3) 現高 5.8	高い高台から直線的に開きながら口唇部へ至る。胴部と茶溜りに文様あり。	10GY 8/1 明緑灰色	I-3 区	磁器
Fig. 70-77 Pl. 43-2	碗	口径 (7.6) 現高 6.2	高台は小さい。高台より直線ぎみに稜のある腰部へ開いた後，垂直に口縁部に立ちあがる。底部がやや厚く，口唇部はほぼ平ら。釉付部無釉。文様は胴部に松文あり。	10GY 8/1 明緑灰色	L-4 区	磁器
Fig. 71-78 Pl. 5-1	碗	口径 11.8 現高 6.3	厚い底部より内彎ぎみに開きながら立ちあがる。文様は外面に瓶子帷子蝶文，見込みに五弁花文。高台・口縁部内面・見込みに各2条，高台内・腰部に各1条の線を回す。釉付部無釉。	5G 7/1 明緑灰色	I-3 区	磁器 底裏に銘あり
Fig. 71-79 Pl. 44-4	皿	口径 12.3 現高 3.1	開きながらほぼ直線的に立ちあがる。轆轤右回転成形。高台脇以下無釉。見込みの文様は草文。	7.5GY 8/1 明緑灰色	L-4 整地層	磁器 見込み蛇ノ目釉 ハギ
Fig. 71-80 Pl. 44-5	皿	底径 6.4 現高 4.8	高台は高く大きい。轆轤右回転成形。腰部以下無釉。	7.5Y 6/3 オリーブ黄色	L-4 整地層	磁器 見込み蛇ノ目釉 ハギ
Fig. 71-81 Pl. 43-6	皿	口径 (13.6) 現高 3.4	低い高台から，腰部は丸味をもち内彎ぎみに立ちあがる。文様は，口縁部内面に交叉線文と，見込みに2条の線を回す。釉付部無釉。	7.5GY 8/1 明緑灰色	K-2 区	磁器 見込み蛇ノ目釉 ハギ
Fig. 71-82 Pl. 43-5	皿	口径 12.0 現高 3.7	高台より内彎ぎみに開きながら立ちあがる。文様は口縁部内面に交叉線文と，見込みに2条の線を回す。釉付部無釉。	7.5GY 7/1 明緑灰色	I-3 区	磁器 見込み蛇ノ目釉 ハギ

番　号	器　種	法　量	成形・整形の特徴	色調・胎土	出土地点	備　考
Fig. 71-83 Pl. 44-1	皿	口径　(12. 4) 現高　4. 3	広い高台より腰部は丸味をもって立ちあがり，口縁部は緩く外反する。見込みと体部外面に文様あり。高台2条・腰部・底裏1条の線を回す。糸付部無釉。	2. 5GY 8/1 灰色	L-4 区	磁器 高台蛇ノ目部の釉をぬぐう
Fig. 71-84 Pl. 44-3	皿	口径　(14. 4) 現高　3. 8	蛇ノ目凹型高台。底部から，緩やかに内彎しながら立ちあがる。胴部と見込みに文様あり。高台から腰部に3条の線を回す。	7. 5GY 8/1 明緑灰色		磁器
Fig. 71-85 Pl. 7-6	皿	口径　11. 5 現高　3. 6	高台より内彎ぎみに開いて立ちあがる。轆轤回転成形。見込みは銅緑釉，外面は透明釉，高台無釉。	(内)10Y 7/1 灰白色 (外)2. 5Y 8/4 淡黄色	L-4 整地層	磁器 見込み蛇ノ目釉ハギ
Fig. 71-86 Pl. 44-2	皿	口径　11. 9 現高　3. 6	高台より内彎ぎみに開いて立ちあがる。轆轤回転成形。見込みは銅緑釉，外面は透明釉，高台無釉。	(内)10Y 6/2 オリーブ灰色 (外)7. 5Y 8/2 灰白色	L-4 区	磁器 見込み蛇ノ目釉ハギ
Fig. 72-87 Pl. 43-4	皿	口径　(19. 0) 現高　5. 2	高台より腰部は大きく張り，口縁部で緩やかに屈曲し立ちあがる。見込みと胴部外面に草花文様・見込みに五弁花文あり。	7. 5Y 8/1 明緑灰色	L-4 整地層	磁器 見込み蛇ノ目釉ハギ
Fig. 72-88 Pl. 43-3	碗	口径　(18. 8) 現高　8. 7	高台より腰部は丸味をもち，体部は直線的にやや開いて立ちあがる。文様は見込みと体部につる草状草花文・高台・見込み・腰部以下に2条の線を回す。糸付部無釉。	7. 5GY 8/1 明緑灰色	L-4 整地層	磁器 底裏に満福銘あり
Fig. 72-89 Pl. 45-2	人　形	残存高　4. 9	人形。型合わせ成形。無釉。	7. 5YR 8/3 浅黄橙色	L-4 整地層	頭部，足部欠損
Fig. 72-90 Pl. 45-8	人　形	残存高　7. 2	人形。型合わせ成形。無釉。	7. 5YR 8/6 浅黄橙色	不明	頭部，足部欠損
Fig. 72-91 Pl. 45-5	人　形	残存高　2. 1	人形。手捏ね。無釉。	7. 5YR 8/2 灰白	L-4 整地層	頭部のみ残存
Fig. 72-92 Pl. 45-1	人　形	残存高　8. 5	人形。型合わせ成形。無釉。	7. 5YR 7/3 にぶい橙色	L-4 区	頭部，右腕欠損
Fig. 72-93 Pl. 45-6	人　形	残存高　2. 9	人形。型合わせ成形。無釉。	10YR 8/2 灰色		頭部足部欠損
Fig. 72-94 Pl. 45-7	人　形	残存高　3. 6	人形。手捏ね成形。無釉。	10YR 8/2 灰白色	L-4 区	胴部以下残存

番　号	器　種	法　量	成形・整形の特徴	色調・胎土	出土地点	備　考
Fig. 72-95 Pl. 45-4	人　形	残存高　3.7	人形。手捏ね成形。無釉。	10YR 8/2 灰白色	L-4 区	頭部欠損
Fig. 72-96 Pl. 45-3	人　形	残存高　2.5	ミニチュア土製品。型合わせ成形。無釉。	7.5YR 8/3 浅黄橙色	K-4 区	上部欠損
Fig. 72-97 Pl. 45-9	人　形 (鳥)	残存高　4.6	動物人形（鳥）。型合わせ成形。無釉。	7.5YR 8/2 灰白	L-4 区	頭部欠損
Fig. 72-98 Pl. 45-10	小　坏	口径　(4.4) 現高　1.7	ミニチュア土製品。底部から口唇部に立ちあがる。無釉。	5YR 7/6 橙色	K-4 区	
Fig. 72-99 Pl. 46-6	小　坏	口径3.5～4.4 現高　2.3	ミニチュア。体部外面施釉。	5Y 8/4 淡黄色	L-4 整地層	陶器
Fig. 72-100 Pl. 46-7	土製品	残存高（0.3）		7.5YR 7/4 にぶい橙色	L-2 区	
Fig. 73-101 Pl. 47-1	軒丸瓦	直　径　15.0 器　厚　1.8 残存長　17.0	左巻三巴文。丸瓦部裏面に布目と篦調整痕あり。表面に「篦磨き」を施す。		J-3 区	
Fig. 73-102 Pl. 46-11	軒丸瓦	直　径　15.0 器　厚　2.0 残存長　2.0	巴文。		J-2 区	
Fig. 73-103 Pl. 47-2	軒丸瓦	直　径　14.7 器　厚　2.4 残存長　3.8	左巻三巴文。珠文数14個。巴のまわりに輪が回る。		J-3 区	
Fig. 73-104 Pl. 46-8	軒平瓦	残存長　4.4 横　幅　10.0 器　厚　1.6	唐草文。		J-3 区	
Fig. 73-105 Pl. 46-10	軒平瓦	残存長　8.5 横　幅　13.0 器　厚　1.7	唐草文。		J-3 瓦溜	
Fig. 73-106 Pl. 46-9	軒平瓦	残存長　13.6 横　幅　11.8 器　厚　1.7	唐草文。平瓦部裏面に指頭圧痕あり。		L-1 溝	
Fig. 73-107	丸　瓦	残存長　28.8 最大幅　14.2 器　厚　1.7	左巻三巴文。釘穴あり。内外面に篦調整痕あり。		J-3 瓦溜	
Fig. 74-108 Pl. 46-12	丸　瓦	残存長　18.4 最大幅　12.9 器　厚　1.3	裏面に「篦撫で」を施す。 表面に「篦磨き」を施す。		L-1 溝	
Fig. 74-109	丸　瓦	残存長　21.4 最大幅　13.3 器　厚　1.6	裏面に「篦撫で」を施す。 表面に「篦磨き」を施す。		L-1 溝	

番　号	器　種	法　量	成形・整形の特徴	色調・胎土	出土地点	備　考
Fig. 74-110	丸　瓦	残存長　22.2 最大幅　13.1 器　厚　1.5			J-3 瓦溜	
Fig. 74-111 Pl. 46-13	丸　瓦	残存長　21.6 最大幅　15.2 器　厚　1.5	玉縁部裏面に「叩き」による刻目。を裏面に「篠撫で」，表面に「磨き」を施す。		J-3 瓦溜	
Fig. 75-112 Pl. 48-3	平 折 釘	長さ　17.2 幅　1.2 厚　1.2			J-3 区	鉄製品
Fig. 75-113 Pl. 48-8	鎹	長さ　15.1 幅　0.9 厚　0.7	釘(鎹)。断面は四角形で胴部が長く肩の部分は緩やかに開く。先端にかけ次第に細くなる。		J-3 区	鉄製品
Fig. 75-114 Pl. 48-12	銅 製 品	長さ　10 幅　2.7	船底形を呈す。		第2トレンチ	飾り金具
Fig. 75-115 Pl. 48-14	キ セ ル	長さ　10.1 幅　0.6	羅宇結合部は二重の管となっている。		K-2 区	銅製品 吸口端部欠損
Fig. 75-116 Pl. 48-13	銅 製 品	長さ　3 幅　1.8 厚　0.8	平面形では左上・左下に突出がみられ，右上の隅に切り込みがある。		K-4 区	
Fig. 75-117 Pl. 48-16	銅　銭	直径　2.4 厚　0.1	寛永通宝（古寛永）。		I・J-4 区	
Fig. 75-118 Pl. 48-25	銅　銭	直径　2 厚　0.1	寛永通宝（新寛永）。		L-2 区	
Fig. 75-119 Pl. 48-23	銅　銭	直径　2.4 厚　0.1	寛永通宝（新寛永）。「寛」字2/1欠損。		K-4 区	
Fig. 75-120 Pl. 48-15	銅　銭	直径　2.3 厚　0.1	寛永通宝（新寛永）。		L-2 区	
Fig. 75-121 Pl. 47-6	石　碑	残存高　26.0 最大幅　24.0 最大厚　10.0			K-2 区	花崗岩 下部欠損
Fig. 75-122 Pl. 47-5	石　臼	直径　(32.0) 厚　12.0	上臼で約2/3を欠損する。分面不明。縁溝は，3～7溝である。		L-3 区	花崗岩
Fig. 75-123 Pl. 47-8	一石五輪塔	残存高　15.2 最大幅　8.2			K-4 区	花崗岩 火水輪のみ残存
Fig. 75-124	一石五輪塔	残存高　15.4 最大幅　8.0			I-2 区	花崗岩 地輪のみ残存

第6章　伊丹郷町遺跡随想

倉　田　芳　郎

1

この遺跡の発掘調査では，伊丹市教育委員会の全面的ご協力を賜わり，心からお礼申しあげたい。第一には，調査体勢についてである。調査補助の学生が，みな駒沢大学の考古専攻学生であるので，彼等を指導する調査員を，全員駒沢大学考古学ＯＢで固めたい，という当方の希望を快くお認めいただいたことを挙げたい。「指導は誰でもよいではないか」とか「他流試合をさせた方が良い」という意見は，我々世代の者同士が話す場合に，よく出されることである。私自身も，その考え方に，賛成である。しかし，「学生」である時期には，なるべく，同じ発掘方針のもとで，修業した方が良い，と考えている。発掘区の設定・測量の方法，その他諸々にわたって，発掘主体が変われば，実に千差万別である。「発掘には顔がある」といっても過言ではない。ある時，北海道で，通りすがりに発掘中の遺跡に巡り合ったことがある。30分ばかり，調査員の方のご説明を聞き，勉強させていただいたのであるが，そのおり，その遺跡の発掘区の広げ方その他に，Ｋ氏の顔を見た。お訊ねしたところ，やはり，Ｋ氏が団長をしていらっしゃる遺跡だった。最近の学生諸君は，アルバイトも兼ねて，いろいろな遺跡に入っておられる例がよくある。それも良しとしよう。そのことに一言加えるなら，「なるべく同じ先生のところで勉強した方が良いと思いますよ」である。あちこちの飯場をスコップ一本で渡り歩く人によりは，指導する側も親身になって，一所懸命鍛えようという気になる道理である。「他流試合」は卒業してからでも遅くない。というより，卒業してからの方が良い，ということである。

このたびの調査では，市教育委員会から，小長谷正治氏を派遣してくださった。同氏もまた，駒沢大学ＯＢで，指導陣が一つにまとまり，本学の太田喜美子講師ともども，学生の修業には，非常に好都合だった。深いご配慮に言葉も無いほどである。

2

ついで，発掘調査の方法についてである。既に，前々から，伊丹市の発掘調査では，藤井直正先生の率いる大手前女子大学が入っており，有岡城およびその周辺の遺跡を手がけておいでである。そして，このたびの伊丹郵政局の遺跡のすぐ西側の隣接地は，市教育委員会の方々で発掘が行なわれて，少し前に終了している。このような場合，いずれ発掘調査の結果を繋げる関係上，以前の調査方法に従うように指示されることがあるようである。さきに記したように，発掘調査の方法には，それぞれの発掘者によって違いがある。そこのところを，充分に理解してくださったことにも，深く感謝したい。総じて笹倉東一教育部長をはじめ市教育委員会の皆さんのご援助により，円滑に調査を了えることができた。殊に，垂仲一郎社教主査には，学生の宿舎等々，細かな点にまでご高配を賜わったことを特記したい。

このような発掘調査では，往々にして，発掘依頼者と発掘者の間で，理解が異ったり，意見が食い違ったりして，調査が円滑さを欠く，という例を聞くのであるが，依頼者の近畿郵政局では我々の希望を，そのまま受け入れてくださり，感謝にたえない。

3

この遺跡は，元禄以降の遺構が重複している，という示唆を受けていた。周辺の伊丹郷町内の遺跡の発掘結果から，推測されていたところである。広い遺跡の調査では，縄文期の遺跡のつもりで調査しても，上の方では，近世の層にぶつかることが通例である。私自身は近世陶磁の窯等を調査しているが，駒沢大学考古学研究室として，このような時期の遺跡を調査したことは無い。その意味では，調査員も学生諸君も勝手が違ったかもしれない。遺跡の表土を剥いだ段階で，明治以降に掘ったゴミ溜めと思える坑が沢山出てきた時は，京都市街での発掘現場を思い起こした。京都市街地は，建物の建て替えにあたっては，内裏内では必ず，そして内裏外でも，多くの場合は，京都市教育庁あるいは平安博物館（現在は京都文化博物館に改組）の手で調査している。早くから市街地だった市都市内では，火事その他で街の建直しが何度となく繰返されたのであるが，塵芥の持って行き場所が無いためだろう，その処理の坑が数多く開けられ，塵類を貯めて，その上に次代の建物を建てている。伊丹の市街地も，同じように街としての古さを感じた。坑の一つは，一括して，私が子供の頃，見たことのあるような飲みものの瓶等があって，懐かしくて見つめたりした。江戸時代どころか，昭和ひとけた代の子供の遊び道具を遺跡でかき回すとは，ある感慨を覚えた。整理期間の短かさから，このたびの報告書では，報告を割愛したのであるが，いつか調べてみたいと思っている。

4

報告書を，いろいろ開いてみて，報告書を作成していらっしゃる方々に希望がある。最近は，江戸時代も考古学の対象にされるようになってきている。ついては，陶磁器類の写真を，なるべくカラー写真にしていただきたい。といっても，それは無理だろう。せめて，なるべくカラー写真の頁を多くしていただきたい。この点については，さすがの伊丹市でも，「先例が無いから」とのことで，当方の希望は断られた。まあ，それも当然であろう。が，近世陶磁を自分の領域としている者にとっても，報告書の陶磁器のモノクロ写真は，土師・須恵とは違って，イメージが稀薄である。多彩な色鍋島や京焼などは，ぜひともカラーにしていただきたい。この報告書では，陶磁器についてはカラー頁を5頁にしていただいた。現在では，まずまずといったところだろう。

5

この報告書の完成に先だち，当時，柿衛文庫の事務局長をしておられた門脇良光先生（後明石短大教授）がご逝去になった。駒沢大学のご出身であったこともあり，格別のご指導を賜わったのである。残念至極である。

前記の藤井直正先生と，広く云えば同一遺跡での出会いも強い印象だった。私が大学に入って，一番初めに遇って話を交わした他の大学の考古専攻生が藤井先生だったからである。思えば伊丹の調査は，生涯，私から離れない調査となるだろう。関係諸氏に心から感謝して，お礼を云いたい。

a．調査区遠景（西側より）
阪急伊丹駅より東へ300ｍの地点である。

b．西側調査区全景（南側より）
庭園遺構の西側である。溝の底に瓦が敷かれている。

a．J-3 石組（西側より）
石組の北端は、濠の肩部を利用している。底面には、砂質土が堆積していた。

b．J-3 石組部分拡大（東側より）
石組の西壁隅には石仏が嵌め込まれている。下半は、砂質土に覆われていた。

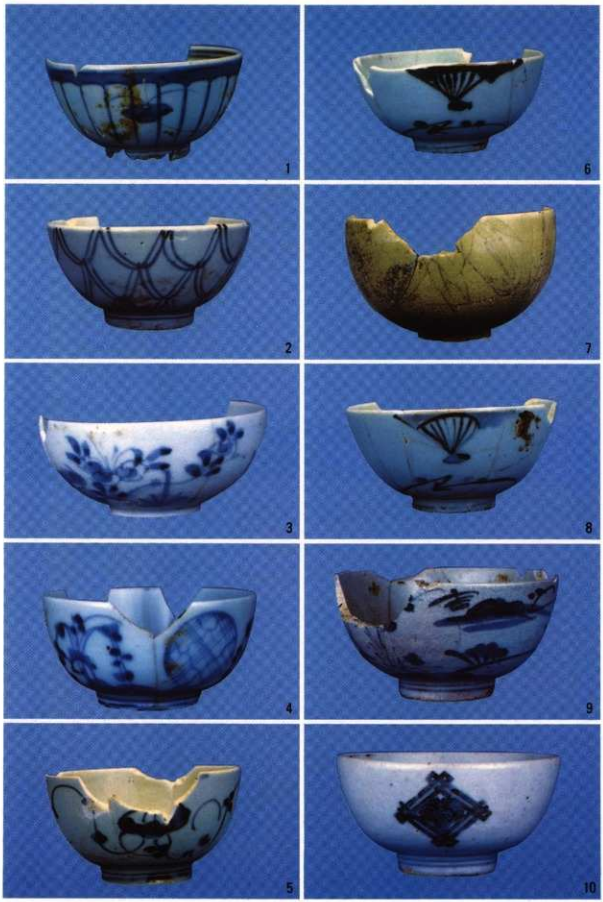
a．遺跡西側調査区終了写真（東側より）

b．濠 土層断面（西側より）

底面には、薄く、粘質土が堆積している。上層は、掘まじりの土を一気に埋めたと考えられる。

a．濠 出土遺物
1～3は瀬戸・美濃焼灰釉皿，4・5は天目茶碗，6、7は明の染付磁器

b．濠 出土遺物
この漆椀は、濠下層から出土した。土圧によって拉げている。



1・2（I-3区），3～6（K-4区），7（L-4区），8・9（出土区不明），10（L-4A土坑），
1～6・8～10は、肥前焼染付磁器碗，7は京焼陶器

1～5（I-21土坑），6（K-3溝），7・8（L-4区）
1・2・4・5は、肥前焼染付磁器，8は丹波焼水指

1（H-2井戸），3・5（I-3C土坑），2（K-3溝），4（L-4A土坑），6（L-4区）
1は二彩唐津大皿，2は型紙刷目唐津，3は砂目唐津，4は刷毛目唐津，5は肥前染付磁器皿，6は銅緑釉皿

PL.8

1～4（I-2I土坑），5（L-4区），6（I-3F土坑）
1～4・6は肥前焼染付磁器，5は唐津焼刷毛目鉢

a．調査区Ⅱ面全景（東側より）
K-3石列，J-3方形竪穴状遺構などの位置関係がよくわかる。

b．漆 遺物出土状況
左が骨片、右が木材である。木材は、加工されていることがわかる。

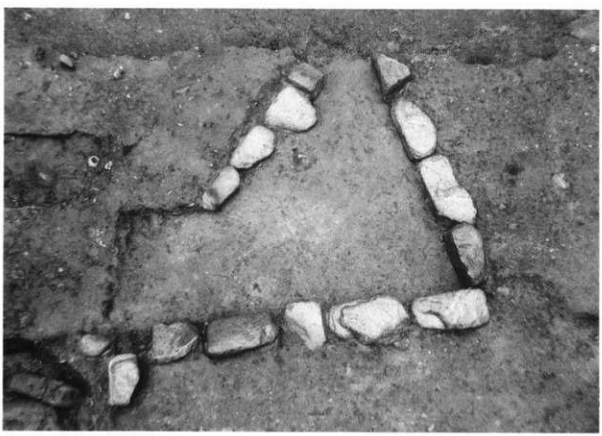
a．庭園遺構全景（南東側より）
遺構南西部に石組み。西部に配石。瓦の廃棄状況がわかる。

b．庭園遺構 遺物出土状況（南側より）
庭園遺構内、K－2溝の遺物出土状況である。

a．J-3石組全景
J-3石組の最も古い状態で、平面形は半月状態である。

b．J-3石組（部分拡大）
底面は、ほぼ平坦であるが、やや南側へ傾いている。

a．L-2石列（南西側より）
ほぼ南北に並ぶ。石仏・五輪塔が用いられている。



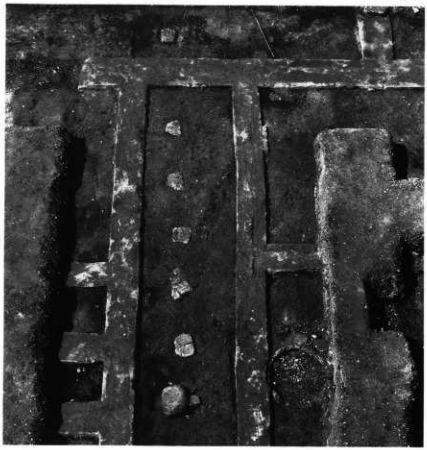
b．K-3石列（北側より）
北東から南西に並ぶ石の一面がそろえられている。

a．J-3瓦列（南側より）
平面形は円形。底面に、黄橙色の貼り土が円形に施されている。

b．J-4瓦列（南側より）
平面形は円形。

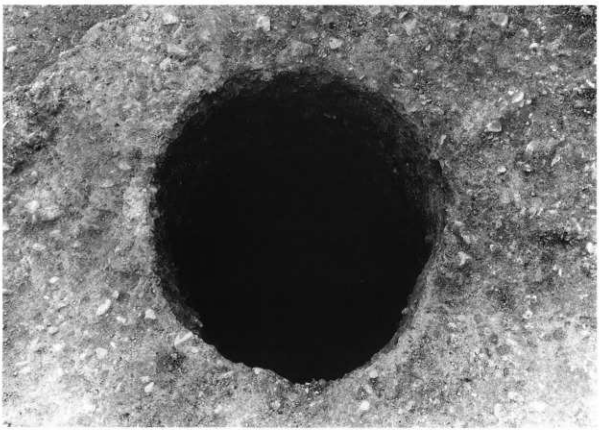
a.K-2瓦管（南東側より）
瓦管は、2枚1組で管状を呈する。写真は、先端部である。

b.J-4礎石（西側より）



a. K-3礎石列全景
（東側より）

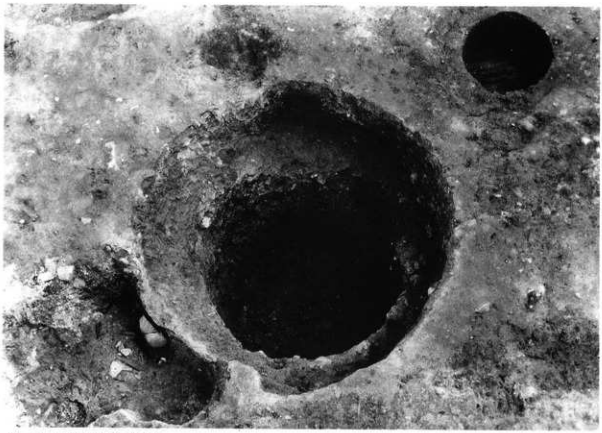
b. L-2礎石（南側より）



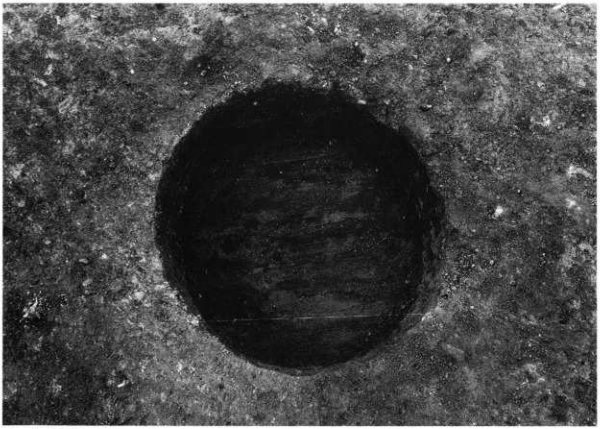
a．H-2井戸（北東側より）

b．K-2井戸瓦出土状況（南側より）
瓦の他、陶磁器片・鉄製品が出土している。

a．J-3埋桶（南側より）
桶底部の木材が若干残存する。

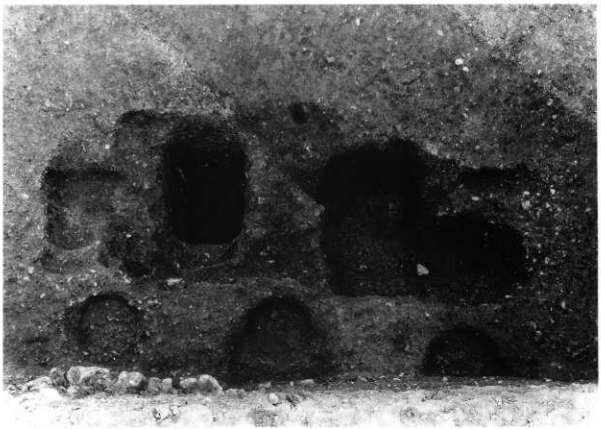


b．K-2埋桶（南側より）
壁より炭化材が検出されている。

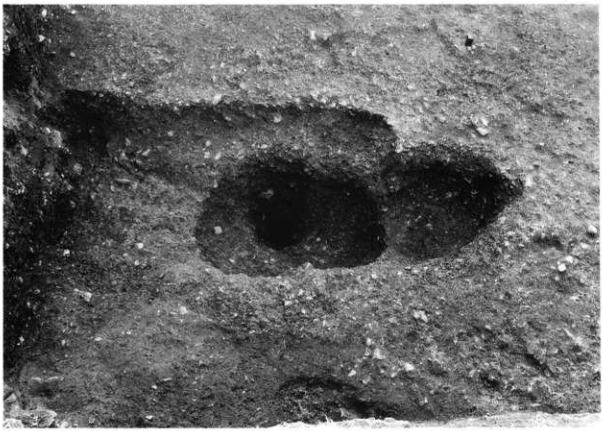


a　L-2埋桶
桶底部が残存。板材の厚さは、1～1.5cmである。

b．K-2溝（西側より）
東西方向にのびている。
溝の底は、西側に向けて浅くなる。



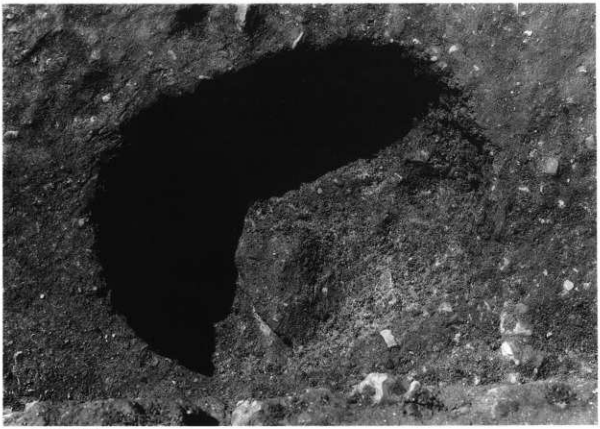
a．F-2・G-2土坑群（東側より）
北東から南西にかけ、瀑が検出されている。



b．G-3A土坑（東側より）

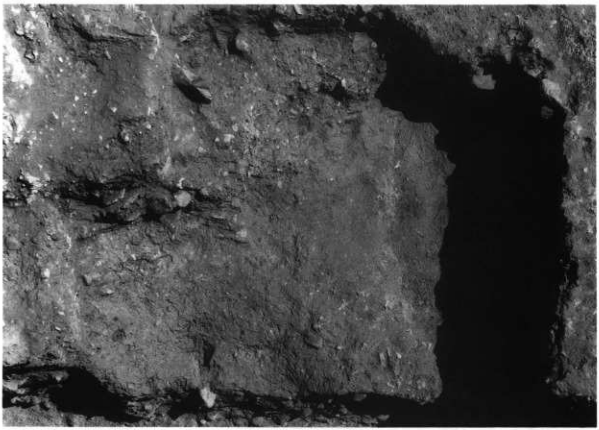
a．Ⅰ-2土坑群（東側より）
各土坑が複雑に切合っている。土坑数は18基を数える。

b．Ⅰ-21土坑（東側より）



a．Ⅰ-3C土坑

b．Ⅰ-3F土坑（東側より）
瓦が多量に出土している。



a．Ⅰ-3G土坑（西側より）
「金岡瓦宗」銘入りの丸瓦が1点出土している。

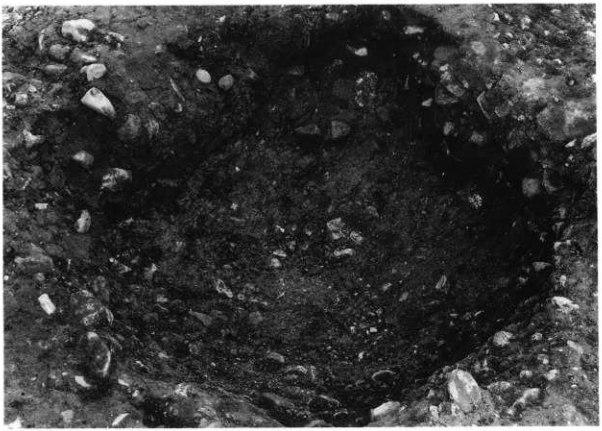
b．Ⅰ-3H土坑 遺物出土状況（西側より）

a．J-2土坑群（北側より）
土坑数は7基である。

b．J-3A土坑（南側より）

a．J-3B土坑 遺物出土状況

b．J-3F土坑（東側より）

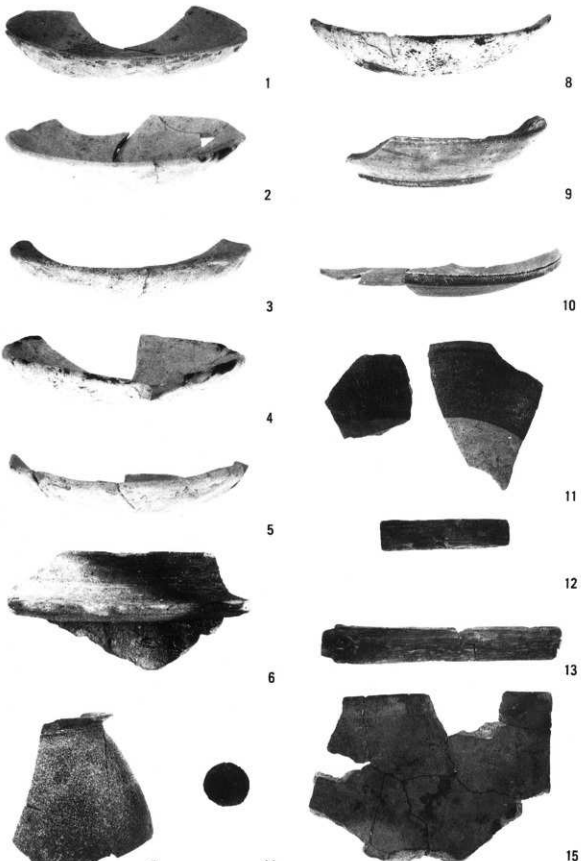


a. K-3C土坑

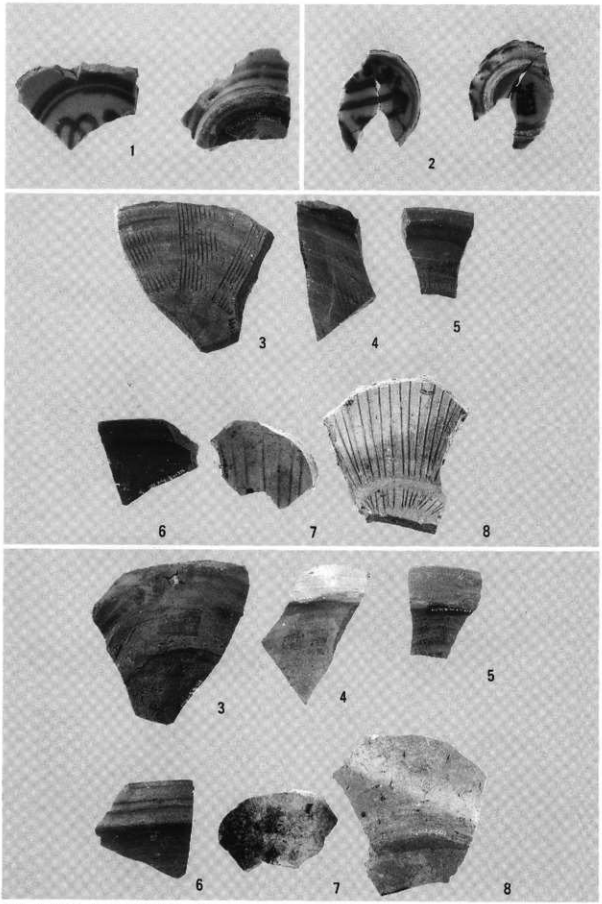
b. L-4A土坑 遺物出土状況

a．J-3方形竪穴状遺構（南側より）
方形に胴木をくんでいる。胴木の北西・南西角に鉦が打ち込まれている。

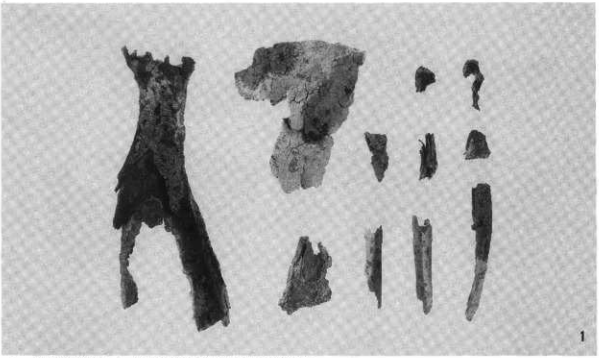
b．J-3方形竪穴状遺構 出土鉦（北東側より）
南西角の鉦である。板材による壁が貼ってある。



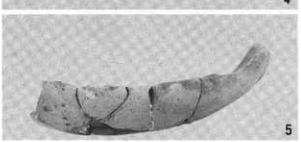
Ⅰ期の遺物(1)　すべて遂出土の遺物である。
1～5・8は土師皿，6は羽釜，7は丹波焼の甕，9は瀬戸・美濃焼の灰釉皿，10は備前焼の大皿，
11は瀬戸・美濃焼の天目茶碗，12・13は木製品，14は鉄砲の玉，15は平瓦

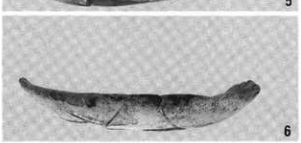


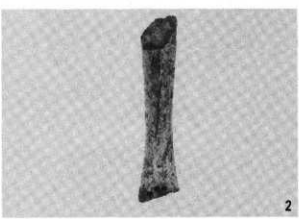
Ⅰ期の遺物(2)　すべて塗出土の遺物である。
1・2は明の染付磁器，3～6は備前焼の擂鉢，7・8は丹波焼の擂鉢

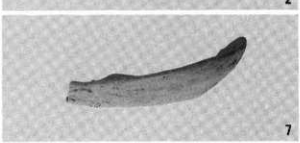


a．Ⅰ期の遺物[3]　1・2は溝の底近くより出土した動物の骨

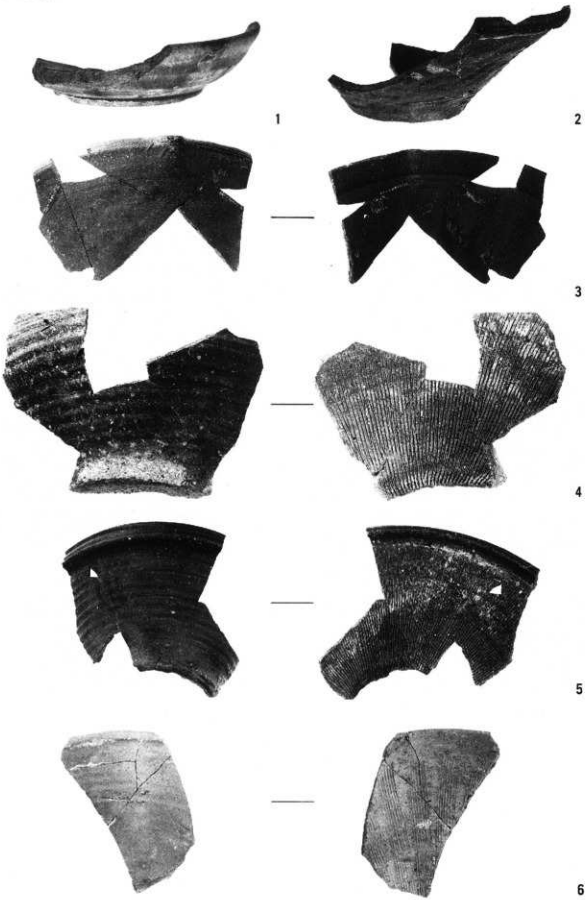








b．Ⅱ期の遺物[1]
3（K-3溝），4～6（I-3C土坑），7（J-3石組），8（K-2溝），
3～7は土師皿，8は唐津焼の碗



II期の遺物(2)
1（J-3石組），2・6（I-3G土坑），3（I-3C土坑），4・5（J-3F土坑）
1は瀬戸・美濃焼の灰釉皿，2～6は擂鉢

[I期の遺物(3)]

1・2・8～10（J-3F土坑），3（I-2C土坑），4（I-3G土坑），5～7（K-3溝），
11（G-3A土坑），12（K-3石列），13（J-3石組）
1・2は備前焼の擂鉢，3・6・9・10は肥前焼の染付碗，7は唐津焼の砂目横刷毛目皿，8は肥前焼の青磁碗

1

3

2

4

5

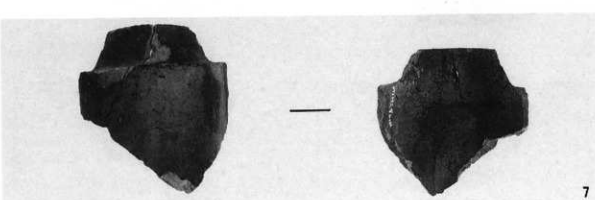
6

7

II期の遺物(4)

1・3・4・7（J-3石組），2・5（J-2石列），6（K-3石列）

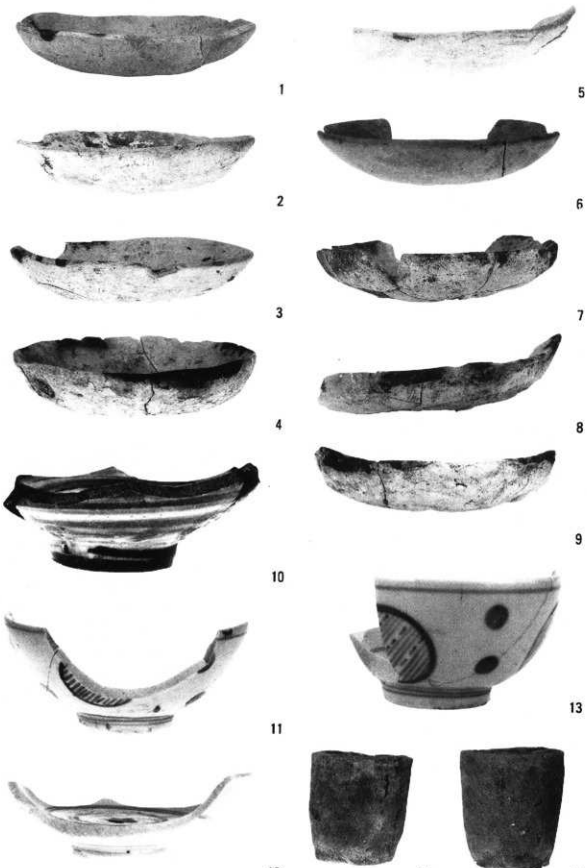
1・3・4は一石五輪塔，2は五輪塔の水輪，5～7は石碑



II期の遺物(5)

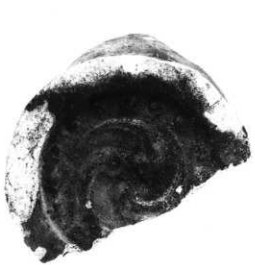
1～5（J-3F土坑），6・7（L-4瓦溜），8（H-2井戸）

1・2は巴文軒丸瓦，3～6は唐草文軒平瓦，7は丸瓦，8は銅製の杓子



Ⅲ期の遺物(1)

1～3・5・6（L-4A土坑），4・12・14・15（I-2J土坑），7～11・13（I-3F土坑）
1～9は土師皿，10は唐津焼の刷毛目碗，11～13は肥前焼の染付碗，14・15は焼塩壺


1

2

3

4

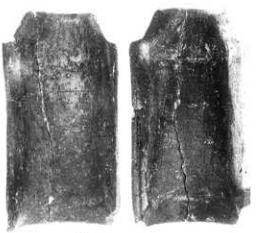
5

6

7

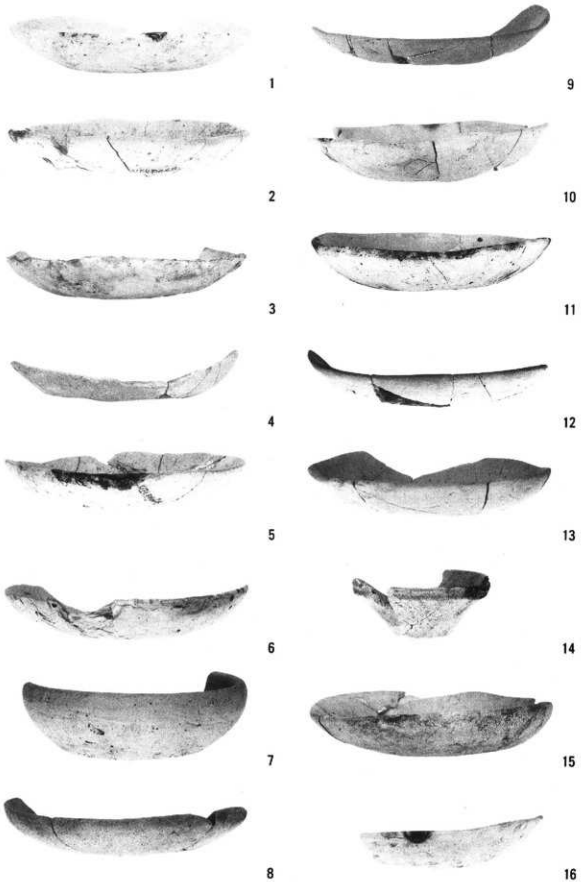
8

9 10


9 10

Ⅲ期の遺物(2)

1～5（I-3F土坑），6・7（I-3H土坑），8（J-3C土坑），9・10（K-2瓦管）
1～3は巴文軒丸瓦，4～8は唐草文軒平瓦，9・10は丸瓦



遺構外出土の遺物(1)

1～13・15・16は土師皿，14は擂鉢型の灯明具

1

2

3

4

5

6

7

8

9

10

11

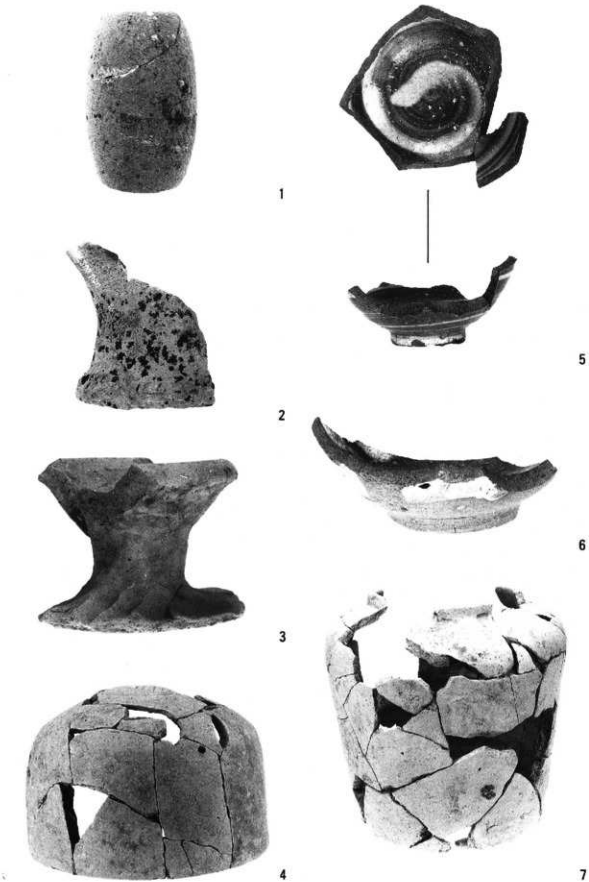
12

13

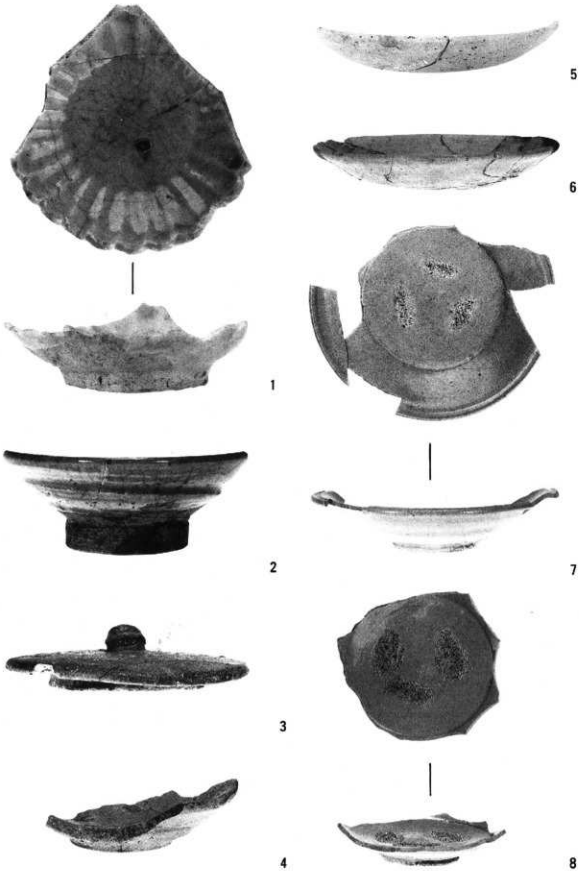
14

遺構外出土の遺物(2)

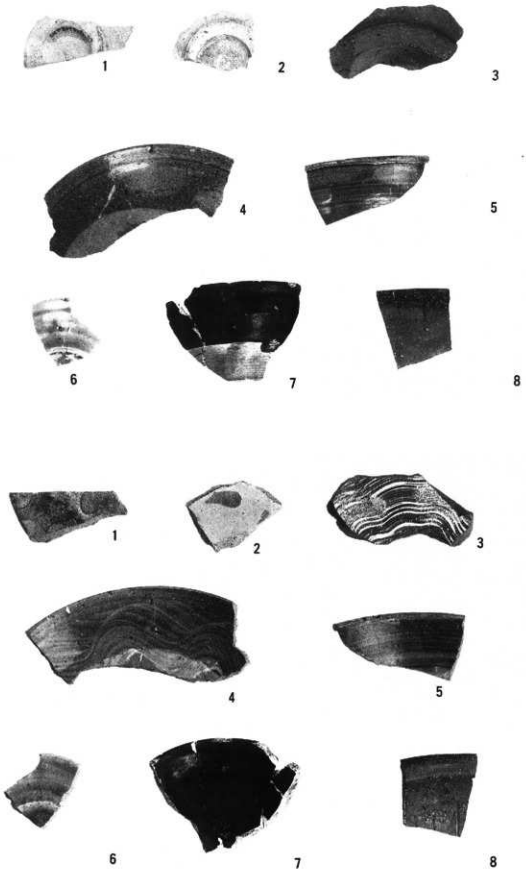
1～11は土師皿，12は焼塩壺蓋，13・14は焙烙



遺構外出土の遺物(3)
1は土錘，2～4は瓦燈，5は唐津焼の刷毛目碗，6は唐津焼の碗，7は土師質の壺



遺構外出土の遺物(4)
1・2は唐津焼の刷毛目小坏，3は壺，4・7・8は唐津焼の砂目積皿，5・6は土師皿



遺構外出土の遺物(5)

1は唐津焼の胎土目積皿，2は唐津焼の砂目積皿，3～5は唐津焼の刷毛目皿，6は瀬戸・美濃焼の灰釉皿，7は瀬戸・美濃焼の天目茶碗，8は丹波焼の擂鉢

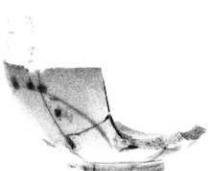
1

2

3

4

5



6

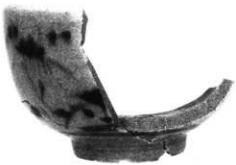
7

遺構外出土の遺物(6)

1は唐津焼の砂目積皿，2は肥前焼の染付碗（コンニャク印刊），3・4は丹波焼の擂鉢，5～7は肥前焼の染付碗

1

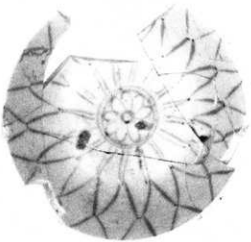
6



2

7

3



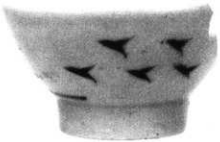
4

5

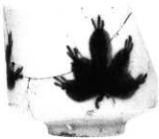
8

遺構外出土の遺物(7)

2は染付陶器碗，他は肥前焼染付磁器碗

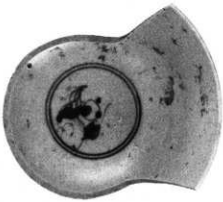


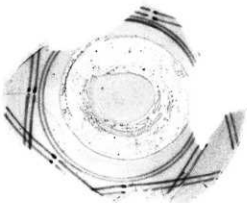
1

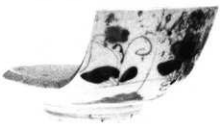


2

4







3

5

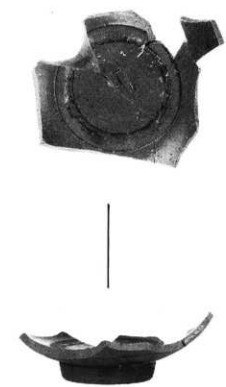
遺構外出土の遺物(8)
1～6は肥前磁器。1は広東碗，2は湯飲，3は鉢，4～6は皿

1

2

3

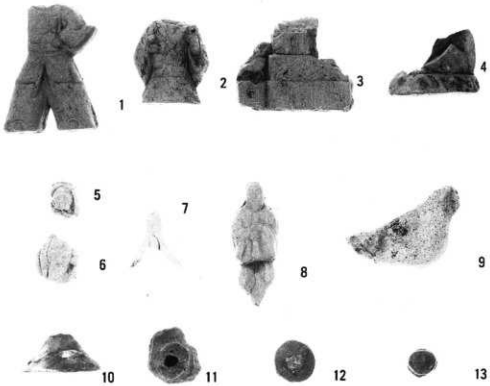
4



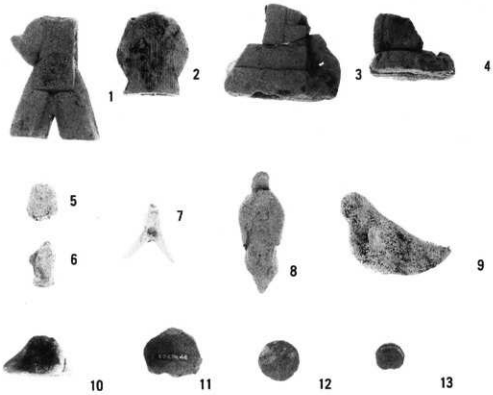
5

遺構外出土の遺物(9)

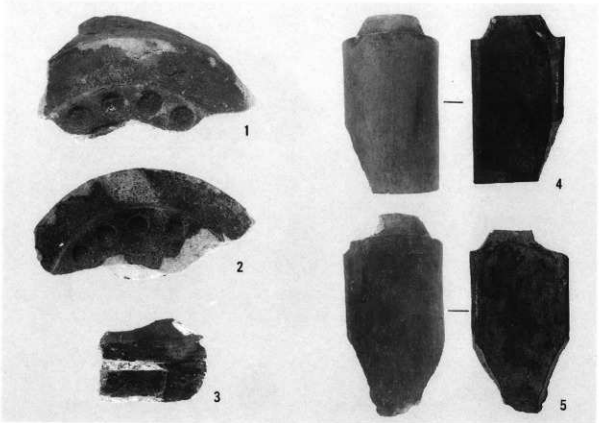
1は肥前焼の染付皿，2は銅緑釉の皿，3・4は肥前焼の染付皿



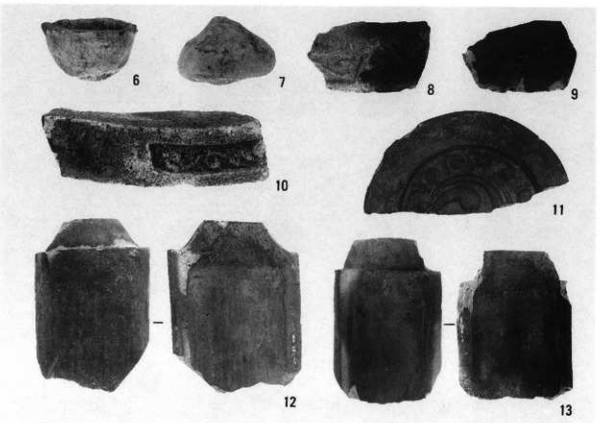
土製品（表面）



遺構外出土の遺物⑩



a．Ⅲ期の遺物(3)



b．遺構外出土の遺物(1)

1

2

3

4

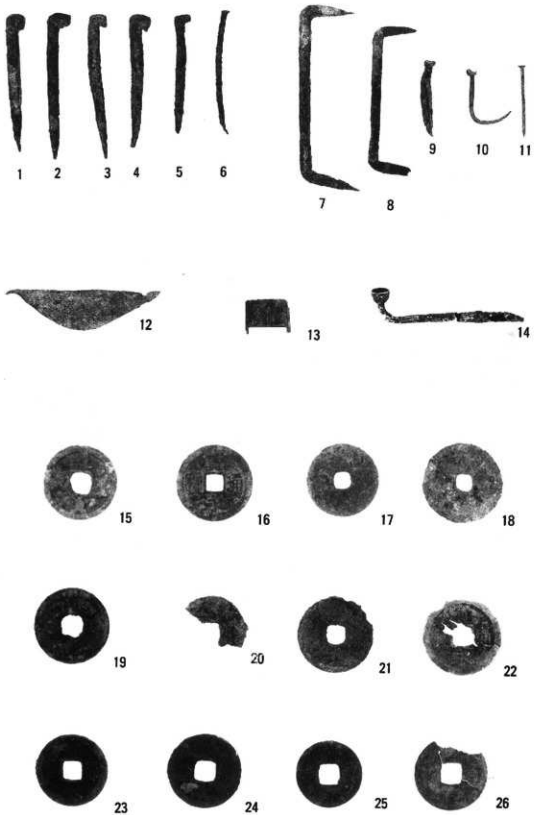
5

6

7

8

遺構外出土の遺物(12)



遺構外出土の遺物(13)

兵庫県伊丹市
有岡城跡発掘調査報告書Ⅵ

発行年月日　1988年3月20日

発　　行　伊丹市教育委員会
兵庫県伊丹市千僧1丁目
0727-83-1234

駒沢大学考古学研究室
世田谷区駒沢1-23-1
03-418-9281

印　　刷　(株)弘報社印刷